

ISSN 1348-8384



拓殖大学
語学研究

Takushoku Language Studies

2013.12

No. 129

目 次

〈論 説〉

宮澤賢治作品に描かれた

コミュニケーションの有り様について ……………千葉 一幹 (1)

日本語人初級学習者による

スペイン語音声聴取理解の問題点 ……………安富 雄平 (23)

インドネシア語における

「ber-動詞+前置詞」構造の前置詞選択 ……………末延 俊生 (49)

ライティングにおける文法指導の効果 ……………狩野 紀子 (75)

中国語の領属性“比”構文について……………平山 邦彦 (97)

現代中国語における量詞“台”について ……………永江 貴子 (121)

〈研究ノート〉

国友次郎と種子島敬輔の英語論文

— モンソン・アカデミーの

卒業式で朗読された英文の紹介と考察 —……………塩崎 智 (137)

〈資 料〉

ファン・デル・エンシーナ「牧人劇 (Églogas)」に現れる

レオン方言的特徴の考察 —「牧人劇Ⅱ」— ……………廣澤 明彦 (173)

拓殖大学語学研究 投稿規則・執筆要綱…………… (227)

Contents

〈Articles〉

The Problems of Communication
in Miyazawa Kenji's WorksCHIBA Kazumiki (1)

Algunos puntos difíciles de comprensión auditiva
para los estudiantes japonesesYASUTOMI Yuhei (23)

Opsionalitas Preposisi dalam Konstruksi
“Verba (*ber-*) + Preposisi”
dalam Bahasa IndonesiaSUENOBU Toshio (49)

The Effects of Grammar Instruction
in English Writing ClassKANO Noriko (75)

Possessive “bi” Sentences in ChineseHIRAYAMA Kunihiko (97)

A Study of the Liangci “Tai”
in Modern ChineseNAGAE Takako (121)

〈Study Note〉

English Essays recited by Japanese Students
at Monson AcademySHIOZAKI Satoshi (137)

〈Material〉

Algunas características leonesas que aparecen en las églogas
de Juan del Encina —Égloga II—HIROSAWA Akihiko (173)

〈論 説〉

宮澤賢治作品に描かれた コミュニケーションの有り様について

千 葉 一 幹

はじめに

宮澤賢治は、生前に出版した唯一の詩集⁽¹⁾『春と修羅』第一集の、この本の題名にもなった詩編「春と修羅」において「まことのことばはここになく／修羅のなみだはつちにふる」と詠った。

「まことのことば」は、通常仏教で言う「真言」と解釈されてきた。また、この詩に登場する「修羅」は、賢治自身のことを指すものと考えられ、したがって、「まことのことば」は、「修羅」＝賢治自身が追い求めるものとする事が出来る。実際、この詩で使われた「まこと」という語は、賢治がしばしば作品や書簡において使っている言葉であり、賢治作品さらに賢治という人間について考える上でキーワードと考えられている⁽²⁾。

この「まことのことば」が何を意味するかについては、すでに論じたことがあり⁽³⁾、ここではその意味については触れないが、賢治が「まことのことば」すなわち言語というものについて大きな関心を持っていたことは間違いない。

言語とは、それを介して人々が意思の疎通を図る手段であり、したがって、言葉が主題化されるということは、コミュニケーションに関心を持つ

ことと換言してもよからう。

事実、賢治の作品においては、このコミュニケーションがライトモチーフや隠れた主題になっている作品が多々ある。『春と修羅』と並んで生前に出版された童話集である『注文の多い料理店』に収められた作品もコミュニケーションを主題化した作品が見受けられる。表題作となった「注文の多い料理店」は、山に狩りに来たハンターと山猫との間での「注文」を巡る誤解がテーマの作品である。また「狼森と笹森、盗人森」は、未開の森に初めて入植した人間とその森の「先住民」（正確には狼、山男や黒い男）との交流・交渉を描いた作品である。また「鹿踊りのはじまり」は、鹿たちの言葉を理解出来る嘉十と鹿たちとの遭遇と別れを描き出している。さらに巻頭作である「どんぐりと山猫」においては、「めんどなさいばん」に呼び出された一郎と山猫やどんぐりとの「いちばんえらい」ものに関する定義を巡る言語的闘争が主題である。

『注文の多い料理店』に収められた作品だけでない。「竜と詩人」は、題名通り老竜と詩人との精神的（サイキックな）交流と詩の生成を主題化した作品だし、賢治が稿料をもらった唯一の作品と考えられる「雪渡り」は、人間の子供と狐との交流を描いた作品である。賢治の代表作である「銀河鉄道の夜」は、死者と生者との間でのコミュニケーションがそのライトモチーフと考えられる作品である。また同じく賢治の作品の代表作である「風の又三郎」もそうだ。その初期形「風野又三郎」では風の精霊とも言える又三郎と村の小学生との交流が、そして最終形である「風の又三郎」においては、人間化された高田三郎と小学生との交流が、描かれている。

このように賢治の多くの作品に於いては、コミュニケーションが主題化されている。

本稿は、賢治作品においてコミュニケーションを主題化した作品に焦点をあて、そこで描かれたコミュニケーションの在り方とその意味について考察を加えるものである。

1 異類間での意思の疎通を描いた「鹿踊りのはじまり」

賢治作品におけるコミュニケーションの問題について考察する上で注目すべきは、その多くが、人間と動物といった異類間での意思の疎通を描いている点である。

もちろんこれは、賢治の作品がいわゆる童話に分類されるものであり、擬人化された動物が多く登場することによるものである。ところで、コミュニケーションあるいは言葉の問題を考察する上で、より重要になってくるのは、意思の疎通よりもむしろ誤解や無理解といった意思の不疎通であり、つまりコミュニケーションにおける差異の問題である。

こうした差異について考える上では、近しい者同志、同類同士のコミュニケーションよりも、より隔たりの大きい異類間のコミュニケーションを取りあげた方が好都合である。なぜなら、異類間でのコミュニケーションのほうが、同類間のそれより差異の発生がより大きくなると考えられるからである。そもそも、コミュニケーションの必要が発生するのは、相互に異なるからであり、仮に完全な相互理解が成立したなら、その必要は生まれないはずだ。したがって、異類間のコミュニケーションを俎上にあげることは、こうした問題について考える上でより大きな示唆を与えるものと考えられる。

異類間のコミュニケーションを描いた賢治作品で注目したいのは、人間が異類の言葉を理解するが、自らはその言葉の発信者にはならない、ないしはなれないことがしばしば発生していることである。

使われている原稿用紙から最も早い時期に書かれた作品の一つとも考えられる「青木大学士の野宿」およびそれを後年韻文に改め改稿した「檜ノ木大学士の野宿」は、貝の火兄弟商会の依頼で上等の蛋白石を探索に山に入った大学士の冒険を描いた作品である。

「檜ノ木大学士の野宿」には以下のような場面がある。

あの時僕はお日さまの外に何か赤い光るものを見たやうに思ふんですよ。」

「それは僕も見たよ。」

「僕も見たんだよ、何だったらうね、あれは。」

大学士は又笑ふ。

「それはね、明らかにたがねのさきから出た火花だよ。パチッて云ったらう。そして熱かったらう。」

ところが大学士の声などは

鉦物どもに聞こえない⁽⁴⁾。

こうした描写は、鉦物採集や登山等でしばしば山歩きをした賢治自身の経験を反映していると考えられるが、鉦物などの無生物の言葉を人間である青木大学士は理解している一方、鉦物らは、人間の言葉を聞くことすらないという設定になっている。

こうした人間と異類（「檜ノ木大学士の野宿」では無生物だが）との一方通行的コミュニケーションの在り方そのものを主題化した作品に「はじめに」でも触れた「鹿踊りの始まり」がある。

『注文の多い料理店』に含まれたこの作品において、登場するのは農夫の嘉十と鹿たちである。

「鹿踊りのはじまり」は、その題名通り北上地方で現在も行われている鹿踊りの起源を語る童話である。膝が悪い嘉十は、山中にある湯治場に出かけた。その帰り道で栃と粟で作っただんごを食べ始めた嘉十は、それを少し山の鹿たちに食べさせようと残して去る。しかし、手ぬぐいを忘れたことに気付いた嘉十がその場に戻ると、そこにはすでに鹿たちが集まっていた。その様子を盗み見ていた嘉十は、なぜか鹿たちの言葉を理解できる

ようになっている。やがて嘉十は、その楽しげに踊る鹿の姿に心奪われ、自他の違いを忘れてその踊りの輪に加わろうとする。しかし、彼の姿に驚いた鹿たちに逃げられてしまうという話である。

この作品で注目すべき点は二つある。一つ目は、鹿踊りの起源は、この作品で記された嘉十の経験に由来するものであるが、その根源には嘉十が目撃した鹿たちの踊りがあるということ、つまり鹿という人間以外のもの、その外部に起源があるということである。

二つ目は、嘉十は、鹿たちの言葉を理解し、自他の区別を忘れて彼自身が発話して、その仲間に加わろうとしたとき、そこへの参入を拒まれてしまうということである。この作品の題名にある通り、この作品は鹿踊りの起源について語ったものだが、この鹿踊りの起源には、鹿たちの踊りへの参入を、換言すればコミュニケーションを拒絶された嘉十の痛恨の経験があるということだ。そして鹿に扮した人間によって踊られる鹿踊りは、嘉十が偶然に目撃した鹿たちの楽しげな踊りを再現するものであり、その点で鹿踊りは、鹿たちから疎外された嘉十の思いを想像的に回復するためのものであるということになる。

言語意識あるいはコミュニケーションという観点でこの作品の持つ二つの注目点についてどういうことが言えるか、考えて見よう。

2 作品の起源について

まず一つ目の点についてだが、鹿踊りの起源が嘉十の見た鹿たちの踊りにあるということ、すなわち人間の作り上げたものの起源が自然物にあるということ、こうしたことを賢治はその作品でしばしば言及している。

この「鹿踊りのはじまり」の末尾にも「それから、さうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすきとほつた秋の風から聞いたのです」⁽⁵⁾と語られているように、この「鹿踊りのはじまり」という作品自

体、賢治の創作ではなく、「秋の風」が賢治に語って聞かせたものだとしている。

こうした作品の起源に関する言及は、この「鹿踊りのはじまり」が収められている『注文の多い料理店』の「序」で述べられている。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。

ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとおつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません⁽⁶⁾。

『注文の多い料理店』に含まれた作品は、すべて「虹や月あかりからもらつてきた」ものだという。もちろん、これは単なるレトリックと見なすこともできる。しかし、自己の作品、言語の起源は、作家自身にはないという見方は、この「序」や「鹿踊りのはじまり」だけに見られるものではない。

「竜と詩人」は、この「序」や「鹿踊りのはじまり」で提起された言語

観、作品観を主題化した作品である。

詩賦の会でスールダッタは、その詩の素晴らしさにより詩人の王座から詩人アルタを去らせてしまう。しかし、彼の詩は、実は龍のチャーナタがいる洞窟の上で彼がまどろみのうちに聞いたものであった。彼の詩は、いわば龍の詩の盗作なのだ。そこで、スールダッタはそのことをまず龍のチャーナタに謝罪に行く。その場での龍とスールダッタとのやりとりがこの作品の主な舞台となっている。

謝罪にきたスールダッタに対して、龍のチャーナタはこう答えている。

スールダッタよ、あのうたこそはわたしのうたでひとしくおまへのうたである。いったいわたしはこの洞に居てうたったのであるか考へたのであるか。おまへはこの洞の上にてそれを聞いたのであるか考へたのであるか。

おゝスールダッタ。

そのときわたしは雲であり風であった　そしておまへも雲であり風であった。詩人アルタがもしそのときに瞑想すれば恐らく同じうたをうたったであろう。けれどもスールダッタよ。(ア)ルタの語とおまへの語はひとしくなくおまへの語とわたしの語はひとしくない韻も恐らくさうである。この故にこそあの歌こそはおまへのうたでまたわれわれの雲と風とを御する分のその精神のうたである⁽⁷⁾。

この龍の言葉は、賢治の言語観、作品観を集約的に示している。賢治にとって、作品ないしは作品の言語は、「雲や風」から与えられるものであり、自然の中に没入することで手に入るものなのだ。詩人は、自然との交歓状態から自らの作品言語をつかんでくるのである。

しかし注目すべきは、そのように他者の言葉を源泉として編み出された作品も、チャーナタの言葉に示されているように「おまへのうた」として、

その所有権はスールダッタに帰属するというのだ。

他者の言葉を起源とする作品＝言語が自己の帰属物になるというのは、一見奇異にも見える言語観、作品観だ。しかし、これは視点を変えてみれば決して奇異な見方ではない。

たとえば、私が今書いている論文は、私千葉に帰属するものと考えられるが、この論文を構成している要素である言葉は全て「日本語」という言語（ラング）に登録済みのものである。そういう点では、大きな変化を遂げつつも何千年の歴史を有する構造体としての「日本語」の一部ということになる。つまり私が今書いている論文の構成要素たる言葉は私が発明したものでなく、他者が使った言葉を私が習得して流用しているものである。ソーシャルが構造体として言語（ラング）とその日常的・具体的実践態としての発話行為（パロール）との対立として語ったことを示していると取れないこともない。

もちろん賢治自身の意図としては、そうしたソーシャル言語学的言語観を提示したというよりも、彼自身の素朴な言語観・作品観を語ることにあったと考えられる。というのも、賢治の創作方法の一つには、山野を闊歩しつつ、そこで見聞した風物から得たインスピレーションをその場でメモ帳に書き記すということがあったからだ。

ただ、ここで確認して置くべきことは、賢治にとって言語そして作品は、自己の外部にある自然あるいは他者の言葉が自己に飛来し、それを自己の作品・言葉として放出することで成立するものと見なされていてということ、換言すれば、自己の言語・作品は、外部の自然・他者の言葉を開発＝搾取することで成り立つものであったということである。

3 方言と標準語 — 花巻における疎外体験 —

「鹿踊りのはじまり」における注目点の二つ目、すなわち鹿踊りの起源

には、嘉十自身の疎外体験があるということについてここでは考えて見たい。

嘉十は、鹿たちの言葉が理解出来そこから自他の区別を忘却して鹿の踊りに参入しようとするのだが、では、嘉十が理解した鹿の言葉とはどのようなものであったのか。

嘉十はにはかに耳がきいと鳴りました。そしてがたがたふるえしました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。

嘉十はほんたうにじぶんの耳を疑ひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「ぢや、おれ行つて見で来べが。」

「うんにや、危ないじや。も少し見でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時だかの狐みだいに口発破などき糺つてあ、つまらないもな、高で栃の団子などでよ。」

「そだそだ、全ぐだ。」⁽⁸⁾

嘉十が耳にした鹿たちの言葉は、多分嘉十が日常使っていた北上の方言である。彼が毎日使っている言葉として、鹿たちの言葉が嘉十の耳に響いたからこそ、嘉十は自身と鹿との差違を忘却することにもなったのだ。

自分が普段使用している言葉を使うグループに参入しようとしてそれを拒絶されるという、この嘉十の体験は何を意味しているのか。

ここで考慮すべきは、賢治が生まれ育った時代についてである。

宮澤賢治は、明治 29 (1896) 年に花巻で生まれている。その後賢治は、明治 36 (1903) 年に花巻川口尋常小学校に入学している。賢治の過ごした少年時代は、方言ないしは日本語という観点で見たとき、いかなる時代

であったのか。

こうした視点で考える上で、最も重要な存在は、上田万年である。慶応3（1867）年に生まれた上田万年は、東京帝国大学国語研究室所初代主任教授を務め、その後東京帝国大学文化大学長、文学部長を歴任した当時から代表する国語学者である。

上田は、東京帝国大学卒業後大学院に進学後、明治23（1890）年よりヨーロッパに留学し、明治27（1894）年に帰国している。その翌年の明治28（1895）年に『国語に就いて』という著作を発表している。この本に収められた「国語と国家と」は、明治期以降の日本語のあり方を考える上で画期的なものとしてされる。なぜならば、ここで上田が展開した思想は、『『国語』と『国家』との結びつきを、より内的・有機的なものとしてとらえ、それを学問的装いのもとに論証しようとした」ものであったからだ⁽⁹⁾。

こうした国語観を元に上田は、日本人の言語生活において基準となる「標準語」という概念を提示する。明治28（1895）年に「標準語に就きて」という講演を行い、そこで初めて「標準語」という概念を日本に紹介した。そこで上田は、「現在の東京語」がとりわけ「東京中流社会の言語」が「標準語」になりうるものだとした⁽¹⁰⁾。

その後、上田が提示した考え方に沿った形で小学校における国語政策が展開されることになる。

明治33（1900）年に出された改正小学校令と明治36（1903）年に始まった国定教科書制度に基づき『尋常小学校読本』は書かれた。この『尋常小学校読本』は、「文章ハ口語ヲ多クシ用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取りカクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ其統一ヲ図ルヲ務」とするという考え方により編纂されたものであった⁽¹¹⁾。

この教科書では、取り分け「綿密な発音矯正が」企図されていたという。「東北地方における『イ』と『エ』、『シ』と『ス』の混同、東京における『シ』と『ヒ』の混同、九州地方におけるダ行とラ行の混同などの『発音

矯正ノ便ヲ図リテ排列』されてい」た⁽¹²⁾。

明治36年といえば、賢治が小学校に入学した年である。賢治は小学校という公教育の空間において、自身がそれまで家庭などにおいて使っていた花巻言葉すなわち東北弁を「矯正」されるべき言語として認識するように導かれていったのだ。

こうした標準語政策の影響を最も顕著に受けたのは、沖縄であった。悪名高い「罰札」「方言札」と呼ばれたものの使用である。児童が学校において強制的に標準語を話させるため、方言を話した者に罰として首に縦6センチ横3センチの木札をさげさせたのだ。沖縄でこうした罰札が最初に使われたのは、明治40（1907）年のことだ。大正6（1917）年には山口沢之助によってこの制度がさらに強化されたという⁽¹³⁾。

東北でも同様の罰札の使用があったというが、賢治が通った小学校でこの罰札が使用されたということは確認できない。しかし、当時の標準語政策を考慮すれば、少なくとも賢治にとって自身の母語というべき花巻弁が「矯正」されねばならない、敢えて言えば「恥ずべき」言葉であるという意識が植えつけられたことはほぼ間違いないだろう。

賢治自身、方言についてどのような思いをもっていたか、直接それについて語った言葉は残されていない。しかし、賢治の、「標準語」と方言についての考えをある程度伺い知ることのできる証言がある。

賢治が花巻農学校で教員をしていた時の同僚であった堀籠文之進は、学校における賢治の講義についてこう語っている。

宮沢さんは、なかなか人気があったもので、宮沢さんの講演（花巻農学校で農事講演会……引用者補）は、方言でなくて標準語でやりましたが、ときどき、ゼヒ覚えてもらいたい大事なところなどは、わりやすく方言を使いました⁽¹⁴⁾。

また、同じく堀籠は、賢治の、花巻農学校の学生との交流についてこう語っている。

行くときは（岩手山登山……引用者補）、ひょっと思いついたように、かんたんにでかけます。何人かは必ず連れてゆきます。「××君行かねっか」という風に花巻弁でさそいます。授業のときでない時は、生徒とはたいてい方言で話します。田舎の人や町の人と話すときも花巻弁です⁽¹⁵⁾。

この堀籠の証言において注目すべきことは、二つある。一つは、賢治は教室での講義は、原則「標準語」で行ったということ、その一方で賢治は、私的場では、花巻弁を使っていたということである。学校という公共空間での使用言語は「標準語」であるということは、賢治が小学校入学時に始まった標準語政策を賢治は忠実に守っていたということになる。

二つ目は、農事講演会のような外部の人間が参加する会において賢治は、「標準語」と方言を使い分けたということである。堀籠は「ゼヒ覚えてもらいたい大事なところなどは、わりやすく方言を使いました」と言っている。これは、裏を返せば「標準語」での説明では、参加者の多くが内容を理解できない恐れがあったということである。

上田万年は、「標準語」は「東京中流社会の言語」であるべきとし、この上田の主張に沿うように小学校の教科書も「東京ノ中流社会ニ行ハルルモノ」を基準としていた。つまり「標準語」とは、単なる東京語ではなく、「中流」以上の人々の、つまり一定以上の教育を受けた、インテリ層に属する人々の使う言葉であったのだ。したがって、地方においても「標準語」を巧みに操る者は、決して庶民ではなく、知識階級に属するものとして、庶民とは距離を置いたところで生活するものであったのだ。

実際賢治は自身を花巻においては「財ばつ」と呼ばれる一族の総領息子

として「社会的被告」の立場にある者と見なされていたと語っている⁽¹⁶⁾。花巻で、私的場において花巻弁で町の人々とコミュニケーションを図ったとしても賢治は、「標準語」を使用できる者としてどこか外部の人間のような扱いを受けたはずだ。とすれば、「鹿踊りのはじまり」において嘉十が受けた疎外体験、すなわち、鹿たちが嘉十自身が普段使っている東北弁で会話していることから自他の区別を忘れ、その輪の中に参入しようとして、結局疎外されたという嘉十の経験も賢治自身が花巻で持った体験の反映とも解釈可能なのだ。

4 東京における疎外体験とその想像的回復としての鹿踊り

しかしまた、この「鹿踊りのはじまり」はもう一つ別の解釈も可能である。

賢治の甥にあたる宮沢淳郎は、『伯父は賢治』において以下のように語っている。

石川啄木とよく対比される宮沢賢治も、もちろん、れっきとした花巻弁の使い手であった。年譜によれば、修学旅行や一時的な上京を除き、賢治がはじめて東京に長期間滞在したのは大正七年の暮れから明くる年にかけての数か月である。入院したトシの看病のため、母とともに病院近くの旅館に宿をとった。はっきりした証拠はないが、このとき、方言にまつわる失敗談がいくつか生まれたかも知れない。

注目に値するのは、大正十年一月から八月までの在京期間である。家業を継ぐのがいやなのと信仰上のことで父親と対立し、いわゆる家出を敢行したのであった。小さな印刷所で謄写筆耕のアルバイトをしながら、国柱会という宗教団体で奉仕活動に従事した。

国柱会の布教方法に道路布教と称するものがあり、近くの上野公園

あたりで、ビラ配りや演説をしたらしい。そのうちに、会の幹部の高知尾知耀なる人が、「賢治君は詩歌文学が得意らしいから、ひとつ文学を通じて布教してみてもどうか」と勧めたようである。裏をかかれば、「賢治君のズーズー弁ではかえって逆効果だから、それよりはいくらかましな文章を生かして布教してみてもどうか」と言われたようなものである。

(中略)

方言に限らず、さまざまな面で、われわれは中央への劣等感を抱く場合がある。その劣等感を、エネルギーのもとにするかどうかによって、結果に大きな違いが生じる。啄木、京助、賢治などは、方法こそ異なれ、それぞれ岩手県人としての立場を積極的に生かした好例であろう⁽¹⁷⁾。

ここで宮沢淳郎が述べたようなことが賢治に起きていたかどうかはわからない。ただ、現在と違い、賢治が生きた時代にはテレビもインターネットもなかった。ラジオ放送が始まったのも、この『注文の多い料理店』の出版された翌年大正 14 (1925) 年のことである。当時、地方で生活していた人々が東京で使われている「標準語」に日常的に触れることは非常に困難であった。したがって、花巻農学校では、巧みに「標準語」を操るように花巻の人々に思われたとしても、東京においては、賢治の話す「標準語」が訛りをもったものとして周囲の人々には受け取られていた可能性は高い。

とすれば、嘉十の受けたこの疎外体験は、宮沢淳郎が想像した、賢治が東京で体験した疎外体験の陰画的表象と、捉えることも可能だ。つまり、「鹿踊りのはじまり」における嘉十の疎外体験は、東京において十分に「標準語」を使いこなすことができなかった、あるいは本人は巧みに「標準語」を使いこなしているつもりでいて、実はそこで出てしまう訛りによっ

て東北出身者と見なされ、精神的疎外体験を持った、そうした賢治の体験の裏返しとも考えられるのだ。

こう考えた場合、次のようなことも言えるのではないか。

「鹿踊りのはじまり」とは、鹿踊りという民俗芸能の起源を語る作品であった。その起源とは、嘉十という農夫が持った疎外体験にあった。とすれば、鹿踊りという民俗芸能の意味は、その疎外体験の想像的回復にあったということになる。

ポストコロニアリズム的視点で賢治の諸作品を論じた西成彦は『森のゲリラ 宮沢賢治』の中でこの「鹿踊りのはじまり」についてこう指摘している。

「鹿踊りのはじまり」は、今日も東北に伝わっている「鹿踊り」の起源を、剽窃の文化として説明している。しかもそれは征服者が被征服者に対して行う篡奪行為の結果でも、平伏の証に相手に舞を舞わせるような意味での強要でもなく、もっと姑息な文化継承の手段を用いたものとしてである。ミメシスとしての芸能とは、要するに、文化の剽窃なのである⁽¹⁸⁾。

鹿たちの立場から見ると、この鹿踊りは人間によって「剽窃」されたものなのだ。折角手に入った栃団子を食べようとみなで楽しく踊っていたら、嘉十の闖入により、その踊りも中断を余儀なくされ、かつ栃団子も食べ損ねてしまった。あまつさえ自分たちの楽しい集いを妨害した嘉十ら人間たちは、今度は、鹿の姿に扮して、自分たちの愉快な宴を再演して楽しんでいる。こう見ると、鹿踊りとは、鹿たちの踊りを人間の芸能として「剽窃」したもので、換言すれば、^{イクスプロイット}開発＝搾取したものであるということにもなる。

「鹿踊りのはじまり」が一度はその仲間への参入を拒絶された者による略奪の物語と解釈した上で、さらにこの「鹿踊りのはじまり」をコミュニ

ケーション的視点でみるとどうなるか。

嘉十は、最初、鹿たちの仲間に加わることを拒まれた。それを会話の輪への参加の拒絶と捉えると、会話における発話主体になることの失敗と見なすことができる。そして、嘉十ら人間による鹿踊りの再現＝「剽窃」は、自らを発話主体として立ち上げる行為と見なすことができる。

「鹿踊りのはじまり」とは、コミュニケーションにおける主体化の闘争、そのヘゲモニーの争いを描いた作品と見なすことが出来るのだ。

おわりに

賢治作品におけるコミュニケーションの問題を論じた本論考を閉じる当たり、最後に「どんぐりと山猫」を取りあげて見ておこう。

「どんぐりと山猫」という作品は、冒頭でも触れたが、『注文の多い料理店』に収められたもので、「めんどなさいばんしますから、おいでんなさい」という呼び出しで、山猫のところへ赴いた一郎の、裁判における活躍を描いた作品である。

この作品については、すでに多くの論者がそれぞれ注目すべき論考を発表している。

安藤恭子は、権力関係という視点から「どんぐりと山猫」という作品を批判的に読み解いている⁽¹⁹⁾。また、中野新治は、一郎と一郎への山猫の召喚状の代筆をした馬車別当とのやりとりを方言と標準語という観点で論じている⁽²⁰⁾。また、米村みゆきは、同じく一郎と馬車別当の応酬を当時の教育とりわけ綴り方教育や口語と文語の問題等と結びつけて論じている⁽²¹⁾。

こうした論考は大いに参考になるが、私がこの作品において注目したことは、何より発話の場における主導権争い、闘争の在り方を生き生きと描き出していることである。

発話の場における闘争は三つの領域で展開されている。

まず一郎と馬車別当のやりとりである。

山猫の召喚に応じて山へと赴いた一郎は、しかしなかなか山猫のところにとどり着けない。一郎は、最後に出会った「おかしな形の男」（馬車別当）に山猫のことを尋ねるとすぐに戻ってくると答え、そこから両者の対話が始まる。

「そんだったら、はがき見だべ。」（馬車別当・引用者補）

「見ました。それで来たんです。」（一郎……以下交互に会話が進む・引用者補）

「あのぶんしやうは、ずるぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしさうに言ひました。一郎はきのどくになつて

「さあ、なかなか、ぶんしやうがうまいやうでしたよ。」

と言ひますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまつ赤になり、きものゝえりをひろげて、風をからだに入れながら、「あの字もなかなかうまいか。」ときゝました。一郎は、おもはず笑ひだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらゐには書けないでせう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生つていうのは、尋常五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあはれに聞えましたので、一郎はあわてゝ言ひました。

「いゝえ、大学の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔ちう口のやうにして、にたにたにたにた笑つて叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」⁽²²⁾

中野新治が指摘したように、馬車別当の言葉は方言であり⁽²³⁾、他方一郎

は標準語で話している。もちろんここには標準語と方言を巡る位階構造が反映されており、方言を話す馬車別当が相対的に愚かであり、一郎が聡明な人として描かれている。しかし、ここで両者の関係は、標準語話者＝優れた者、方言話者＝劣った者という関係だけに解消できない別のものがある。

一郎の「五年生」という言葉に馬車別当は「尋常五年生」ではないかと「あはれ」な様子で問い返す。すると一郎は「大学校の五年生」と答える。

一郎がこうした答え方をしたのは、一つには哀れな馬車別当への思いやりによる。しかし、それは単に優位の者が劣位にある者に示す同情とは異なる。というのも、もし、ここで正直に「尋常五年生」と答え、馬車別当の反感を買ってしまっただけでは、目的である山猫の裁判に参加することも困難になると思われたからだ。だからこそ、相手の機嫌を損ねないことが必要と判断され、先に述べたような答え方をしたのだ。

一郎は、標準語—方言という、当時の日本の言語空間における階層構造に依拠すれば優位にある者として登場しつつ、そうした言語空間とは異質の山猫ワールドにおいて、その階層的優位を振りかざすことで招く危険を察知し、「五年生」という語を巡る解釈を改変することで、相手を欺き危機を回避するという、狡知を見せている。

二つ目は、この裁判の対象である、どんぐりにおける闘争である。どんぐりたちは、頭がとがっていること、頭が丸いこと、大きさ、背の高さ、押しっこの強さ、といった異なる基準によって、自己の優位を説いていた。この争いの終結が困難なのは、この争いが特定の基準による評価を巡るものでなく、それぞれの評価基準の優劣を争っているからだ。これはたとえば言えば、足が速いことと計算が速いことの優劣を問うようなことである。それを決定するためには、条件設定が不可欠である。たとえば、オリンピックの100 m 走に出場するという条件下では、足の速さが有意味であり、計算の速さはほぼ無意味だろう。反対に数学オリンピックに出場するとい

う場合は、足の速さには意味がなく、反対に計算の速さは重要となる。このことをどんぐり間の争いに則して言うとうどうなるか。どんぐりの言い争いとは、上で述べた条件設定を争っているということになる。換言すれば、どんぐりとはいかなる存在なのか、どこにその存在意義があるのかというアイデンティティの確立の問題、どんぐりの主体化の方法の問題がそこで争われていることになる。

だから、どんぐりのこの争いに終止符を打つには、結局どんぐりとは何かという問いに対する答えを提示するしかない。

そして三つ目は、一郎と山猫との、このどんぐりの争いを巡る解決法の闘争である。

どんぐりの争いの解決法として一郎の出した答えは以下のようなものであった。

「そんなら、かう言ひわたしたらいゝでせう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです。」⁽²⁴⁾

一郎の導き出した答えは、どんぐりは「ばか」さにその存在意義をみいだすべきだということである。

ここで注意すべきことは三つある。それは、一郎の答えが、どんぐりたちの主張のどれにも荷担していないという点。二つ目は、この答えが、誰にも望ましいものではない点である。そして、三つ目は、もしこの一郎の主張が正しいとするとどんぐりたちは「えらい」ということになる。なぜなら特定の基準内で優劣を競うのではなく、容易に答えの出るはずもない、基準そのものの優劣を競っていたどんぐりたちは、愚か者の極みであるからだ。そして、さらに重要なのは、この答えが自己言及的に一郎にもあてはまってしまうということである。こうした優れた解答を導き出した一郎

は、優れている点で、もっとも「えらくない」存在ということになる。ここで示されているのは、一見自己の言説によって優位に立ったと見えた者が、その自身の言説により逆に窮地に陥るという転変極まりない様子である。

他方この一郎の答えを受けて、山猫はなんと答えたか。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつてゐなくて、あたまのつぶれたやうなやつが、いちばんえらいのだ。」⁽²⁵⁾

ほぼ一郎の答えを踏襲しつつ、ひとつだけ一郎の答えにはなかった要素を入れている。それは「あたまのつぶれた」という要件である。

ここには二つの意味があるだろう。

一つは、「あたまのつぶれた」という表現を入れることで、そうした条件にあてはまらない山猫は、この言明が自己言及的に自身の評価に反映されないだろうということだ。

もうひとつは、一見一郎の言葉の鸚鵡返しのように見えながら、そこに一郎の答えにはない新たな要素を導入することで、そこに主体の痕跡を巧みに紛れ込ませていることだ。

この裁判の後、人間の世界に戻った一郎は、二度と山猫から裁判への召喚状がこないことを「用事これありに付き、明日出頭すべし」という文言での呼び出しを拒んだことに求めているが、むしろ、一郎の言葉を一見反復しただけに見えて、実は新たな要素をそこに盛り込むことで発話における主体性を確立していたことに求めるべきなのだ。つまり、一郎に依拠した発言をしたようで、実は山猫はその主体性を搾取していたからこそ、もはや一郎の存在は不要になったのだ。

このように、「どんぐりと山猫」というテキストには、二重三重の言語を巡る闘争が描かれており、発話におけるヘゲモニーの問題が見事に描か

れている。

「まことのことば」を追い求めた賢治。そうした賢治の姿から予想されるのは、争いのない、あらゆる生きものが融和して生きている姿ではないか。実際、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」⁽²⁶⁾ という賢治の言葉から推察される、望ましいコミュニケーションの在り方は、ユートピア的、理想主義的色彩が濃いものと思われる。

しかし、この「どんぐりと山猫」などの賢治作品に描かれたコミュニケーションの有り様は、むしろそうした賢治の理想主義的在り方に反するものである。そこで描かれたのは、優位にあると見えた者が、次の瞬間には劣位に立たされるという、コミュニケーションの場における激しいヘゲモニー闘争の様子である。闘争と言っても、それは、血で血を洗うような凄惨なものではなく、この「どんぐりと山猫」に示されたようにユーモラスなものである。

いや、賢治が希求した「まことのことば」自体、永久不変の固定化された理想的言語ではなく、他者と自己の差違を前提にして、その差違によって賦活化される生き生きしたコミュニケーションだったのではないか。

少なくとも賢治作品は、対話の場における主導権争いを生き生きと描き出している。そこにコミュニケーションを主題化した賢治作品の魅力の源泉もあるだろう。

《注》

- (1) 賢治自身は、この『春と修羅』第一集を詩集と呼ばれることを忌避し、心象スケッチと命名していた。
- (2) 『新宮澤賢治語彙辞典』（原子朗著、東京書籍、2000年、665頁）で、賢治がこの語を60回以上使っていると指摘している。
- (3) 『賢治を探せ』（講談社、2003年）において、「まことのことば」をフロイトおよびジャック・ラカンの精神分析の理論と結びつけて論じた。
- (4) 『新校本宮澤賢治全集』第9巻（1995年、筑摩書房）（以下、『新校本』と

- のみ記す) 368 頁。
- (5) 『新校本』第12巻, 98頁。
 - (6) 同前, 7頁。
 - (7) 同前, 305頁。
 - (8) 同前, 89頁。
 - (9) イ・ヨンスク『「国語」という思想』, 岩波書店, 1997年, 118-124頁。
 - (10) 同前, 138頁。
 - (11) 同前, 150頁。
 - (12) 同前, 150-151頁。
 - (13) 田中克彦『ことばと国家』岩波新書, 1993年, 118-119頁。
 - (14) 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房, 1983年, 94頁。
 - (15) 同前, 104頁。
 - (16) 『新校本』第15巻, 406頁。
 - (17) 宮沢淳郎『伯父は賢治』八重岳書房, 1989年, 75-76頁。
 - (18) 西成彦『森のゲリラ 宮沢賢治』岩波書店, 1997年, 4頁。ただ、西はこの「鹿踊りのはじまり」を嘉十と鹿たちとの関係を征服者と被征服者という関係として捉えている。しかし、筆者は、鹿たちによる嘉十参入の拒絶こそ、鹿踊りの起源にある事件と考えるべきと捉えており、征服者=嘉十(人間)、鹿たち=被征服者という単純な関係ではないと考えており、その点で、筆者の見方は、西のものとは異なる。
 - (19) 安藤恭子『宮沢賢治 力の構造』朝文社, 1996年。
 - (20) 中野新治『宮沢賢治 童話の読解』翰林書房, 1993年。
 - (21) 米村みゆき『宮沢賢治をつくった男たち』青弓社, 2003年。
 - (22) 『新校本』第12巻, 12-13頁。
 - (23) 中野新治, 前掲書。
 - (24) 同前, 15-16頁。ここでの一郎の主張は、「雨ニモマケズ」の「デクノボートヨバレ」に対応する。しかし、「雨ニモマケズ」の持つ悲壮さがなく、あっけらかんとしたユーモアがある。
 - (25) 同前, 16頁。
 - (26) 『新校本』第13巻, 9頁。

*本論考は、2011年度に支給を受けた拓殖大学研究助成費の成果として発表されたものである。

〈論 説〉

日本語人初級学習者による スペイン語音声聴理解の問題点

安 富 雄 平

目 次

1. 音声聴取と外国語教育
2. 聞き誤りと聴理解を妨げる要因
3. 聴取書き起し演習
 - 3.1 *Canción para la Navidad*
 - 3.2 学生による書き起し
 - 3.3 聴取の評価と音声現象
4. 音声聴取書き起し演習の要領
 - 4.1 聴取の音響的留意点
 - 4.2 聴取の聴覚音声学的留意点
5. 聞き取りの誤り
 - 5.1 音声同定の誤り
 - 5.2 セグメンテーションの誤り
6. おわりに

キーワード：外国語教育，音声聴取，スペイン語の聴取書き起し

1. 音声聴取と外国語教育

言語音声を認識し、聴理解する過程においては実に様々な要因が関与

している。聴覚の受容器が知覚した物理情報を脳が言語音声として認識し、言語情報として理解する。言語情報として処理するということは、音の受容と並行して①ターゲットの選択と追隨、②意味の理解と音声連続の予測、③ノイズの排除、④欠落の補完、⑤音声情報と意味情報の記憶、⑥既知情報との整合、⑦後追い修正などを行うことであると考えられる。

一般に人が言語音声を聴取する時、その意識は、常に最大の注意力を維持し集中して聴き取りを行っているわけではない。「明瞭な聴取部」と「曖昧な聴取部」とがあっても音声の持っている余剰性や当該言語の文法知識、音韻や調音基底に関する知識、発話内容に関する知識などによって、聴取理解に必要な十分な情報として補完し調製しているのである。

母語の聴取理解に関しては通常、脳による補完と調製が十分に機能しているが、外国語の初級学習者が当該外国語の音声を聴取理解しようとする時には脳内処理が不十分で、様々な形で不都合を生ずることになる。また、学習者が音声聴取をする時の音響機器の性能や、スピーカ（音源）と聴取者の位置関係、壁やガラス、家具などによる音声の反射、吸収や回折などに加え、振動や騒音、人の声などのノイズが聴取理解の妨げとなることは多くの学習者が経験するところである⁽¹⁾。

さらに、初級学習者にとって問題となるのは不完全な文法知識、音韻や音声、調音基底に関する経験の不足、理解語彙の少なさなどで、これらが聴取理解を不完全なものとしている。

外国語教育・習得の段階で、聴取理解の訓練は非常に重要かつ有効な手段であるが、従来の外国語音声聴取指導では、音声を繰り返し聞くことによって「耳を慣らす」という表現で聴取訓練を推奨することが多かった。しかし、このような指導法では、うまく耳が慣れて聞き取れればよし、そ

(1) これらの聴取を妨害する要因のうち、再生装置の性能や音波の持つ物理的音響的性質の関与については多くの語学教員があまり正確に把握していないように思われる。

うでなければ聞き誤りとして、いわば all or nothing の評価が指導者と学習者相互の暗黙の了解として行なわれ、聴き誤りが音響音声学的また聴覚音声学的にどのような現象で、誤りの原因や誘因が何かということについてはほとんど説明がなされなかったようである。

本論では、筆者が大学外国語学部スペイン語学科の初年度の学生に行っている音声聴取の演習で、実際に学生らが聞き誤った事例を基に、具体的な指導内容に言及しつつ、日本語人外国語学習者の音声聴取理解に関する問題点を探る。

2. 聞き誤りと聴取理解を妨げる要因

音声言語による情報伝達における誤りは、①発信者側の原因による誤り、②伝達経路中の支障による誤り、③受信者側に起因する誤りと、これらの複合によるものが考えられる。

発信者側の責による誤りは、調音の誤りや呼気段落形成の失敗などによるリズム・イントネーションなどプロソディーの誤りのほかに、間違った語彙の使用やレジスター認識の過誤など発信者の表現上の錯誤や誤った状況把握、辞書的また百科事典的知識の誤りなどによっても引き起こされる。また、誤りとまでは言えないかもしれないが、受信側に誤解をさせる要因となる発信者個人の特徴的な発話の歪み（極端に小さな声、舌のもつれを起こさせるような早口、特定の音の側音化、口蓋化、弱化など）や音声現象（音声環境によって通常起こりうる変化）も考慮の対象とすべきである。

一方受信者側の誤りは、不注意な聴取、騒音や別の人の声などノイズの混入、視覚による妨害、文脈の誤認、予測の誤り、語彙や呼気段落の認識にかかわるセグメンテーションの誤りなどが誘因となる。辞書的また百科事典的知識の多寡はこちら側でも聴取理解を妨げる可能性がある。

発話者個人の発声発話上の癖や、受信者個人の当該言語音声に関する許

容範囲などはどちらか一方だけが原因となることはなく、複合的な要因と考えられる。

伝達経路における支障要因としては、会話空間の音響的な特性（残響や極度の減衰要因）や音声伝播の妨げとなる騒音、聴覚以外の感覚に対する過度の刺激介入などが考えられる。また、電話など通信機器を介する場合、テレビ・ラジオなど一方向通信機器を介する場合、音声記録媒体から再生する場合、機器の特性や通信環境や再生環境などが問題となる。

外国語の初級学習者が当該外国語の音声聴取理解をする場合も、母語の場合と同様の事象が問題となることは言うまでもない。外国語の音声や音韻が必ずしも容易に習得され得ないため、聴取が不確実または不可能となることもある。また母語の干渉や、既知の語彙表現が十分でないことと不完全な文法知識に起因する音声連続の区切りの見誤りが原因となって、聴解に支障をきたすことも重要な要因である。

紀州藩公事方役人であった蘭学者岩崎俊章がまとめた『東航紀聞』⁽²⁾ 巻の五、アメリカ州風土記事（中）言辞の章に、「鏡 エシペホ △ペホ」（下線筆者以下同）や「記憶の良きを ペレンデル」など、espejo の es- の部分を繫辞の ser と勘違いしたと思われる例や aprender の a- を前置詞 a と間違えた（あるいは聴き落とした）かと思われる例が記録されている。この書物にはほかにも、17 世紀の漂流船乗りが初めてスペイン語と接して、「かわいそうに オオウレシート △ポブレシート略シテポブレトバカリモイフ。」と ¡Pobrecito! を日本語の発話のように聞きなしたと思われる例や「薪 レニヤ △レンジ」と leña の ña をガ行鼻音として聞いたのではないかと思われる事象などが記載されていて興味深い⁽³⁾。

(2) 1851（嘉永4）年成立。

(3) 池田皓編『日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流』pp.408-413. 原典は蘭学者岩崎俊章が、1841年に漂流しイスペインヤ船に救助され1843年メキシコから帰国した船員善助から聴取し、1845年に遅れて帰国した弥市からも体験を聞いてまとめ、藩公に献上したもの。記載事項中の△印は弥市から聴取した項目である。

3. 聴取書き起し演習

外国語学習の方法の一つに、歌を歌って語彙を豊かにするという考えに基づくものがある。この学習法は広く効果が認められているようで、テレビやラジオの外国語講座に歌のコーナーが設けられていたり、外国語学習の初級テキストに歌が取り入れられていたりする。スペイン語教育の世界にも『絵と歌で学ぶスペイン語』という一冊まるまるスペイン語圏の歌で勉強する参考書⁽⁴⁾や、『スペイン語入門』や『スペイン語初級』のように付属の音声教材として本文編のほかに歌とカラオケのための伴奏編が付属しているもの⁽⁵⁾もある。

歌が教材として優れているのはひとり語彙を豊かにすることに力あるからではない。歌詞は日本語では七五調、スペイン語では8音節（octosílabos）や11音節（endecasílabos）と、言語文化特有のリズム嗜好を反映していることが多い。メロディーもまたその文化の持つ伝統的旋律の好みを体現している。したがって外国語学習に歌唱練習を取り入れることは語彙力増強に加えて、リズムとメロディーに慣れ親しみ、発音と発声法の訓練にリラックス効果が加わった学習を行うことになるわけである。

気に入った歌の歌詞を書き取るという練習は、学習というよりも遊びの感覚で実行できるので、初級学習者にも積極的に勧めたい学習法である。そこで、筆者は担当している大学のスペイン語学科必修科目「初級文法」の課題として、ある程度学習が進んだ後期にスペイン語歌曲の歌詞書き起しを課している。

音源をCDで配布し、曲を繰り返し聞きながら歌詞を書き取るという課

(4) 細川幸夫著。大学書林、1975。

(5) 小林一宏他著。日本放送協会学園通信教育スペイン語講座テキスト、1989（入門編）、1991（初級編）。

題である。のちの修正を考えて行間を十分開け、不明瞭な部分やまったくわからない部分は空白にして、後から周辺を書き足していくつもりで、フレーズごとに書き起す。わからない単語や表現の部分があってもよいので、とりあえずスペリングを気にせずにローマ字で書き取る、聞き取れないところは空白のままでもよいし、どうしてもという個所はカタカナ書きでもよいので聞こえた（と思われる）通りに書き取るよう指示する。

完璧を期すタイプの学生の無用なストレスにならないように、提出は不完全なままでよい、我々の言語音声聴取がどのようなメカニズムなのかを明らかにするための材料なのだと念を押す。書き起しにあたって歌詞の意味を意識しろともするなども敢えて指示せず、辞書を使って単語の確認をしろともするとも言わず、個々の判断に任せておく。

12月の最後の週に、各自の書き起し原稿のコピーを提出させてから、数人の学生に1フレーズずつ板書してもらい、少しずつ繰り返し聞き直しながら、みんなの意見をまとめて修正していく。過年度の課題は José Luis Perales の *Canción para la Navidad*⁽⁶⁾ であった。

3.1 *Canción para la Navidad*

以下に筆者による書き起しで歌詞を引用しておく。

Canción para la Navidad

José Luis Perales

(6) 教材として使用した音源は José Luis Perales. *Mis 30 mejores canciones*, 1994 (Sony Music Entertainment, 4779812) によった。Perales の歌は数種類の音源が発売されているが、演奏はオンラインでも視聴できる。たとえば：<http://www.youtube.com/watch?v=2JiETZ93jXg> (2013年9月28日参照確認。ただしエンディングの部分が教材として使用した音源とは異なる)。

Navidad, es Navidad,
toda la tierra se alegra
y se entristece la mar.

Marinero, ¿a dónde vas?
Deja tus redes y reza,
mira la estrella pasar.

Marinero, marinero,
haz en tu barca un altar.
Marinero, marinero,
porque llegó Navidad.

Noches blancas de hospital,
dejad el llanto esta noche,
que el Niño está por llegar.

Caminante sin hogar,
ven a mi casa esta noche,
que mañana Dios dirá.

Caminante, caminante,
deja tu alforja llenar.
Caminante, caminante,
porque llegó Navidad.

Ven soldado, vuelve ya

para curar tus heridas,
para prestarte la paz.

Navidad, es Navidad,
toda la tierra se alegra
y se entristece la mar.

Marinero, marinero,
haz en tu barca un altar.
Marinero, marinero,
porque llegó Navidad.

Marinero, marinero,
haz en tu barca un altar.
Deja el odio y ven conmigo,
porque llegó Navidad.

3.2 学生による書き起し

学生がどのように聴取するか、学生 A、学生 B、学生 C の三人の草稿を全文引用して実際の例を検討する。三人ともスペイン語学科一年生（当時）で、まじめに課題に取り組んだ多くの学生の代表である。

学生 A

「Navidad es Navidad toda la tierra se alegra セン triste セル mal
marinero a donde vas de ハトサブレ de シレーサ mira la estrella pasa
marinero marinero hacen トゥーバルカ ウナタ marinero marinero
porque ゲボ Navidad

Noches blancas de hospital de ハデリアント esta noche. El niño está por ゲーガ カーミナンテ シノガー de ナミ casas esta noche que mañana díos ディーガ カーミナンテ カーミナンテ de ハトアルフォー ル ハニェタール カーミナンテ カーミナンテ porque ゲボ Navidad.

En sol dado ウェルベージャ. Para clar tu セリーヤス para prestar te ラパー

Navidad es Navidad toda la tierra se alegra. セントゥリステ se ラ マ

Marinero marinero hacen トゥーバルカ ウナタ

Deja con comido

Porque ゲロ Navidad.」

学生 B

*もしかして II の音濁ってないですか？

「Navidad es Navidad toda la tierra se aleja (*alegra?*)

(*y?*) ser triste serán (*será?*) mal

Marinero, ¿a dónde vas? Deja tu 「rebe (*reve?*) su ireisa (*cirensa?*)

[*rebes?* y *resa / reza?*]

mira la estrella pasa (*pasar?*)

Marinero, Marinero hacen (*hace en? / haz en?*) tu barca una alta (*altar?*)

Marinero, Marinero porque llegó Navidad

Noches blancas de hospital deja del rianto (*lianto? / de llianto?*) esta noche

el niño está morega (*por llegar?*) ↓何か音があるような…?

Caminante sin hoja (*hogar? / sinoja?*) ○en a mi casa esta noche que manga (*mañana? / mangana?*) 「la hospilar [*dios dira? (mira?)*]

Caminante, Caminante deja tu alforja llenar (*llena?*)

Caminante, Caminante (*Cambiante?*) porque llegó Navidad

○En (*Quién?*) soldado vuelve ya para curar tus heridas, para

↑ 変な音が入ってる…?

「trestar (*prestate?*) de (*en?*) la paz [*prestarte la paz?*]

Navidad es Navidad toda la tierra se alegra y 「ser triste será mal
[*se entriste? / se entristese(ce?) la mal?*]

Marinero, Marinero hace (*haz?*) en tu barca un altar (*altal?/alta?*)

Marinero, Marinero, porque llegó Navidad

Marinero, Marinero hace (*haz?*) en tu barca un altar

Deja el novio (*el o...? / oído? / odio? / orion?*) rincondito

(*rincondido? Rincondico?*)

↑ バ行?

Rincondigo? / bien contigo?) porque llegó Navidad

バ行, ラ行, ダ行が聞き分けられない。」

学生 C

「1 Avira es Navida torada diaras serera

Sentraste mar Marirero a dónde va pesafue de se siedo sirbeza
mira less eña paz

Marirero Marirero pasetuna caunatalta

Marirero Marirero olceduguego navidad

Marirero Marirero caceuna cartia

Marirero Marirero por que eno navidad

2 Noches bulanca es hospital de hadoriando

esta noche ninguesta por nega

Avi dante si no ga me cami casa esta noche

imadanal hospital

Avidante avidante vejar por na

Avidante avidante por que eno navidad

Cavicante cavicante me japor por que eno navidad

Cavidante cavidante por que eno navidad

3 Enisadad prestar envelta para cular se deja

para te lapa

navidad navidad pare estar las sella

Marinero marirero qceuna caunatalta

Marinero marirero por que eno navidad

Marinero marirero aceuna caunatalta

Marinero marirero por que eno navidad

Ah..., Ah..., Ah...

Marirero marirero aceuna caunalta

mehai compled por que eno navidad.」

スペイン語の知識のある人がこれらの草稿を見ると、おそらく最初に目につくのが正書法の乱れであろう。しかし、この課題は音を書き取るのが目的なので、大文字の使い方、句読法、スペリングなどは気にするなど言っているのだからこれは仕方がない。

Aはカタカナも駆使してかなりよく音を書き取っている。初級者なので知らない単語も多く、そのために語の区切りを誤って認識している箇所が多いものの、音声はかなりよく聞き取っている。Bは1年生の12月の段階ですでにスペイン語の音のみならず文法や語彙もかなり定着していたことがわかる。また、歌詞の意味もある程度理解していると思われる。さらに、この課題の趣旨もよく理解しているようで、繰り返し聞いた結果、

複数の可能性を列挙してあったり、認識できない音の所在を指摘したり、歌手の発音上の特徴にも言及したりしている点は見事である。Cは後に留学して実力をつけ、四年後には DELE の中級に合格する実力をつけて卒業するのであるが、このときはまだ、未知の単語にあふれた歌を一生懸命書き取ったという感じである。その分歌としてはよく聞きこんだようで、歌詞に番号を振ってあったのはこの学生だけであった。

3.3 聴取の評価と音声現象

教室での演習では、学生の草稿をもとに、1 連ずつゆっくり検討し、学生の意見を求め、なぜそのように聴取したのかを筆者が解説する。二、三人に最初の連を板書してもらい、演奏を繰り返し再生して、現場で修正も加えてもらう。正しい綴りで書き取る dictado とは違う、音声学的には書き取りを誤っているわけではない、と強調しながら進めるので、学生の無用な緊張はない（はずである）。以下最初の三連を例に細かく見てみよう。

- ① Navidad es Navidad toda la tierra se alegra セン triste セル mal
- ② Navidad es Navidad toda la tierra se aleja (*alegra?*)
(*y?*) ser triste serán (*será?*) mal
- ③ Avira es Navida torada diaras serera Sentriste mar

A のカタカナの表記がクラスメイトの哄笑をさそう。再度当該箇所
の演奏を再生し、学生 C にもう一回出だしを聞くように促すと、ほかの人の板書を見ているせいもあって、ちゃんと歌いだしの n の音が聞こえたようだ。③に Navida と書いてあるのは語末の d の発音で [ð] → [θ] → 無音という音声の変化が起こるので、ディクテーションでこう書かれては困るが、音声表記と考えれば誤りではない。このような解説を加えながら

進めることによって、音声聴取書き起し演習が、いわゆる外国語の書き取りとは違ったものであると理解されるようになる。単なる書き取りでは綴りの誤りや語境界認識の誤り、未知の単語などは「間違い」として処理されてしまうであろう。音声の聞き取りはそのように単純なプロセスではない。不完全な聴取理解の過程にも、正しく聞き取れている部分、正しく処理されている部分、正しく補われている部分がある、ということを理解するのがこの演習の目的で、以後の外国語音声習得に対する学生の心構えを実践的にも学問的にも正しい方向へ向かわせるのがねらいである。

se alegre は toda la tierra が聞き取れれば、繰り返し聞くうちに主語と動詞の関係で alegrarse の変化形であることに気が付くであろう。この部分③は d と r は調音位置が近く聴覚印象も似ているので、聞き違えたか。幼児の発音習得段階で r → d の混同があることや、音位転換 (metátesis) という音声現象のあることを説明すると、音声学的にありえない聞き違いではないことが理解される。事実、アクセントやイントネーションの関係で、連続する異なる音節の r と d とが逆に聴取されるような例が他の多くの学生の草稿にも散見される。

③の草稿をもう少し検討すると、dieras の最初の d は母音間に挟まれて t が有声化する可能性がある。^{せんどうおん} 顫動音の rr は聴き落としたか、しかし指摘すれば聴取は難しくない。dieras se の部分は再帰代名詞 3 人称単数形の語頭の s の音を前後に分けてしまったセグメンテーションの誤りである。se alegre のような語境界で母音が続くと ea が一拍になってしまうというスペイン語の韻律規則⁽⁷⁾はこの機会に教えておくことにする。一拍になったことで音色の変化を聞き逃すことがあるかもしれない。

(7) sinalefa: Quilis & Fernández. *Curso de fonética y fonología españolas*. p. 150 に Uno de los rasgos más acusados del español es la tendencia a la sinalefa, o sea la rroguación en una sola sílaba de grupos de vocales que resultan del enlace de unas palabras con otras en la cadena hablada とある。

l と r の聞き取りは日本語人にとっては必ずしも容易ではないので、この種の聴取書き起しの演習ではしばしば取り違えが起こる。B はこのことにはっきり気が付いていて、3.2 の草稿の随所に l か r が迷っている記載がある。この連の最後の mar の語末の r が①と②で l になっているが「mar 海」という単語はすでに学習済みのはずだが、特に歌詞の意味を考えるというようなことをしなかったのだろう。聴取と同時に意味の理解が進むようになれば、歌詞に繰り返し出てくる marinero から、「船乗り→海」という連想が期待できる。その段階に達した学生なら tierra : se alegra と mar : entristece との対比もヒントになるのだが。日本語には通常子音が連続することがないので、スペイン語の重子音の知覚が不安定になることがある。③で gra の g が脱落したのはそのためであろう。

①の「セン tristeセル mal」は se entristece la mar をかなり正確に書き起している。知らない語にも関わらず音声は見事に聞こえているのである。「セル」の「ル」は定冠詞 la の側音が日本語のラ行子音として聞き取られているのかもしれない。あるいは mar が通常男性名詞なので⁽⁸⁾、定冠詞なら el になるはずだという修正が加えられているかもしれない。演

(8) mar は不定性名詞 (sustantivo de género ambiguo) である。スペイン語の初級学習段階では男性名詞として教えることが多い。宮城・山田監修『現代スペイン語辞典 改訂版』東京：白水社、1999 には男性名詞として記載されており、「抽象的な意味では女性名詞」という注釈がついている。上田・ルビオ編『プエルタ新スペイン語辞典』東京：研究社、2009 には男性(女性)とあり、語法注釈に「ふつうは男性名詞であるが漁業などで一部女性名詞にして使う……」とある。高垣敏博監修『西和中辞典第二版』東京：小学館、2003 には男性名詞(文学・海事用語では女性名詞)とある。

文法書の記述は辞書よりも詳しいものもあるが、高橋正武編『新スペイン広文典』東京：白水社、1982、p. 77 に「mar:『海』; 空や陸に対して海のとときは男性; 具体的に部分としての海や波・水などの意識が強いときは女性名詞として使われる」とあり、本教材の歌詞の用法とは逆の説明になっている。山田善郎監修『中級スペイン語文法』東京：白水社、1995、p. 43 には「el/la mar『海』(普通は男性名詞だが、詩や海事用語では女性名詞)」とある。

また、Seco, Manuel. *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española, 9ª ed. renovada*. Madrid: Espasa Calpe, 1988 には mar. El género

奏を聴くと明らかに la と歌っていて、聞き違えることはないので、後者の場合文法知識による過剰訂正ということになる。

接続詞の y など機能語は初級学習者においては聴き落とされることが多いが、②は不確かながら音の存在に気付いている。Bはおそらく triste という語を知っており、しかし *entristecerse* という動詞とは気づかず、文法的に考えて [ser + 形容詞] という構造にしたと思われる。*entristecerse* の ce の部分は [s] [θ] の両方の発音が行われているが、初級学習者は知識としては se[se] と ce[θe] の発音の違いを知っていても、実際の発音では両方とも [se] になっていることが多いし聴取においても違いを意識していないことが多い。どちらの発音も容認されるので、指導者が ce や ci を [θe] [θi] と発音する母語話者の先生であったり、学生が当該発音を区別する地域に滞在したことがあったりする場合以外は、1年生の段階ではっきり音の違いを認識していることは少ない(演奏者である Perales は [θ] と発音するスペイン語人である)。この三人とは別の数人が ce の部分を聴覚印象が [θe] に近い [fe] と聞いている⁽⁹⁾。

②で *serán* (*será?*) となっているのは [entris'teθe la 'mar] の下線部を *será* と認識したようだ。興味深いのは後続する m の鼻音という特徴を

de este nombre en el uso general es masculino: [...] Pero en el uso de la gente de mar es femenino: [...] とある。スペインの小学校国語教科書(2年)のテキスト本文に *Mi pueblo es pequeño. Está a la orilla de la mar. / Todos bajamos a la orilla de la mar...* などの記述があり、同テキスト中の *galerna* という語に欄外注釈があって、*Galerna: Tempestad en el mar.* という風に、特に違和感なく不定性名詞として混在している (*Equipo Tropos. Antos. Lecturas y comentarios. 2º E. G. B., Madrid: Anaya, 1988, pp. 10-13*)。

Rafael Alberti のよく知られた詩の一節に “*El mar. La mar. El mar. ¡Sólo la mar!*” とあるのは同一テキスト中の混在例である。

(9) 無声唇歯摩擦音 [f] と無声歯間摩擦音 [θ] は音響的にも聴覚的にも似ている。M. シュービゲル, 小泉保訳『音声学入門』東京:大修館書店, 1980, p. 65, また同 p. 86 参照。

知覚していて、それが、語彙と文法の知識と合わさって ser の直説法・未来・3人称・複数 *serán* の語末の *n* として認識されたという点である。単音の発音から調音方法だけを取り出して論ずる、このような分析はほとんどの学生が初めて経験するものなので、音声学・音韻論の導入サンプルとしても効果的な事例である。

- ① *marinero a donde vas de* ハトサブレ *de* シレーサ *mira la estrella pasa*
- ② *Marinero, ¿a dónde vas? Deja tu* 「rebe (*reve?*) *su ireisa (cirensa?) [rebes? y resa / reza?] mira la estrella pasa (pasar?)*
- ③ *Marirero a dónde va pesafue de se siedo sirbeza mira less eña paza*

学生 A の草稿は教室の空気を柔らかくしてくれる。母語や当該外国語の既知の表現、既知の他の言語の表現などの音声連鎖に引き寄せて認識することを「聞きなし」というが、ハトサブレは見事だ。鎌倉銘菓がスペインのクリスマスに出てくるというのはさすがに無理があるとはいえ、*plato* を *plátano* と間違えたり、*hierba aromática* を *hierba romántica* あるいは *hierba románica* と聞いたり、*que sufren dolor* を *-su frendo-* (<friend 英語?) と誤って分割したりする例はいくらでも見つけることができる⁽¹⁰⁾。

(10) *plato* (皿) を持ってこいと言われて台所まで行ったところバナナ (*plátano*) が置いてあったのでそれを持って行ってホストファミリーの食卓を大爆笑の渦に巻き込んだ学生は、個々の単語は知っていたけれども「台所の棚から皿をもってきて」というホストママの発話を完全には聴取理解していなかったのかもしれない。失敗を招いた理由は聴解力の問題に加えて短期記憶と視覚刺激が要因に加わったとも考えられる。*aromática* と *romántica* の例は「芳香のある」という単語を知らなかったことに加えて弾き音 [r]

出だしは③の *va* が 3 人称になっている点を除けば三人ともきっちり聞き取っているし、恐らく意味も分かっている。*Marirero* は 3 番の歌詞では *Marinero* と書いてあるので単なる書き間違いであろう⁽¹¹⁾。

deja tus redes y reza の部分は①「*de* ハトサ (正確には最後のサの子音)」までと「*レ de シレーサ*」はおおむね正しい。特に後半は A がこの草稿をそのまま読めばスペイン語人は正しく理解するに違いない。②は *deja* が *dejar* の 2 人称・単数に対する命令形であることがわかっているだろう。しかし次の *tu* は複数形語尾 *s* が聞こえていないのだということに最後まで気が付いてない。*redes* の *d*[*ð*] を *b*[*B*] と聞いているようだが、*d* が音声環境の影響で摩擦音の異音 [*ð*] になっていることから調音位置の異なる [*B*] として知覚したと思われる。続く *-s* や *reza* は *redes* (網=漁網) が未習の語であったため、語末の *s* の音に母音添加して音節化してしまったのであろう。このため、先行する *tu* が本当は複数形 *tus* であることにも気が付かなかった。しかし、この部分で B が筆者の課題設定の意図をよく理解して聴取の可能性を検討していることが認められる。課題の指示で特に辞書で意味まで確認しろという要求はしていないのだが、B がここで辞書を見ていたら、最後の *reza* (*rezar* の 2 人称に対する命令形) が「祈る」という意味で、文脈にぴったりの語だということに気が付いたであろう。③のこの部分はむずかしい。*pesafue de se siedo sirbeza*

と顫動音の [*r*] との違いが瞬間的にできなかったということかもしれない。[*r*] と [r] の区別は日本語人スペイン語学習者にとっては少なくとも単音レベルでは容易である。最後の例は、別の年の歌詞書き取り演習で見られたセグメンテーションの誤りであるが、この個所の音声だけに注目すると確かに外来語のフレンドと聞こえる発音である。*femenino*→**feminino*, *castellano*→**castillano*, シミュレーション→*シュミレーションなどのような不慣れた単語や化石化した単語は誤った記憶によって聴取が歪曲されることがある。

- (11) 広東語母語話者の日本語学習においてナ行音とラ行音の混同が見られることは日本語教育において広く知られているが、日本語母語話者のスペイン語学習で同様の現象が起きているとは考えにくい。

下線部は(r)edes y reza で何とか音をたどっているが、その前のところがわからない。de の音や s の音が繰り返すので、そのあたりの音が実際以上に何度出てきたような気がしたのかもしれない。

mira la estrella pasar は pasar の語末が聞き取れない。これが不定詞であるという文法知識によって補完される部分である。③の mira less en a paza は下線部で la + estrella という sinalefa の聞き取りが難しいことを示している。za の綴りは許容される発音が [θa] と [sa] の二つがあるので、恐らく [θa] のつもりであろうが、C がどちらで聞いたかが知りたいところである。

- ① marinero marinero hacen トゥーバルカ ウナタ marinero
marinero porque ゲボ Navidad
- ② Marinero, Marinero hacen (*hace en? / haz en?*) tu barca una alta
(*altar?*)
Marinero, Marinero porque llegó Navidad
- ③ Marirero Marirero pasetuna caunatalta
Marirero Marirero olceduguego navidad

この辺りまで来ると①のカタカナ表記がかなり正確に音を書き取っていることがほかの学生にもわかってくる。haz en tu barca un altar の出だしを hacen と聴取しているのは hacer の 2 人称・単数に対する命令形よりも直説法・現在・3 人称・複数形のほうが、この段階までに聴取した頻度が各段に多いからである。音声学的には全く問題ない。「里親と砂糖屋」「滝のおトイレと多機能トイレ」のように通常の発話であれば語彙の知識と文脈によって聞き分けるものだからである。②は単なる聞き取りではなく、語彙や文法の知識を動員して語を同定しようという試みが見える。辞書で語義を確認すればたやすく正書法にのっとった正しい綴りで書き起し

が完成するであろう。③の pasetuna caunatalta は出だしの p の音がおかしいが, asetu や caunatal はある程度うまく音を拾っている。ただ, 同音反復が多いのは C が未習語の音連続に接したときに音節を繰り返して聞いたような錯覚を起こしやすいためかもしれない。

porque llegó Navidad の部分では, スペイン語を知っているものにとって①「porque ゲボ Navidad」のカタカナ部分は奇異に感じられるが, ③も guego と書いていることからわかるように, llegó の ll の部分 [ʎ] が後続の g [ɣ] によって逆行同化的に摩擦音として聴取されたのかもしれない。B の草稿の欄外上部に「*もしかして ll の音濁ってないですか?」とのコメントがあることから, 学生らの有声硬口蓋側面接音の聴取が不完全であることが推測される⁽¹²⁾。また llegó の g の部分は, 摩擦音の異音 [ɣ] のように聞こえることがあるので, 「ボ」に引き寄せて聴取したものである⁽¹³⁾。

4. 音声聴取書き起し演習の要領

初級スペイン語学習者に音声聴取の演習を課す目的は, 聴覚と言語音聴取との関係に目を向け, 音声によるコミュニケーションが個別言語の境を越えて有効に機能する優れた有機的仕組みであることを理解し, 言語音声の持っている様々な特性を学問がどのように扱うのかを体験する学問的経験の端緒とすることにある。言語音声を音声学的に定義する時, 声帯振動

(12) 演奏では明瞭に有声硬口蓋側面接音 [ʎ] であるから, B のコメントはこの部分に関しては該当しないが, ll の綴りに対応する [ʎ] がしばしば異音 [dʒ] になることは初級段階でも多くの学生が知っているため, llegó が語として正しく認識されると逆にこの知識が干渉することもある。

(13) ほとんどの学生は B と同様に porque llegó と書きとっている。しかし por que llevo navidad や porque llevo navida, porque llevo Navidad などの草稿も見られるので, この聴き誤りは例外的なものではないことがわかる。

の有無，調音位置，調音方法の三要素に言及するが，聴取の誤りにおいて，有声音・無声音の聞き違い，調音位置を聴覚情報から判断する際の誤り，調音方法を聴覚情報から判断する際の誤りが必ずしも三つ同時に起こるわけではなく，むしろ，どれか一つを誤るということが多いことに気づかせることが大切である。

言語音声の聴取は一音一音を正確に聞き取っているのではなく，明瞭な聴取部と曖昧な聴取部とがあって，幾重にも仕掛けられた余剰情報がそれを補完する。音声の余剰情報に加え，語彙の知識，文法の知識，意味の即時の理解と文脈の把握，発話内容の予測，内容に関する既知の様々な知識など様々な要素が現実の言語コミュニケーションを円滑に機能させているのである。

4.1 聴取の音響的留意点

記録媒体，再生装置，アンプ，スピーカーやヘッドホンなどの性能は，原語音声聴取に際して重要な要素であるにも関わらず，現代の製品の十分な高品質に信頼して注意を喚起されることが少ないようである。これは大きな間違いで，初級者が学習中の外国語音声をモニターに内蔵されているスピーカーやラジカセのスピーカーで聞くのとオーディオシステムのスピーカーで聞くのとでは母語のときには気づかない明瞭度の差が顕著に表れる。そこそこの性能のもので支障なく聴取できるのは，それが母語（あるいは熟達した外国語）だからである。

4.2 聴取の聴覚音声学的留意点

普通の教室でテープやCDを再生する場合や自宅でラジカセなどを用いて（スピーカーを介して）聴く場合は，音源と反射物，聴者の位置によって聴こえ方や明瞭度に違いが出る。聴取しにくい部分は音源の位置を変えてみたり，音源から耳までの距離を右と左で変えてみたりするとうまく聴

こえることがある。左右の耳(左右の大脳半球)の言語や音声処理の違いを利用して、ヘッドホンを左右逆にして繰り返し聴いてみるのが有効な例もある⁽¹⁴⁾。

筆者の経験でも、大学院生のときにスペイン映画のセリフの書き起しをしていて、どうしても聴き取れない部分が出てきたので、ヘッドホンで聞くのをやめて、音声学実験室の大きなスピーカから出力したところ、はっきり ¡Mira, ese cuatro por cuatro! というセリフが聴きとれた。また、学生時代に自宅でモノラルのラジオカセットテープレコーダーを使って Paco Ibáñez の歌の書き取りをしていたときに、スピーカが筆者の右耳に近い位置にあったのだが、椅子をぐると回して、左耳がスピーカ側にきたときにそれまで聴き取れなかったフレーズが聴こえたこともある。

再生速度は聴取とはあまり関係がなさそうである。CALL 教室などで用いる音声聴取用ソフトの中には再生速度を変更できるタイプのものもあって、学生が興味を示すが、これはほとんど意味のないことが経験上わかっている。再生速度を遅くしたからといって聴取困難な部分がたちどころに聞き取れるということが決して起こらないので、やがて学生らもこの機能を使わなくなる。

5. 聞き取りの誤り

学習中の外国語音声の正しい聴取を阻害する様々な要因は単独で、また

(14) 言語音(母音・子音)やその他の人の声、虫の音、動物の鳴き声などの処理と、楽器音や機械音などの処理が、大脳の左右半球で機能分担されていることに由来するものと考えられる。言語に関する大脳の働きについては、高木貞敬「言葉と脳のしくみ〈ことばは脳のどこにあるのか〉」『月刊言語第六巻第四号』東京：大修館書店、1977、pp. 37-46 参照。また、角田忠信「日本人と西欧人の文化型と音認識——日本人の精神構造母音節——」『月刊言語第三巻第六号』東京：大修館書店、1974、pp. 34-41 に左右の脳機能の分担について興味深い記述がある。

しばしば複合して、母語の場合ならば十分な余剰性を持つ言語音声の聞き取りを困難なものとする。日本語人初級スペイン語学習者の聴取書き起しに見られる誤りは、音声を誤って同定する場合とセグメンテーションを誤る場合とに分けて考えられる。

5.1 音声同定の誤り

スペイン語学習者の聴取書き起し演習にみられる誤りには、(1)調音位置に由来する特性の誤判定、(2)調音方法に由来する特性の誤判定、(3)声帯振動の有無の聞き誤り、(4)音の聞き落とし、(5)過剰聴取などがある。また、同定できずに(6)判定不能となる場合も多い。

(1)調音位置の判定を誤った例は *se entristece* → *sen triste fue* のように無声歯間摩擦音を無声唇歯摩擦音に誤ったもの⁽¹⁵⁾、*deja el llanto* → *deja el lianto* のように硬口蓋側面近接音を歯茎側面近接音の口蓋化⁽¹⁶⁾ (+i) として聴き取った例がみられる。(2)調音方法に由来する特性の誤判定の例は *mar* → *mal* のように歯茎顫動音を歯茎側面近接音に誤ったもの、*toda* → *torra* や *¿dónde irá?* → *ronridad*⁽¹⁷⁾ のように有声歯茎破裂音を(有声)歯茎顫動音に誤ったものとその逆などの例がある。(3)声帯振動の有無の聞き誤りの例は *mismo* → *mizmo* や *por las mañanas* → *por laz mañanas* のようにスペイン語の /s/ の有声の異音 [z] を聞き取ったものや、(4)音の聞き落としの例は *se alegra* → *se alera* や *acusación* → *acsa-*

(15) *fue* の二重母音化 (日本語人の感覚としては母音 u の挿入) は(5)の過剰聴取である。もちろんこの聴取例はセグメンテーションも誤っている。

(16) この聴取は音声学的には一応理に適っている。スペイン語の ll の音が口蓋化した l の音 [li] であるという考えもあるが *halláis*(hallar)と *aliáis*(aliar) の二語が同音衝突せずに存在することから一般に認められてはいない。

(17) アクセントのパタンのせいで後ろの *rá* が *dad* (この音節にアクセントがあり、音節末の d は発音されないことが多い) と聴取された例。

ción⁽¹⁸⁾, etcétera → etcetra⁽¹⁹⁾ など, のほかに se entristece → sen tristece のように同じ母音が連続する場合の微妙な時間長の差が認識できない場合にもみられる。(5)過剰聴取は無い音を聴いてしまう現象で haz en tu barca → hace un tubar ca... のように母音 u を補ったもの, vuelve ya → vuelve ella⁽²⁰⁾ のように先行する語の語末の母音を後続する語の語頭に分割聴取したもの, clima → cilima [ki'lima] や mil → mili, Gracia → Garacia のように子音連続の間に音韻としては存在しない母音を認識したもの⁽²¹⁾, japonesa → japonessa や doce → dosse⁽²²⁾ のように母音から子音への渡りに現れる無音部を促音としてとらえたものなどがある。(6)判定が困難で, 何か音があるが何だかわからないという現象は, bolsa → bo?sa のように調音の構えが l から s に代わる部分の音が学習者の持っている音韻にマッチングできない場合や y entristece la mar → ? se entristece la mar や Ven soldado → ? En soldado のように弱化した発音が同定されない場合にも生ずる。

これらの誤聴取や聴取困難は学習が進み, 当該外国語の知識が十分に定着すると, 母語の場合と同じように文法や文脈などいろいろな情報から正

(18) 日本語の「ク」の母音無声化の傾向がスペイン語音聴取に干渉した例。

(19) スペイン語の etcétera は四音節語である。日本語（外来語）の「エトセトラ」と母音挿入と音節化 (tra/tora) という外来語形成規則による過剰訂正が原因と思われる。

(20) ya と lla の子音はスペイン語では同じ音素に属するので, 語を間違えて理解したようだ。この部分だけを見ると vuelve ella は動詞の人称・数と主語代名詞の人称・数とが一致していて文法的に問題はない。

(21) 子音間に出現する母音的要素を vocal esvarabática という。Quilis, Antonio, *Fonética acústica de la lengua española*, pp. 296-301.

14 世紀ごろの日本語人が耳で聞いて書きとめたガラシャ (Gracia) やキリスト (Cristo) はこの子音間の母音的要素を母音として聴取したために定着したかな表記である。

(22) ce の部分の原音が [θ] の場合, 日本語の促音として聴取したために調音位置も歯間から歯茎に誤った可能性がある。ただし ce のスペリングに対して [s] を用いるスペイン語人も多い。

しく聴取されるようになる。

5.2 セグメンテーションの誤り

音素配列の知識や語彙、統語規則などの知識が完全でない初級学習者が語境界を見誤るのは仕方がないが、このことから逆に音声聴取はうまく行われているということを理解すると学生の学習意欲が向上する。

se entristece la mar を sen triste fue la mal としたり sentriste se la mar?, sentriste fuera mar, sen turiste se la mal などとした草稿がかなりの数みられた。同様に、Deja tu re de silenza, Noche es blancas de hospital, Caminante si no gar など音の連続としてはきわめて正しい聴取が行われている。

6. おわりに

初級文法の課外活動的演習として、スペイン語歌曲の歌詞聴取書き起し演習で学生が提出した草稿にみられる聴取の誤りと問題点を検討した。この演習の目的は①言語音声の聴取が耳だけで行われているのではなく、耳で受容して脳で聴いていることを実体験に基づいて学習することと、②いわゆる外国語の書き取りテストなどであれば正しい綴りで書き取れたもののみが唯一正解とされる外国語教育の世界から、音声学という学問の世界に視点を移行することによって、母語の聴取と外国語の聴取との違いに目を向け、聴き誤りの過程に説明を与えて聴覚と脳が極めて高度な情報解析をしていることが理解できるように導くことにある。大学の教育はいわゆる実学に偏重してはならない。言語音声を科学的にとらえる態度の涵養は、言語現象一般に対する学生の興味をより一層喚起するために、少なからず効果が発揮できるものと考ええる。

さらに③スペイン語圏の歌や音楽に親しんで同時に語彙の増強を図る方

法を紹介するとともに、④学習している外国語でいくつか歌が歌えるということが、将来スペイン語を用いてコミュニケーションをするときに大いに役立つであろうと期待していることも付け加えておく。

参考文献

- 朝日新聞。「聴覚 脳が作る『聞こえない音』(五感:5)」朝日新聞, 2004. 5. 19 朝刊.
- 榎並大介他。「言語的・音響的コンテキストが音声の聴取および認識に及ぼす影響の考察」『情報処理学会全国大会公演論文集』74(2), 2012, pp. 2617-2618.
- 池田 皓.『日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流』東京:三一書房, 1968.
- .『海外渡航記叢書4 南海紀聞・東航紀聞・彦蔵漂流記』東京:雄松堂出版, 1991.
- 松永澄夫.『音の経験 — 言葉はどのようにして可能となるのか —』東京:東信堂, 2006.
- マルンベリ, ベルティル; 大橋保夫訳.『改定新版 音声学』文庫クセジュ. 東京:白水社, 1976.
- 永渕正昭.『聴覚の世界 — 心身のはたらきとその障害シリーズ2』東京:光生館, 1979.
- 成田克史。「ドイツ語の聴取について — 語学教育的視点から —」『長崎大学教養部紀要(人文科学編)』24(2), 1981, pp. 143-151.
- O'Connor, Joseph Desmond. *Phonetics*. Harmondsworth: 1983.
- 大久保雅子。「日本語学習者におけるナ行音・ラ行音の聴取混同 — 香港広東語母語話者を対象として —」『早稲田日本語教育学 第7号』早稲田大学大学院日本語教育研究科, 2010, pp. 97-109.
- Quilis, Antonio. *Fonética acústica de la lengua española*. Madrid: Gredos, 1981.
- . *Tratado de fonología y fonética españolas. 2ª ed.* Madrid: Gredos, 2002.
- Quilis, Antonio & J. A. Fernández. *Curso de fonética y fonología españolas*. Madrid: CSIC, 1990.
- 力丸 裕。「劣化雑音音声を用いた童謡の知覚 — 歌詞とメロディーの親密度およびテンポの影響 —」『日本音響学会聴覚研究会資料, Vol. 33, No. 10, H-2003-110』, 2003, pp. 647-652.

- 瀬川亜希他. 「超早口音声の聴取における単語親密度の教示効果」『電子情報通信学会技術研究報告, WIT, 福祉情報工学 108 (332)』, 2008, pp. 89-94.
- ピンカー, スティーブン; 椋田直子訳. 『言語を生み出す本能 (上) (下)』東京: 日本放送出版協会, 1995.
- 高木貞敬 「言葉と脳のしくみ くことは脳のどこにあるのか」『月刊言語第 6 巻 第 4 号』東京: 大修館書店, 1977, pp. 37-46.
- 橘 亮輔&力丸 裕. 「劣化雑音音声知覚に関する脳内活動 — functional MRI による研究」『音響学会聴覚研究資料 H2005-12』, 2005.
- 多和田眞一郎. 「日本語音声の聴取に関する考察」『日本語学校論集 (12)』東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, 東京外国語大学学術成果コレクション, 1985, pp. 1-21.
- 角田忠信. 「日本人と西欧人の文化型と音認識 — 日本人の精神構造母音節 —」『月刊言語第三巻第六号』東京: 大修館書店, 1974, pp. 34-41.
- 安富雄平. 「私家版スペイン語上達法(4)」『¡Hola! (日本放送協会学園スペイン語講座機関紙)(8)』東京: 日本放送協会学園, 1991, pp. 8-9.
- . 「私家版スペイン語上達法(5)」『¡Hola! (日本放送協会学園スペイン語講座機関紙)(9)』東京: 日本放送協会学園, 1991, pp. 6-7.
- . 「仰げば尊し (日西混交蜷縮涼鼓)」『Andante (日本放送協会学園外国語講座機関紙)(16)』東京: 日本放送協会学園, 1996, pp. 30-31.
- . 「『あほいうな △ガランパ』(微臣岩崎謹んで申す)」『Andante (日本放送協会学園外国語講座機関紙)(34)』東京: 日本放送協会学園, 2001, pp. 26-28.

(原稿受付 2013 年 10 月 3 日)

Opsionalitas Preposisi dalam Konstruksi “Verba (*ber-*) + Preposisi” dalam Bahasa Indonesia

Toshio SUENOBU

1. Pengantar

Preposisi berfungsi menandai berbagai hubungan makna antara konstituen di depan preposisi dengan konstituen di belakang preposisi (Alwi *et al.*, 1999: 288). Secara sintaksis, preposisi membentuk frasa preposisional dan dapat menduduki fungsi sintaksis predikat dan keterangan (Alwi *et al.* 1999; Sugono, 2009). Frasa preposisional yang menduduki fungsi keterangan pada umumnya berada di belakang verba yang berfungsi sebagai predikat. Bentuk verba itu sedikit banyak mempengaruhi eksistensi frasa preposisional. Oleh karena itu, muncul urutan verba dan preposisi sebagaimana yang dinyatakan oleh Lapoliwa (1992).

Secara morfologis, verba dikelompokkan dalam dua jenis, yaitu verba dasar dan verba berafiks. Verba jenis pertama berunsur tunggal, misalnya *datang*, *pergi*, *tidur*, dan *makan*, sedangkan verba jenis kedua adalah berafiks *mem-*, *ber-*, *ter-*, *di-*, misalnya *membaca*, *berhadapan*, *tertidur*, dan *diambil*.

Verba berafiks *ber-* seperti *berbuat*, *berdagang*, *bekerja*, dan

bertemu termasuk verba intransitif. Verba tersebut dapat langsung berangkai dengan nomina yang berfungsi sebagai pelengkap, seperti dalam kalimat *Dia berbuat kebaikan*. Verba-verba tersebut juga dapat diikuti oleh preposisi yang berangkai dengan nomina atau frasa nominal, misalnya dalam kalimat *Ayahnya bekerja di kantor ini*.

Verba berafiks *ber-* yang berangkai dengan preposisi seperti dalam kalimat *Saya bertemu dengan ayahmu* yang dalam bahasa Indonesia disebut sebagai verba berpreposisi (Alwi *et al*, 1999; Lapoliwa, 1992). Dalam konsep itu, kehadiran preposisi di belakang verba seakan bersifat wajib (*obligator*) karena merupakan bagian yang integral dengan verba. Sebaliknya, formula verba + preposisi untuk menunjuk konstruksi verba yang berangkai dengan preposisi. Dalam formula itu, kehadiran preposisi di belakang verba dapat bersifat wajib dan bersifat opsional.

Dalam bahasa Indonesia, preposisi yang berangkai dengan verba berafiks *ber-* menunjukkan dua hal, yaitu kehadiran yang wajib dan kehadiran yang opsional. Dalam kalimat *Ayahnya bekerja di kantor ini*, preposisi *di* wajib hadir. Ketidakhadiran preposisi *di* akan menyebabkan kalimat tidak gramatikal (**Ayahnya bekerja kantor ini*). Sebaliknya, preposisi *dengan* dalam kalimat *Saya bertemu dengan ayahmu* bersifat opsional karena tanpa kehadiran preposisi *dengan* kalimat *Saya bertemu ayahmu* masih diterima dan gramatikal. Sifat wajib atau opsional tidak hanya dapat disimpulkan dari jenis preposisi, tetapi juga melibatkan aspek-aspek semantis dan sintaksis. Oleh karena itu, perlu adanya penelitian yang mendalam berkaitan dengan preposisi yang berangkai dengan verba berafiks *ber-* dalam bahasa Indonesia.

2. Fokus Penelitian

Penelitian ini menfokuskan pada dua hal, yaitu struktur verba + preposisi dan opsionalitas preposisi. Fokus pertama untuk menjabarkan

rangkaian verba *ber-* + preposisi yang ada dalam bahasa Indonesia dengan melihat bentuk preposisi dan bentuk lingual lain yang menyertai preposisi. Fokus kedua adalah untuk menganalisis opsionalitasnya preposisi berdasarkan struktur verba *ber-* + preposisi.

3. Kajian Teori

3.1 Konsep Verba

Kata berkategori verba dapat dikenali berdasarkan bentuk dan fungsi sintaksis. Dilihat dari sisi bentuk, menurut Alwi *et al.* (1999), verba dapat dikelompokkan ke dalam dua jenis, yaitu verba dasar dan verba berafiks. Verba dasar berupa kata tunggal, misalnya *datang, pergi, tidur, dan mandi*. Sebaliknya, verba turunan adalah verba yang dibentuk dari proses afiksasi, misalnya *memakan, menulis, membaca, memukul, berenang, dan berjalan*. Verba turunan dapat pula merupakan kombinasi afiks, misalnya *mengembalikan, mengantarkan, berdatangan, dan diserahkan*.

Berdasarkan fungsi sintaksisnya, verba memiliki fungsi utama sebagai predikat (Alwi *et al.*, 1999; Sneddon, 2010). Sebagai predikat, verba menentukan jumlah nomina yang mengikutinya. Verba ekatransitif membutuhkan satu nomina sebagai objek, sedangkan verba dwitransitif membutuhkan dua nomina sebagai objek dan pelengkap.

3.2 Makna Verba

Dalam bahasa Indonesia makna verba dapat digolongkan menjadi empat, yaitu perbuatan, proses, keadaan, dan pengalaman (Alwi, *et al.*, 1999). Menurut Quirk *et al.* (1985), makna verba dapat dikelompokkan dalam dua golongan utama, yaitu verba dinamis dan verba statis. Menurutnya, verba dinamis mencakup lima jenis makna, yaitu aktivitas, proses, sensasi fisik, peristiwa transisi, dan

verba bermakna momentan. Sebaliknya, verba statis memiliki dua varian makna, yaitu verba bermakna tanggapan dan verba bermakna relasional.

Verba bermakna aktivitas adalah verba yang mengandung makna perbuatan atau tindakan. Pada umumnya verba bermakna aktivitas digunakan untuk menjawab pertanyaan: Apa yang dilakukan oleh subjek? Dengan kata lain, verba aktivitas berisi perbuatan atau tindakan yang dilakukan oleh subjek. Misalnya, verba *tangkap* dan *ambil* dalam kalimat *Polisi menangkap dua prampok toko emas* dan *Ambillah buku itu!*

Verba bermakna proses adalah verba yang menyatakan makna perubahan dari suatu keadaan ke keadaan lain. Pada umumnya verba dengan makna proses digunakan untuk menjawab pertanyaan: Apa yang terjadi pada subjek? (Alwi *et al.*, 1999). Dengan kata lain, verba bermakna proses menyatakan keadaan yang dialami oleh subjek. Misalnya, verba *busuk*, *beku* dan *sebar* dalam kalimat *Lukanya membusuk*, *Airnya membeku* dan *Berita itu menyebar ke dunia maya*.

Verba dengan makna sensasi fisik merupakan verba yang merefleksikan unsur perasaan yang dialami atau dirasakan oleh seseorang. Sebaliknya, verba dengan makna peristiwa transasional adalah verba yang mencerminkan perubahan kondisi. Perubahan itu dapat berupa perpindahan dari satu tempat ke tempat lain dan dapat juga berupa perubahan dari kondisi lama ke kondisi baru. Misalnya, verba *pindah* dan *tiba*, dalam kalimat *Dia dipindahkan di bagian administrasi* dan *Dia baru saja tiba dari Jakarta*.

Verba bermakna tanggapan merupakan verba yang mencerminkan makna keadaan, yaitu keadaan mental atau psikologis unsur pengisi subjek. Misalnya, dengan verba *sangsi* pada kalimat *Saya sangsi dengan kemampuannya* atau *Saya sangsi bahwa dia dapat melakukan tugas itu*.

Verba bermakna momentan adalah verba yang menggambarkan

peristiwa yang berlangsung dalam waktu yang cukup cepat. Misalnya, verba *menoleh* pada kalimat *Dia menoleh ke arah aku*.

3. 3 Preposisi

3. 3. 1 Pengertian Preposisi

Zain (1943: 140) menggunakan *kata perangkai* untuk mengacu konsep preposisi. Disebut *kata perangkai* karena preposisi selalu dirangkaikan dengan kata lain yang berada di belakangnya. Mees (1946: 174) menggunakan istilah *kata depan* (*voorzetsel*) untuk mengacu konsep preposisi. Menurutnya, preposisi merupakan kata yang digunakan untuk menguraikan perhubungan kata-kata. Akan tetapi, dia tidak memberi kriterianya yang jelas.

Slametmuljana (1957: 167) menggunakan istilah *kata perangkai* untuk menyatakan konsep preposisi. Dia menyatakan bahwa preposisi merupakan kata yang tidak dapat berdiri sendiri. Untuk itu, preposisi harus digunakan bersama dengan kata lain, terutama kata benda. Berdasarkan fungsi kata dalam kalimat, preposisi berfungsi merangkaikan kata-kata yang digunakan untuk menyatakan hubungan arah atau tempat.

Ramlan (1982: 13; 1985: 82) menyatakan bahwa kata depan atau preposisi adalah kata-kata yang berfungsi sebagai pemarah atau *director* dalam frasa eksosentris. Dasar penentuan penggolongan preposisi adalah distribusi kata dalam frasa dan kalimat. Misalnya, *di Hiroshima* dalam kalimat *Ledakan bom atom pertama diperingati di Hiroshima*. Dalam hal ini, Ramlan tidak lagi mengikuti alur berpikir tradisional yang lebih mengutamakan bentuk dalam menentukan kategori preposisi. Pemikirannya lebih didasarkan pada pola pikir struktural. Penentuan preposisi tidak lagi berdasarkan arti tetapi distribusinya dalam frasa dan kalimat.

Alieva *et al.* (1991: 259), preposisi dipergunakan untuk menyampaikan hubungan sintaksis kalimat. Definisi ini lebih menekankan ciri fungsi preposisi dalam konstruksi kalimat. Berdasarkan kriteria itu,

mereka membentuk preposisi sebagai kata tugas dalam sintaksis yang dapat dipakai dalam konstruksi yang bergabung dengan nomina dan mengantarkan predikat. Tampaknya mereka mengalami kesulitan dalam membedakan preposisi dan konjungsi.

Lapoliwa (1992) menyatakan bahwa preposisi akan selalu diikuti oleh nomina dan berfungsi menyatakan hubungan antara nomina yang menjadi objek dan pelengkapnyanya dengan predikat kalimat. Dengan pengertian itu, dapat disimpulkan bahwa frasa preposisi adalah frasa yang terdiri atas preposisi dan frasa nomina seperti *di rumah, di dalam kelas, atau di luar kelas*. Penggolongan kelas kata atas preposisi atau bukan dapat dilakukan berdasarkan tiga kriteria, yaitu bentuk, distribusi dan fungsinya. Lebih lanjut, ia membagi preposisi atas dua tipe, yaitu preposisi tunggal seperti *di, ke, dari* dan preposisi gabung atau majemuk seperti *di dalam, di atas, dari samping, dan ke samping*.

Alwi *et al.* (1999: 228) menyatakan bahwa preposisi ditinjau dari perilaku semantis menandai berbagai hubungan makna antara konstituen di depan preposisi tersebut dengan konstituen di belakangnya. Jika ditinjau dari perilaku sintaksisnya, preposisi berada di depan nomina, adjektiva, atau adverbial. Lebih lanjut, Alwi *et al.* menyatakan bahwa dalam membentuk frasa preposisi, sebuah preposisi dapat bergabung dengan nomina asalkan nomina yang pertama mempunyai ciri lokatif. Preposisi atau kata depan merupakan salah satu jenis kata tugas (Alwi *et al.*, 1999).

Dari penjelasan di atas dapat dikatakan bahwa preposisi atau kata depan merupakan salah satu jenis kata tugas. Secara sintaksis, preposisi berada di depan kata yang mewatasinya. Kata yang mewatasinya dapat berkategori nomina dan adjektiva. Secara sintaksis, preposisi tidak pernah berdiri sendiri. Preposisi selalu diikuti oleh kategori kata lain sehingga preposisi selalu hadir dalam konstruksi frasa, yaitu FPrep (frasa preposisi), misalnya, *di rumah, ke Jakarta, dan dari pasar*.

3. 3. 2 Jenis Preposisi

Secara umum ada dua jenis preposisi, yaitu preposisi yang berada sebelum kata atau frasa (*preposed preposition*) dan preposisi yang berada di akhir kata atau frasa (*postposed preposition*) (Quirk *et al.* 1985; Thomson dan Martinet, 1987). Dalam bahasa Indonesia hanya terdapat satu jenis preposisi, yaitu preposisi yang berada di depan kata atau frasa.

Dalam wujudnya preposisi dapat dilihat dari dua sisi, yaitu sisi bentuk dan sisi makna. Berdasarkan bentuknya, preposisi dibagi dalam dua kelompok, yaitu preposisi tunggal dan preposisi gabungan (Lapoliwa, 1992: 19–20; Alwi *et al.* 1999: 288). Preposisi tunggal adalah preposisi yang hanya terdiri atas satu kata. Bentuk preposisi tunggal dapat berupa kata dasar dan berafiks. Bentuk preposisi dasar, misalnya *di*, *ke*, *dari*, dan *pada*, sedangkan preposisi berafiks, misalnya *selama*, *sepanjang*, *bersama*, *menuju*, dan *menjelang*.

Preposisi gabungan merupakan preposisi yang terdiri atas dua preposisi yang menyatakan satu makna. Preposisi gabungan terdiri atas dua jenis, yaitu preposisi gabungan berdampingan dan preposisi gabungan berkorelasi. Preposisi gabungan berdampingan merupakan dua preposisi yang letaknya berurutan. Preposisi *dari**pada*, *oleh* *karena*, *sampai* *ke*, dan *sampai* *dengan* merupakan contoh preposisi gabungan berdampingan. Sebaliknya, preposisi gabungan berkorelasi merupakan dua preposisi yang letaknya terpisah, misalnya *dari... hingga...*, *dari... ke...*, dan *sejak... hingga...*

3. 3. 3 Makna dan Peran Semantis Preposisi

Preposisi memiliki fungsi untuk menandai hubungan antara konstituen yang di depan preposisi dan konstituen yang berada di belakangnya. Menurut Lapoliwa (1992) preposisi memiliki dua makna dasar, yaitu makna tempat dan makna waktu. Makna tempat merupakan keadaan hubungan perbuatan atau peristiwa atau keadaan yang dinyatakan oleh preposisi terhadap nomina tempat

pelengkapanya. Dalam pandangan Alieva *et al.* (1991: 258) preposisi inti yang menandai tempat adalah *di*, *ke*, dan *dari*. Sifat hubungan tempat tersebut mencakup tiga hal, yaitu (1) tempat yang merupakan kedudukan atau posisional, (2) tempat yang menyatakan tujuan, dan (3) tempat yang menyatakan awal lokasi.

Makna waktu diekspresikan melalui perpaduan antara preposisi dan pelengkap preposisi yang menyatakan waktu. Makna waktu mencakup empat submakna, yaitu (1) makna saat, (2) makna kurun waktu, (3) makna relatif, dan (4) makna waktu dalam batas. Makna tempat dan waktu yang dikemukakan oleh Lapoliwa dan selanjutnya dirinci oleh Effendi dan Aritonang (1993) menjadi enam makna, yaitu (1) makna tempat (*di*, *ke*, *dari*), (2) makna waktu (*pada*, *selama*, dan *sejak*), (3) makna sebab-maksud (*karena*, *untuk*, dan *demi*), (4) cara-saran-pelaku (*dengan* dan *oleh*), (5) makna kesertaan (*dengan*, *beserta*, dan *tanpa*), dan (6) makna perihal (*tentang* dan *mengenai*).

Menurut Alwi *et al.* (1999: 295), preposisi memiliki delapan peran semantis. *Pertama*, penanda hubungan tempat yang dapat diwakili oleh preposisi *di*, *ke*, *dari*, *hingga*, *sampai*, dan *pada*. *Kedua*, preposisi sebagai penanda hubungan peruntukan, misalnya *bagi*, *untuk*, *buat*, dan *guna*. *Ketiga*, preposisi sebagai penanda hubungan sebab, misalnya *karena*, *sebab*, dan *lantaran*. *Keempat*, preposisi sebagai penanda hubungan kesertaan atau cara yang dapat diekspresikan oleh preposisi *dengan*, *sambil*, *beserta*, dan *bersama*. *Kelima*, preposisi sebagai penanda hubungan pelaku yang hanya diekspresikan oleh preposisi *oleh*. *Keenam*, preposisi sebagai penanda hubungan waktu, misanya *pada*, *hingga*, *sampai*, *sejak*, *semenjak*, dan *menjelang*. *Ketujuh*, preposisi sebagai penanda hubungan ihwal peristiwa yang diekspresikan oleh preposisi *tentang* dan *mengenai*. *Kedelapan*, preposisi sebagai penanda hubungan milik yang hanya diekspresikan oleh preposisi *dari*.

3. 4 Struktur Verba + Preposisi

Struktur verba yang berangkai dengan preposisi adalah verba yang berpendamping kanan berupa preposisi. Namun, preposisi bukan satu-satunya pendamping kanan verba. Selain preposisi, kategori nomina dan juga dapat menjadi pendamping kanan verba, misalnya *datang juga* dan *makan lagi*.

Istilah yang digunakan untuk mengacu struktur verba yang diikuti oleh preposisi adalah *prepositional verb*, sedangkan dalam bahasa Indonesia konstruksi verba + preposisi disebut verba berpreposisi (Lapoliwa, 1992; Alwi *et al.*, 1999). Konsep verba berpreposisi mengandung makna bahwa kehadiran preposisi bersifat wajib atau obligator. Konsep itu juga dapat dimaknai verba tertentu hanya berpendamping kanan dengan preposisi tertentu. Misalnya, *berbeda dengan*, *bersama dengan*, *bebas dari*, *terhindar dari*, *bertanya tentang*, dan *berkata tentang*. Sebaliknya, struktur verba + preposisi dapat diinterpretasi kehadiran preposisi dapat bersifat wajib dan dapat pula opsional. Oleh karena itu, dalam penelitian ini digunakan konsep struktur verba + preposisi bukan verba berpreposisi.

Secara sintaksis, frasa preposisional dalam struktur verba + preposisi memiliki dua fungsi sintaksis, yaitu sebagai keterangan (K) dan sebagai pelengkap (Pel) (Alwi *et al.*, 1999). Misalnya, frasa preposisional dalam kalimat (1) berfungsi sebagai K, sedangkan dalam kalimat (2) berfungsi sebagai Pel.

(1) Adik / bermain / *di lapangan bola*.

N	V	FPrep
S	P	K

(2) Roti ini / terbuat / *dari ketela*.

N	V	FPrep
S	P	Pel

Dalam kalimat (1) FPrep *di lapangan bola* dapat dihapuskan tanpa mengganggu kegramatikalannya kalimat. Dengan kata lain, kehadiran FPrep *di lapangan bola* bersifat opsional. Sebaliknya, FPrep (2) *dari ketela* tidak dapat dihapuskan karena pelepasan preposisi akan mengganggu kegramatikalannya kalimat. Oleh karena itu, kehadiran FPrep tersebut bersifat wajib.

4. Metode Penelitian

4.1 Sumber Data

Data yang ditelaah adalah bahasa Indonesia ragam tulis formal dengan alasan bahwa ragam bahasa tulis lebih eksplisit dan merupakan wujud ungkapan penutur yang dirumuskan secara cermat untuk menyampaikan makna yang sama lengkapnya sebagai yang ia inginkan. Sumber data peneliti ini adalah teks berbahasa Indonesia yang terdapat dalam surat kabar nasional, yaitu *Kompas* yang terbitan tahun 2011 dan 2012 dan kumpulan cerita dalam buku *Perjalanan Anak Bangsa* terbitan LP 2 ES tahun 1982. Adapun pemilihan teks yang beragam sebagai sumber data tersebut dimaksudkan untuk memperoleh data yang lebih lengkap mengenai opsionalitas preposisi dalam bahasa Indonesia.

4.2 Metode dan Teknik Pengumpulan Data

Pengumpulan data penelitian ini dilakukan dengan cara observasi dengan membaca cermat sumber data yang berupa kalimat yang mengandung verba berafiks *ber-* yang berangkai dengan preposisi. Hasil observasi tersebut dicatat dalam kartu data. Untuk menjangkau data peneliti menggunakan beberapa konsep sebagai parameter instrumennya. Konsep tersebut meliputi konsep bentuk, kategori, peran, makna verba, jenis dan bentuk preposisi.

4. 3 Metode dan Teknik Analisis Data

Analisis data dalam penelitian ini menggunakan metode agih dan padan. Metode agih merupakan metode yang alat penentunya merupakan bagian dari bahasa yang bersangkutan, sedangkan metode padan merupakan metode yang alat penentunya ada di luar bahasa (Sudaryanto, 1993: 13–15). Metode padan untuk menentukan makna verba dan makna frasa preposisional. Metode agih digunakan untuk menentukan opsionalitas preposisi. Teknik analisis data yang digunakan adalah pelepasan dan penyulihan.

4. 4 Validasi Data

Untuk mendapat data yang valid dilakukan penilaian antarteman sejawat. Penilaian antarteman sejawat dilakukan dengan cara meminta teman yang memiliki pengetahuan yang memadainya, khususnya yang menguasai perilaku nomina dalam bahasa Indonesia. Mereka akan diminta untuk memverifikasi data yang telah terkumpul.

5. Pembahasan

Berdasarkan hasil analisis data ditemukan delapan struktur verba *ber-* + preposisi yang memungkinkan preposisi bersifat opsional, baik secara mandiri maupun opsional bersama pelengkap preposisi. Struktur tersebut adalah (1) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva ['cara'] (2) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina ['penyerta'], (3) Verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina ['waktu'], (4) Verba + preposisi *tentang* + nomina ['perihal']. Kehadiran preposisi bersifat wajib, tetapi kehadiran gabungan unsur preposisi dan pelengkap preposisi bersifat opsional apabila berada dalam struktur (1) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva ['cara'], (2) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina ['penyerta'],

(3) Verba *ber-* + preposisi *pada/terhadap* + nomina ['sasaran'], (4) Verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina ['waktu'], (5) Verba + preposisi *kepada* + nomina ['sasaran'], (6) Verba + preposisi *di/ke* + nomina ['tempat'], dan (7) Verba + preposisi *tentang* + nomina ['perihal']. Secara lengkap, struktur tersebut akan dibahas pada sub bab berikut ini.

5.1 Verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva ['cara']

Struktur Verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva terdiri atas verba berafiks *ber-* dengan makna aktivitas yang diikuti oleh preposisi *dengan* dan pelengkap berkategori adjektiva yang bermakna cara. Konstruksi tersebut dapat dilihat dalam kalimat berikut ini.

- (1) Kami berharap kepada aparat terkait segera *bertindak dengan tegas* dan menghentikan pembangunan demi keselamatan lingkungan.
- (2) Saya akan *bekerja dengan keras* untuk meningkatkan hubungan kedua negara.

Verba *bertindak* pada kalimat (1) dan *bekerja* pada kalimat (2) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna aktivitas. Preposisi *dengan* yang mengikuti verba tersebut menyatakan makna cara. Makna cara itu diungkapkan secara jelas oleh pelengkap preposisi yang berkategori adjektiva, yaitu *tegas* dan *keras*.

Secara sintaksis, preposisi *dengan* dalam konstruksi tersebut dapat dilesapkan. Hal itu juga dikemukakan oleh Lapoliwa (1992: 68). Menurutnya, preposisi *dengan* yang berpelengkap adjektiva dapat dilesapkan. Pelepasan preposisi tersebut tidak mengganggu kegramatikalannya, seperti tampak pada kalimat berikut ini.

- (1) a. Kami berharap kepada aparat terkait segera *bertindak* \emptyset *tegas* dan menghentikan pembangunan demi keselamatan lingkungan.

- (2) b. Saya akan *bekerja* \emptyset *keras* untuk meningkatkan hubungan kedua negara.

Ketidakhadiran preposisi *dengan* dalam struktur kalimat (1 a) dan (2 b) yang tidak mengganggu kegramatikalitas kalimat merupakan bukti bahwa kehadiran preposisi *dengan* bersifat opsional, tidak wajib hadir. Opsionalitas preposisi *dengan* juga dibuktikan oleh data lain yang memang tidak menggunakan preposisi *dengan*, meskipun preposisi itu dapat digunakan, seperti tampak pada kalimat berikut ini.

- (3) Pada hari yang sama polisi Swiss *berusaha keras* mencari penyebab bus menabrak dinding terowongan.
 (4) Sudah saatnya pemda *bertindak tegas* agar lingkungan tidak semakin rusak oleh penambangan liar.
 (5) Presiden dianggap telah *berbuat ceroboh* dan *bertindak gegabah* menandatangani surat keputusan.

Urutan verba + adjektiva pada kalimat (3)-(5) di atas pada dasarnya berstruktur lengkap verba + preposisi + adjektiva. Urutan bentuk *berusaha keras* (3) memiliki bentuk lengkap *berusaha dengan keras*. Urutan *bertindak tegas* (4) memiliki bentuk lengkap *bertindak dengan tegas*, sedangkan urutan *berbuat ceroboh* dan *bertindak gegabah* (5) memiliki bentuk lengkap *berbuat dengan ceroboh* dan *bertindak dengan gegabah*.

Apabila diteliti dengan cermat, kelima kalimat di atas dapat dinyatakan tiga hal. *Pertama*, hubungan antara preposisi *dengan* dan pelengkap bersifat longgar. Sifat longgar itu tampak dari keberterimaan kalimat yang mengalami pelepasan preposisi yang tidak diikuti pelepasan pelengkap preposisinya. Artinya, pelengkap preposisi dapat berdiri sendiri tanpa harus didahului oleh preposisi. *Kedua*, opsionalitas preposisi *dengan* dalam konstruksi verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva lebih disebabkan oleh makna preposisi dan bentuk dan jenis verba dibandingkan dengan makna verbanya. Preposisi *dengan* yang menyatakan makna cara memungkinkan

dapat dilesapkan tanpa mengganggu kegramatikalannya kalimat dan mengubah makna pelengkap preposisi. Namun, preposisi *dengan* yang bermakna cara yang tidak berangkai verba *ber-* tidak dapat dilesapkan. Misalnya, preposisi *dengan* yang bermakna cara yang mengikuti verba transitif berafiks *meN-* tidak dapat dilesapkan seperti tampak pada kalimat berikut.

(6) Dia memeriksa orang itu *dengan* teliti.

(6) a. *Dia memeriksa orang itu \emptyset teliti.

Ketiga, verba dan frasa preposisional (preposisi *dengan* dan pelengkap preposisi) memiliki hubungan yang longgar. Sifat hubungan yang longgar itu dapat diketahui dari keberterimaan pelepasan preposisi *dengan* dan pelengkap preposisi secara bersamaan tanpa mengganggu kegramatikalannya kalimat. Hal itu dapat dilihat pada kalimat (1 c) dan (2 c) berikut ini yang diturunkan dari kalimat (1) dan (2).

(1) c. Kami berharap kepada aparat terkait segera *bertindak* \emptyset dan menghentikan pembangunan demi keselamatan lingkungan.

(2) c. Saya akan *bekerja* \emptyset untuk meningkatkan hubungan kedua negara.

5. 2 Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina [‘penyerta’]

Struktur Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina terdiri atas verba berafiks *ber-* dengan makna aktivitas yang diikuti oleh preposisi *dengan* dan pelengkap preposisi berkategori nomina yang bermakna penyerta. Nomina sebagai pelengkap preposisi memiliki ciri insani. Artinya, unsur pengisi pelengkap preposisi adalah entitas yang hidup. Konstruksi tersebut dapat dilihat dalam kalimat berikut ini.

(7) Pemerintah akan *berdiskusi dengan* DPR berkaitan dengan rencana kenaikan BBM.

(8) Setelah *berunding dengan* kakek, bapak mengizinkan aku

kembali ke kota.

Verba *berdiskusi* pada kalimat (7) dan verba *berunding* (8) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna aktivitas. Preposisi *dengan* yang mengikuti verba tersebut menyatakan makna kesertaan. Makna cara itu diungkapkan secara jelas oleh pelengkap preposisi yang berkategori nomina, yaitu *DPR* dan *kakek*.

Struktur verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina dengan nomina bermakna kesertaan berbeda dengan struktur verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva yang unsur preposisinya dapat dilesapkan baik bersamaan dengan pelengkap preposisi maupun secara mandiri. Namun, dalam struktur verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina dengan nomina bermakna kesertaan preposisi tidak dapat dilesapkan tanpa diikuti pelesapan unsur pelengkap preposisi. Apabila hanya dilesapkan unsur preposisinya, kalimat menjadi tidak gramatikal. Hal itu dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

- (7) a. Pemerintah akan *berdiskusi* \emptyset berkaitan dengan rencana kenaikan BBM.
- b. *Pemerintah akan *berdiskusi* \emptyset *DPR* berkaitan dengan rencana kenaikan BBM.
- (8) a. Setelah *berunding* \emptyset , bapak mengizinkan aku kembali ke kota.
- b. *Setelah *berunding* \emptyset *kakek*, bapak mengizinkan aku kembali ke kota.

Kalimat (7 a) dan (8 a) masih gramatikal dan berterima meskipun unsur preposisi dan pelengkap preposisi dilesapkan. Sebaliknya, pelesapan unsur preposisi *dengan* yang tidak diikuti oleh pelesapan pelengkap preposisi menyebabkan kalimat (7 b) dan (8 b) menjadi tidak gramatikal. Dengan kata lain, preposisi wajib hadir jika pelengkap preposisi hadir. Akan tetapi, preposisi dapat bersifat opsional jika preposisi tersebut dilesapkan secara bersamaan dengan pelengkap preposisi.

Dari uraian tersebut dapat juga dinyatakan bahwa opsionalitas kehadiran preposisi sangat ditentukan oleh makna rangkaian preposisi dan pelengkap preposisi dibandingkan dengan makna verba. Makna verba pada kalimat (1) dan (2) adalah sama dengan verba (7) dan (8), yaitu menyatakan aktivitas. Namun, dalam kalimat (1) dan (2) preposisi dapat dilesapkan, sedangkan dalam kalimat (7) dan (8) preposisi tidak dapat dilesapkan tanpa diikuti pelepasan pelengkap preposisi. Perbedaan itu berkaitan dengan makna rangkaian preposisi dan pelengkap preposisi. Untuk makna kesertaan seperti pada kalimat (7) dan (8) unsur preposisi wajib hadir. Dengan kata lain, hubungan antara preposisi dan pelengkap preposisi sangat erat. Ketidakhadiran salah satu unsur dari keduanya akan menyebabkan kalimat menjadi tidak gramatikal.

Data lain juga menunjukkan bahwa makna preposisi sangat menentukan opsionalitas kehadiran preposisi. Data berikut menunjukkan bahwa verba yang bermakna relasional dengan preposisi menyatakan makna kesertaan isi tidak memungkinkan untuk melesapkan preposisi.

- (9) Bukan masalah oknum PD tidak *berhubungan dengan* rakyat secara langsung, tetapi juga berkaitan dengan antar oknum PD.

Pada data (9) verba *berhubungan* bermakna relasional dengan frasa preposisi bermakna kesertaan isi. Dalam konstruksi itu, preposisi *dengan* tidak dapat dilesapkan tanpa diikuti pelepasan unsur pelengkap preposisi, yaitu *rakyat*.

Selain itu, ada pula contoh yang verba *ber-* + preposisi *dengan* dan pelengkap preposisi longgar. Hal itu dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

- (10) Aku *bertemu dengan* kawan sekelas yang sudah seminggu tidak masuk.

Dalam kalimat (10) verba *bertemu* menyatakan makna aktivitas, sedangkan rangkaian preposisi *dengan* dan pelengkap preposisi yang

berkategori nomina menyatakan makna sasaran. Dalam konstruksi tersebut, unsur preposisi dapat dilesapkan tanpa diikuti oleh pelesapan unsur pelengkap preposisi. Meskipun preposisi dilesapkan, kalimat yang dihasilkan masih gramatikal. Selain itu, preposisi dan unsur pelengkap preposisi juga dapat dilesapkan bersamaan tanpa mengganggu kegramatikalannya kalimat.

(10) a. Aku bertemu \emptyset kawan sekelas yang sudah seminggu tidak masuk.

b. Aku bertemu \emptyset .

Kegramatikalannya kalimat (10 a) menandai kehadiran preposisi *dengan* bersifat opsional. Selain itu, keberterimaan kalimat (10 a) juga menandai hubungan antara preposisi *dengan* verba dan pelengkap preposisi longgar. Hubungan itu dibuktikan dengan keberterimaan kalimat (10 a) meskipun preposisi *dengan* dilesapkan tanpa diikuti oleh pelesapan pelengkap preposisi. Sebaliknya, keberterimaan kalimat (10 b) menandai bahwa hubungan antara verba *bertemu* dan frasa preposisional *dengan kawan sekelas yang sudah seminggu tidak masuk* adalah longgar. Dalam hal ini, contoh (10 b) menunjukkan bahwa secara gramatikal tetap diterima tanpa kehadiran preposisi *dengan* dan pelengkap preposisinya.

5. 3 Verba *ber-* + preposisi *pada/terhadap* + nomina ['sasaran']

Struktur Verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina terdiri atas verba berafiks *ber-* dengan makna proses yang diikuti oleh preposisi dan pelengkap preposisi berkategori nomina yang bermakna sasaran. Nomina sebagai pelengkap preposisi memiliki ciri insani atau noninsani. Artinya, unsur pengisi nomina adalah entitas yang hidup atau tak hidup. Konstruksi tersebut dapat dilihat dalam kalimat berikut ini.

(11) Perkembangan usia anak *berpengaruh pada* perkembangan startegi komunikasi.

(12) Penundaan kenaikan harga BBM ternyata tidak *berpengaruh*

pada harga kebutuhan pokok di pasar yang sudah terlanjur naik.

- (13) Rencana kenaikan harga BBM akan *berdampak pada* kenaikan harga kebutuhan pokok, seperti beras, minyak goreng, dan gula pasir.

Verba *berpengaruh* pada kalimat (11) dan (12), dan verba *berdampak* pada kalimat (13) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna keadaan. Preposisi *pada* yang mengikuti verba tersebut menyatakan makna sasaran. Makna sasaran itu diungkapkan secara jelas oleh pelengkap preposisi yang berkategori nomina. Dalam ketiga konstruksi tersebut kehadiran preposisi *pada* bersifat obligator atau wajib. Hal itu berbeda dengan preposisi *dengan* yang dibahas sebelumnya. Ketidakhadiran preposisi *pada* dalam ketiga kalimat tersebut akan berakibat kalimat menjadi tidak gramatikal. Namun, apabila preposisi *pada* dihapuskan bersamaan dengan pelepasan unsur pelengkap preposisi, ketiga kalimat tersebut masih gramatikal. Hal itu dapat dilihat pada kalimat berikut ini

- (11) a. *Perkembangan usia anak *berpengaruh* \emptyset perkembangan strategi komunikasi
b. Perkembangan usia anak *berpengaruh* \emptyset .
- (12) a. *Penundaan kenaikan harga BBM ternyata tidak *berpengaruh* \emptyset harga kebutuhan pokok di pasar yang sudah terlanjur naik.
b. Penundaan kenaikan harga BBM ternyata tidak *berpengaruh* \emptyset .
- (13) a. *Rencana kenaikan harga BBM akan *berdampak* \emptyset kenaikan harga kebutuhan pokok, seperti beras, minyak goreng, dan gula pasir.
b. Rencana kenaikan harga BBM akan *berdampak* \emptyset .

Ketidagramatikalitas kalimat (11 a)–(13 a) yang diakibatkan ketidakhadiran preposisi *pada* menandai hubungan antara preposisi *pada* dengan verba dan pelengkap preposisi sangat erat. Oleh karena

itu, pelepasan unsur preposisi akan mengganggu kegramatikalitas kalimat. Pelepasan akan tidak mengganggu gramatikalitas kalimat jika unsur yang dihapus adalah frasa preposisi secara keseluruhan seperti tampak pada kalimat (11 b)–(13 b). Dalam konteks yang demikian preposisi pada dapat disulihkan dengan preposisi *terhadap*. Oleh karena itu, kalimat (12) *Penundaan kenaikan harga BBM ternyata tidak **berpengaruh pada** harga kebutuhan pokok di pasar yang sudah terlanjur naik dapat diubah menjadi Penundaan kenaikan harga BBM ternyata tidak **berpengaruh terhadap** harga kebutuhan pokok di pasar yang sudah terlanjur naik.*

5. 4 Verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina [‘waktu’]

Apabila preposisi *pada* digunakan dalam struktur verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina untuk menyatakan makna waktu, kehadiran preposisi *pada* bersifat opsional karena dapat dihapus tanpa mengganggu makna dan gramatikalitas kalimat. Hal itu tampak pada kalimat berikut ini.

- (14) Pameran tersebut akan *berlangsung pada* awal bulan November 2011.
 a. Pameran tersebut akan *berlangsung* \emptyset awal bulan November 2011.

5. 5 Verba *ber-* + preposisi *kepada* + nomina [‘sasaran’]

Struktur Verba *ber-* + preposisi *kepada* + nomina terdiri atas verba berafiks *ber-* dengan makna aktivitas/keadaan yang diikuti oleh preposisi *kepada* dan pelengkap preposisi berkategori nomina yang bermakna sasaran. Nomina sebagai pelengkap preposisi memiliki ciri insani. Artinya, unsur pengisi nomina adalah entitas yang hidup. Konstruksi tersebut dapat dilihat dalam kalimat berikut ini.

- (15) Ibu *bercerita kepada* orang lain tentang diriku.
 (16) Masyarakat *berharap kepada* pihak berwenang dapat

menertibkan para pedagang yang berjualan di trotoar karena mengganggu pejalan kaki.

Verba *bercerita* pada kalimat (15) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna aktivitas, sedangkan verba *berharap* pada kalimat (16) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna keadaan. Preposisi *kepada* yang mengikuti kedua verba tersebut menyatakan makna sasaran. Makna sasaran itu diungkapkan secara jelas oleh pelengkap preposisi yang berkategori nomina. Dalam kalimat (15) kehadiran preposisi *kepada* bersifat obligator atau wajib. Ketidakhadiran preposisi *kepada* dalam kalimat tersebut akan berakibat kalimat menjadi tidak gramatikal. Akan tetapi, kalimat akan berterima jika yang dilesapkan adalah preposisi beserta pelengkap preposisi. Sebaliknya, pelepasan preposisi *kepada* dalam kalimat (16) dapat diterima secara gramatikal. Dengan kata lain, kehadiran preposisi *kepada* dalam kalimat (16) bersifat opsional.

Perbedaan sifat kehadiran preposisi *kepada* dalam kedua kalimat tersebut disebabkan oleh adanya perbedaan makna verba *ber-*. Kehadiran preposisi *kepada* akan bersifat wajib apabila verba yang diikutinya bermakna aktivitas. Sebaliknya, apabila verba yang diikuti preposisi *kepada* bermakna keadaan, kehadiran preposisi *kepada* bersifat opsional. Keduanya dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

(15) a. *Ibu *bercerita* \emptyset orang lain tentang diriku.

b. Ibu *bercerita* \emptyset .

(16) a. Masyarakat *berharap* \emptyset pihak berwenang dapat menertibkan para pedagang yang berjualan di trotoar karena mengganggu pejalan kaki.

b. Masyarakat *berharap* \emptyset .

5. 6 Verba *ber-* + preposisi *di/ke/dari* + nomina ['tempat']

Struktur Verba *ber-* + preposisi *di/ke/dari* + nomina terdiri atas verba berafiks *ber-* dengan makna aktivitas/keadaan yang diikuti

oleh preposisi *di/ke/dari* dan pelengkap preposisi berkategori nomina yang bermakna tempat. Nomina sebagai pelengkap preposisi memiliki ciri noninsani. Artinya, unsur pengisi nomina adalah entitas yang tak hidup. Konstruksi tersebut dapat dilihat dalam kalimat berikut ini.

- (17) Saat peristiwa terjadi sebagian besar masyarakat sedang *bekerja di ladang*.
- (18) Beberapa penggemar sepeda kuno *berasal dari Jakarta*.
- (19) Para siswa berlatih senam pagi sebelum *berangkat ke sekolah*.

Verba *bekerja* pada kalimat (17) dan verba *berangkat* pada kalimat (19) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna aktivitas, sedangkan verba *berasal* pada kalimat (18) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna keadaan. Preposisi *di/dari* yang mengikuti kedua verba tersebut menyatakan makna tempat. Dalam kedua kalimat tersebut, preposisi *di/dari* wajib hadir. Ketidakhadiran preposisi akan menyebabkan kalimat menjadi tidak gramatikal. Hal itu dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

- (17) a. *Saat peristiwa terjadi sebagaian besar masyarakat sedang *bekerja Ø ladang*.
- (18) a. *Beberapa penggemar sepeda kuno *berasal Ø Jakarta*.

Pada contoh (19), dapat dikatakan bahwa preposisi *ke* dapat dilesapkan dan hal itu dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

- (19) a. Para siswa berlatih senam pagi sebelum *berangkat Ø sekolah*.

Namun, ada perbedaan sifat wajib preposisi dalam kalimat (17 b) dan (18 b) dengan yang ada dalam kalimat (19 b). Preposisi *di/ke* dan pelengkap preposisi dalam kalimat (17 c) dan (18 c) dapat dilesapkan bersamaan tanpa mengganggu secara gramatikal. Sebaliknya, preposisi *dari* dan pelengkap preposisi pada kalimat (19 c) tidak dapat dilesapkan meskipun keduanya dilesapkan secara bersamaan. Pelepasan frasa tersebut akan mengakibatkan kalimat

menjadi tidak gramatikal. Hal itu disebabkan oleh perbedaan ciri makna verba *berasal*, *bekerja* dan *berangkat*. Perbedaan itu dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

- (17) c. Saat peristiwa terjadi sebagian besar masyarakat sedang *bekerja* \emptyset .
- (18) c. Para siswa berlatih senam pagi sebelum *berangkat* \emptyset .
- (19) c. *Beberapa penggemar sepeda kuno *berasal* \emptyset .

5. 7 Verba *ber-* + preposisi *tentang* + nomina ['perihal']

Struktur verba *ber-* + preposisi *tentang* + nomina terdiri atas verba berafiks *ber-* dengan makna aktivitas yang diikuti oleh preposisi *tentang* dan pelengkap preposisi berkategori nomina yang bermakna perihal. Konstruksi tersebut dapat dilihat dalam kalimat berikut ini.

- (20) Sebelum ajakan itu disampaikan, kami memang sempat *berdiskusi tentang* keadaan politik di dalam negeri melalui pesan pendek.

Verba *berdiskusi* pada kalimat (20) merupakan verba intransitif yang menyatakan makna aktivitas. Preposisi *tentang* yang mengikuti ketiga verba tersebut menyatakan makna perihal. Dalam kalimat tersebut kehadiran preposisi *tentang* bersifat opsional. Ketidakhadiran preposisi tidak akan menyebabkan kalimat menjadi tidak gramatikal. Hal itu dapat dimungkinkan karena makna hubungan antara verba dan preposisi cukup renggang dan sebagian makna preposisi telah terwakili dalam makna verba. Pelepasan preposisi dan pelengkap preposisi dapat dilihat pada kalimat berikut ini.

- (20) a. Sebelum ajakan itu disampaikan, kami memang sempat *berdiskusi* \emptyset keadaan politik di dalam negeri melalui pesan pendek.
- b. Sebelum ajakan itu disampaikan, kami memang sempat *berdiskusi* \emptyset .

Contoh di atas menyatakan bahwa preposisi dan pelengkap

preposisi juga dapat dilesapkan secara serentak tanpa mengganggu kegramatikalannya kalimat.

6. Penutup

Berdasarkan analisis dan pembahasan di atas dapat ditarik dua kesimpulan. *Pertama*, struktur verba *ber-* + preposisi memiliki delapan variasi struktur, yaitu (1) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva ['cara'], (2) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina ['penyerta'], (3) Verba + preposisi *pada/terhadap* + nomina (sasaran), (4) Verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina ['waktu'], (5) Verba *ber-* + preposisi *kepada* + nomina ['sasaran'], (6) Verba + preposisi *di/ke/dari* + nomina ['tempat'], dan (7) Verba + preposisi *tentang* + nomina ['perihal'].

Kedua, kehadiran preposisi dan pelengkap preposisi dapat bersifat opsional dan bersifat wajib. Kehadiran preposisi dapat bersifat opsional jika dalam struktur (1) verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva dengan verba bermakna aktivitas dan preposisi bermakna cara, (2) verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina dengan verba bermakna proses dan preposisi bermakna waktu, (3) verba *ber-* + preposisi *tentang* + nomina dengan verba bermakna aktivitas dan preposisi bermakna perihal, dan (4) verba *ber-* + preposisi *ke* + nomina untuk menyatakan tempat. Kehadiran preposisi bersifat wajib, tetapi kehadiran gabungan unsur preposisi dan pelengkap preposisi bersifat opsional apabila berada dalam struktur (1) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + adjektiva ['cara'], (2) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina ['penyerta'], (3) Verba + preposisi *pada/terhadap* + nomina ['sasaran'], (4) Verba *ber-* + preposisi *pada* + nomina ['waktu'], (5) Verba *ber-* + preposisi *kepada* + nomina ['sasaran'], (6) Verba *ber-* + preposisi *di/ke* + nomina ['tempat'], dan (7) Verba *ber-* + preposisi *tentang* + nomina ['perihal']. Khusus untuk struktur Verba *ber-* + preposisi *dari* + nomina dengan verba bermakna

keadaan dan preposisi bermakna tempat, kehadiran preposisi dan pelengkap preposisi bersifat wajib. Kehadiran preposisi bersifat wajib apabila berada dalam konstruksi (1) Verba *ber-* + preposisi *dengan* + nomina ['penyerta'], (2) Verba + preposisi *pada/terhadap* + nomina ['sasaran'], dan (3) Verba + preposisi *kepada* + nomina ['sasaran'].

Pustaka Acuan

- Alieva, N. F., V. D. Arakin, A. K. Oglobin, dan Yu. H. Sirk. 1991. *Bahasa Indonesia: Deskripsi dan Teori*. Yogyakarta: Kanisius.
- Alwi, Hasan, Soenjono Dardjowidjojo, Hans Lapoliwa, dan Anton M. Moeliono. 1998. *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*. Edisi Ketiga. Jakarta: Balai Pustaka.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, dan Edward Finegan. 1999. *Grammar of Spoken and Written English*. Longman: London.
- Effendi, S. dan Buha Aritonang. 1993. *Preposisi dan Frase Berpreposisi*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Kridalaksana, Harimurti *et al.* 1985. *Tata Bahasa Deskriptif Bahasa Indonesia: Sintaksis*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Lapoliwa, Hans. 1992. *Frasa Preposisi dalam Bahasa Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Mees, C. A. 1954. *Tata Bahasa Indonesia*. Jakarta: J. B. Wolters.
- Pullum, Geoffrey. K. dan Ronald D. Huddleston. 2002. *Prepositions and Preposition Phrases*. In Huddleston dan K. Pullum. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press, 597–661.
- Quirk, R. Greenbaum, G. Leech dan J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ramlan, M. 1980. *Kata Depan atau Preposisi dalam Bahasa Indonesia*. Yogyakarta: Karyono.
- Ramlan, M. 1981. *Ilmu Bahasa Indonesia: Sintaksis*. Yogyakarta: Karyono.
- Slametmuljana. 1957. *Kaidah Bahasa Indonesia*. Djakarta: Djambatan.
- Sneddon, James Neil, Alexander Adelaar, Dwi Noverini Djenar dan Michael C. Ewing. 2010. *Indonesian Reference Grammar*. Melbourne: Allen & Unwin.
- Sudaryanto. 1993. *Metode dan Teknik Analisis Bahasa: Pengantar Penelitian Wahana Kebudayaan secara Linguistik*. Yogyakarta: Duta Wacana

- University Press.
- Sugono, Dendy. 2009. *Mahir Berbahasa Indonesia Dengan Benar*. Jakarta: Gramedia.
- Thomson, A. J. dan Martinet, A. V. 1987. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Zain, St. Mochamad. 1952. *Djalan Bahasa Indonesia*. Soerabaja: Soeara Asia.

(原稿受付 2013年9月30日)

〈論 説〉

ライティングにおける文法指導の効果

狩 野 紀 子

I. はじめに

「英文法」はあまり人気のない学習分野である。ベネッセが2009年に行った調査では、中学生の6割が「英語が苦手である」と回答し、そのうちの9割は「文法が難しい」と回答している（ベネッセ教育研究開発センター，n.d.）。英語に対する苦手意識の原因のかなりの部分は文法にあると言っても、過言ではないだろう。この傾向は大学生になっても続く。学生たちは、就職のために英語の資格試験で高得点を取ることの重要性は重々理解している。英語を専攻している学生は、実際に仕事で英語を使用することも想定しているので、正しい英語を身に付けることの必要性を強く感じている。そのためには文法を勉強しなくてはならないと理解はしているものの、文法が苦手と感じている学生が多いのが現状である（野添，2009）。彼らにとって文法は積み残してきた「お荷物」のような存在なのである。

中学校では、指導されるべき文法項目は、学習指導要領の「言語材料」の中の「文法事項」に明記され、言語活動で繰り返し用いて知識の定着を図ることになっている（望月，2001）。高等学校でも、「文法」という科目は存在せず、1978年に改訂された学習指導要領の下では「英語ⅡC」（書くこと）の後に、1989年以降現行の学習指導要領まで、文法事項は「英語言語材料」という形で、「ライティング」の後にまとめて記述されてい

る。現行の学習指導要領に基づくライティングの検定教科書のほとんど全ては、場面や機能とともに、文法項目が主軸となって構成されている—ライティングの教科書 23 冊のうち 1 冊『Magic Hat English Course Writing』(Althous 他, 2011) だけが、言語機能と文章構造を主軸として編集されている。つまり、文法指導に関して、ライティングという科目が果たしてきた役割は大きいのである。

近年は教育の国際化にともない、TOEIC や TOEFL, IELTS といった海外の資格試験の受験者が増加している。2011 年には、TOEFL iBT の日本人受験者は前年比 11% 増となり、過去最高を記録している (ETS, n.d.)。受験者数はまだ TOEFL の 4 分の 1 程度ではあるものの、IELTS の日本人受験者も着実に増加しており、2010 年度には前年比 40% 増で 1 万人を超え、2012 年には 2 万人を超えている (IELTS, n.d.)。

このような状況で、新たに学生の戸惑いも生まれている。高等学校までに学習してきた文法範疇や構成、内容が、大学で TOEFL 対策として学ぶ文法範疇や内容とは必ずしも一致しないのである。大学に入るまで明示的に指導されていない文法事項や語法も、ライティングの評価基準に含まれているのである。そこで本研究では、まず日本人受験者の多い TOEFL TWE (Test for Written English) の評価項目で、日本人大学生が犯しやすいエラーを抽出することにした。次に、抽出された項目に関して明示的な指導を行い、その効果があるか否かを検証することとした。

II. 先行研究

知識には宣言的知識 (declarative knowledge) と手続き的知識 (procedural knowledge) がある。宣言的知識は、いわゆる knowing about にあたる明示的かつ意識的に獲得された知識である。自転車の乗り方をことばで説明したり、言語を文法的に解説したりできるのは、この宣言的知

識があるからである。文法指導はこの宣言的な知識の伝達にあたるが、宣言的知識では言語は「習得」できないという問題がある (小柳, 2004)。つまり知識としては獲得されるが、それが実際の言語運用には至らないということである。

一方、手続き的知識は、暗示的かつ無意識に獲得された知識であり、knowing how にあたる。ことばではうまく説明できなくても自転車には乗ることができたり、文法的に説明できなくても実際に母語は使えたりするのは、この手続き的知識があるからである。言語教育において、この暗示的・手続き的知識を学習者に獲得させるのが望ましいことは言うまでもない。しかし、明示的な知識と暗示的な知識は、相互に影響を及ぼしながら相補的に獲得されるわけではなく、独自に発達する可能性が高い。さらに、明示的な知識が暗示的知識に変わるという可能性は低いということが第二言語習得 (SLA) 研究の分野では示唆されている (和泉, 2009)。英語が第二言語 (ESL) として使用されている環境では、学習者が暗示的な手続き的知識を無意識に獲得していくことは可能であろう。しかし、日本における英語はあくまでも外国語 (EFL) であり、学習者が英語に関して暗示的・手続き的知識を身に付ける機会は少ない。つまり明示的・宣言的知識を定着させなければ、英語運用能力を高めることは難しいのである。本研究では、このような EFL 環境にある日本の大学生に対する、明示的・宣言的知識の指導の効果を考えていく。

ライティングとは、目的や読み手を考慮しながら内容を考え、語彙を選択し、情報を組み立て、手順や文法・統語法を考慮に入れ、書くという操作を行う複雑な過程である (Raimes, 1983)。同じアウトプットでも、時間的制約が少ないという点で、スピーキングとは異なる。学習者に言語知識があり、形式に意識が置かれていれば、ライティングというアウトプットでは、明示的・意識的に獲得された宣言的言語知識を利用することが可能となる (Krashen, 1982)。つまり、ライティングの過程では、手続き的

知識が充分でなくとも、文法という明示的・宣言知識を利用して、ある程度の正確性を保持したコミュニケーションが可能になる。そして、それは外国語として英語を用いている EFL 環境にある日本だからこそ必要な手段と考えられ、文法はライティングの授業の中で指導されることが多かったのであろう。

宣言的知識を言語運用に活用することができるという意味において、文法指導はライティング活動の中で行われることが有効であると考えられてきた。先行研究では、ライティングと別個に行われる文法指導は、学習者のライティング能力を伸ばすことができない (Hillocks, 1986) ことや、学習者が書いたものをベースにして文法事項を指導すると、学習者の文法運用能力が高くなる (Chin, 2000) ということが証明されてきた。また、Ferris & Hedgcock (2012) は、特に成人の第二言語学習者には、フィードバックによりエラーを明示することが、化石化を防止し、言語能力を伸ばすために重要であることを説いている。

その一方で、文法規則を明示的に指導したり、学習者が書いたものを文法の観点から添削したりすることに対する批判的な見解もある。Truscott (1996) は、過去のリサーチの結果をまとめ、文法のエラーを訂正することは、その方法に関わらず、学習者のライティング能力を高めることもなければ (Robb, Ross, & Shortreed, 1986)、正確性を高めるわけでもない (Kepner, 1991) と主張している。それだけでなく、流暢に書くことの妨げにすらなる (Semke, 1984) という問題点も指摘している。

ライティングとは様々な要因が関わる複雑な過程である。どのような学習者に、何をどのように指導するかによってその効果は異なり、一般化は難しい。さらに、ライティングにおける明示的文法指導やフィードバックの効果は、主に第二言語習得の分野で検証されてきており、外国語教育におけるものは少ない。あってもそれは Yamamoto (2012) の研究のように、フィードバックの効果に関するものである。そこで本研究では、手続

的知識を獲得する機会の少ない日本人大学生を対象に、フィードバックとともに明示的な教示の効果がライティングに現れるか否かを調査する。

そのために、本研究では、2010年度に二つの調査を実施した。調査1ではETSが開発した英語ライティングシステム「Criterion」を利用し、日本人大学生が犯しやすいエラーを明らかにした。調査2では、調査1で明らかになったエラーの多い項目に関する明示的な教示を授業計画に入れ、ライティングの際に明示的指導がエラーの回避に繋がり、正確性の向上に繋がるのかを調べた。

Ⅲ. 調査 1

A. 調査の方法

調査1は、2010年度前期、「Writing Skills B（1組）」の受講者21名（男子10名、女子11名）を対象に行った。「Writing Skills B」は英米語学科3年次生の必修科目で、学生は「Writing Skills A」と同時に履修することになっている。「Writing Skills A」では、1学期間にリサーチペーパーを完成させる。一方「Writing Skills B」では、毎回の授業でエッセイを書くことになっている。全ての学生は、1・2年次にネイティブ教員が担当する必修科目「Speak & Write」を履修しており、パラグラフ・ライティングやエッセイ・ライティングの経験はある。また、調査に参加した学生21人中、英語圏での生活経験が6ヶ月以上ある者は14人であった。全ての学生がTOEICを受験しているわけではないが、TOEICの点数は437点から915点まで（400点台2人、500点台4人、600点台3人、700点台1人、800点台1人、900点台1人）、TOEFLの点数は450点から493点である。個人差はあるが、ほとんどの学生は、intermediateからupper intermediateのレベルと考えられる。

指導は2010年4月から7月にかけて12回の授業で実施した。授業はパ

ラグラフ・ライティングから始め、narrative（物語）さらに5パラグラフの expository（論説文）を書かせていった。そのうちの7回はライティング指導支援システム「Criterion」を利用した。

「Criterion」はアメリカの Educational Testing Service (ETS) が開発した、インターネットベースのライティング・サポート・システムである。トピックはアメリカの小学校4年生レベルのものから大学院受験の GRE (the Graduate Record Examinations) 用のものまで用意されているが、本コースで使用したのは TOEFL の TWE (Test of Written English) である。教員は毎週ライティングのトピックを選び、学生は授業時間の30分を使って、システム上でエッセイを書き、提出する。スコアとフィードバックは提出後数秒で提示される。スコアは、文章の長さや使用語彙など様々な要因を組み合わせ、6点満点の総合的スコアで提示される。エッセイ内のエラーは、文法 (Grammar)、語法 (Usage)、構造 (Mechanics)、文体 (Style) の項目ごとにハイライトされる (Council on International Educational Exchange, n.d.) ので、学生はどこで間違いを犯しているのかを確認することはできる。しかし、このシステムでは、どの項目のエラーであるのかが分かるだけで、訂正はされない。

B. 結 果

調査1に参加した学生の、7回分のライティングの総合スコアの平均は、6点満点中3.34点であり、30分で書いた1回分のライティングの平均単語数は174.3語であった。

21人の学生が7回のライティング課題で犯したエラー数を、「Criterion」の分類に基づいて算出したものを表1にまとめる。表1に示される通り、日本人大学生の誤りで圧倒的に多いのが、Repetition of Words (エラー数3004) である。使用可能な語彙が不十分なために、同じ語句を何度も使用するのがその原因である。次に多いのが Spelling の誤り (エ

ラー数 376) であるが、この二項目は、文法というより語彙の問題なので本調査の分析からは除外する。

ある法則（文法や語法）の使用に関する誤りで一番多いのが、冠詞に関するものである。Missing/Extra Article（エラー数 335）と Wrong Article（エラー数 93）を合わせると、クラス全体で 400 を超え、ひとつのライティング課題に平均 3 個のミスがある計算になる。

次に誤りが多かった項目は Subject-Verb Agreement（エラー数 110）であった。この項目には、主語となる名詞の数、集合名詞、後置修飾など複数の要素が関わるため、誤りが頻発するようである。さらに、文構造に関する誤りも多く、Fragment/Missing Comma（エラー数 83）や Run-on Sentence（エラー数 45）の項目にも、エラーが多く検出された。

次に、誤りの多い Missing/Extra Article, Wrong Article, Subject-Verb Agreement, Run-on Sentence, Fragment/Missing Comma の 5

表 1 学生が犯したエラーの総数

Grammar (文法)		エラー数
Fragment/Missing Comma	文の断片や破片またはコンマの欠落	83
Run-on Sentence	ラン・オン・センテンス	45
Garbled Sentence	混乱した文（複数の誤り）	13
Subject-Verb Agreement	主語と動詞の呼応	110
Ill-formed Verbs	動詞の活用形ミス	36
Pronoun Errors	代名詞の誤り	0
Possessive Errors	所有格の誤り	8
Wrong/Missing Word	誤った言葉の使用, 単語が抜けている	0
Proofread This!	(見直してください) 特定のカテゴリに分類できないミス	20

Usage (語法)		エラー数
Wrong Article	冠詞の誤り	93
Missing/Extra Article	冠詞の欠落／不要な冠詞	335
Confused Words	言葉の取り違い	54
Wrong Form of Word	誤った形態	11
Faulty Comparisons	比較の誤り	2
Preposition Error	前置詞の誤り	29
Nonstandard Word Form	口語／砕けた形態	0
Negation Error	否定の誤用 (二重否定)	0

Mechanics (構造)		エラー数
Spelling	綴りの誤り	376
Capitalized Proper Nouns	固有名詞が小文字で始まる	28
Missing Initial Capital Letter in a Sentence	文の始めが小文字	44
Missing Question Mark	疑問符の欠落	1
Missing Final Punctuation	文末句読点の欠落	37
Missing Apostrophe	アポストロフィの欠落	0
Missing Comma	コンマの欠落	6
Hyphen Error	ハイフンの欠落	5
Fused Words	融合語	2
Compound Words	複合語	10
Duplicates	重複している言葉	4

Style (文体)		エラー数
Repetition of Words	頻発している言葉	3004
Inappropriate Words/Phrases	不適切な語・句	8
Sentences Beginning with Coordination Conjunctions	等位接続詞で始まる文	4
Too many Short Sentences	短い文	64
Too Many Long Sentences	長い文	6
Passive Voice	受動態の構文	9

項目に関して、「Criterion」のフィードバックが、次の課題に影響しているかを、7回のライティング課題におけるエラー数の変移で示す（図1）。

「Criterion」のフィードバックは、エラーをハイライトし、表1に示す範疇のうちどれに属するエラーなのかのみを提示するだけで、どのように訂正すべきかまでは提示しない。また、調査1では、フィードバックをもらった後に、同課題で再提出はさせずに、翌週には別の課題を提出させた。その結果、図1に示されるように、特に目立ったフィードバックの効果は見られなかった。しかし、Articleおよび Subject-Verb Agreement には、1回ごとにエラー数が増減する傾向があるので、フィードバックでエラーの多かった項目に対して、学生は多少意識し、次の課題で訂正を試みようとしているのかもしれない。ところが、Run-on Sentence や Fragment に関しては、変化はほとんど見られなかった。全員が1・2年次にネイティブ教員の指導を受けているうえに、3分の2の学生は留学経験もあるので、Run-on Sentence や Fragment については、周知のルールであると信じ

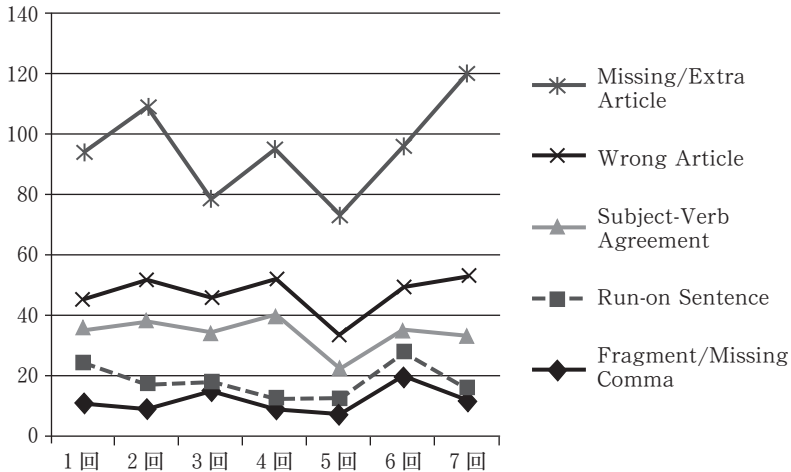


図1 7回のライティング課題における文法・語法項目ごとのエラー数の変移

ていたが、ルールに関する知識が曖昧である可能性が示唆された。そこで、調査 2 では、初回の授業で調査対象としている、(1)Article (Missing/Extra article と Wrong Article をまとめる)、(2)Subject-Verb Agreement、(3)Run-on Sentence、(4)Fragment の 4 項目に関して、学生には十分な宣言的知識があるのかを調査することから始めることとした。

IV. 調査 2

A. 研究の方法

調査 2 は、2010 年度後期、「Writing Skills B (2 組)」の受講者 16 名 (男子 6 名、女子 10 名) を対象に行った。調査 1 に参加した 1 組の学生同様、全ての学生は、1・2 年次にネイティブ教員が担当する必修科目「Speak & Write」を履修しており、パラグラフ・ライティングやエッセイ・ライティングの経験はある。調査に参加した 2 組の学生 16 名中、6 ヶ月以上の英語圏での生活経験があるのは半数にあたる 8 名である。全ての学生が TOEIC を受験しているわけではないが、TOEIC の点数は 472 点から 900 点まで (400 点台 1 人、500 点台 0 人、600 点台 3 人、700 点台 5 人、800 点台 3 人、900 点台 1 人)、TOEFL の点数は 437 点から 542 点 (400 点台 6 人、500 点台 5 人) である。1 組の学生と同様、個人差は大きい、ほとんどの学生は、intermediate から upper intermediate のレベルであると考えられる。

指導は 2010 年 9 月から 12 月にかけて 12 回の授業で実施した。ライティングを始める前に文法や語法に関する小テストを行い、(1)Article、(2)Subject-Verb Agreement、(3)Run-on Sentence、(4)Fragment に関して、自由記述で説明させ、宣言的な知識があるのか確認した。その結果、(1)Article に関しては、全ての学生が「名詞の前に置く」こと、および「不特定の名詞には a や an を使用し、特定できる名詞には the を使用する」と

いうことを記述していたので、冠詞に関する基本的な規則は知っている
と判断した。また(2)Subject-Verb Agreement に関しても、全ての学生が、
「主語が単数か複数かで動詞の形を変える」という意味のことを記述して
いるので、規則は理解していると考えられる。それに対して、(3)Run-on
Sentence に関しては、「長い文」(2名)や「走り書き」(1名)という不
正確または誤った回答があっただけで、正確に解答できる学生はいなかっ
た。(4)Fragment に関しても、「短い文」(2名)、「単文」(1名)、「つなぎ
の悪い文」(1名)という誤答があっただけで、残りの学生は何も回答し
ていなかった。そこで、(1)Article や(2)Subject-Verb Agreement に関し
ては、正しく運用できるかどうかは別として、基本的な規則は理解してい
るが、(3)Run-on Sentence や(4)Fragment に関する知識はないと判断し
た。(3)Run-on Sentence や(4)Fragment は、日本の中学校や高等学校の
学校文法では、あまり扱われない項目であるうえに、大学1・2年次の
「Speak & Write」や留学中に、学習する機会があったのだろうが、規則
として明示的に教示されていない可能性や正確に理解されていない可能性が
高いと解釈した。そこで、調査2では、学生が明示的な宣言的知識を持つ
Article と Subject-Verb Agreement, および宣言的知識のない Run-on
Sentence や Fragment を指導項目として、明示的な教示がライティングに
おけるエラー回避に役立つのかを検証していくこととした。

学生が行うライティングは、初回の授業以外は全て、ライティング指導
支援システムの「Criterion」を使用して行った。調査2では3番目の課
題以降、同じ課題で2度提出させるようにした(1回目の提出 → Feed-
back を参照して修正 → 2回目の提出)。エラー数の推移を見るために、
調査1の結果および初回の授業で行った文法小テストの結果に基づき、調
査項目は以下の4項目とした。学生が明示的な宣言的知識を持つ(1)Sub-
ject-Verb Agreement と(2)Article, および明示的な宣言的知識のない(3)
Run-on sentence および(4)Fragment である。そして、表2に示す指導

表 2 2010 年後期「Writing Skills B」(2 組) 指導内容

週	指導項目	Essay Title
1	文法項目に関する小テスト ライティングフォーマット	Change in Your School
2	パラグラフの構成	① Change in Your School (1)
3	エッセイの構成	② Change Job or Not (1)
4	Run-on Sentence	③ Hiring Employees (1)
5	Conjunction	Hiring Employees (2)
6	Simple/complex/compound sentence	④ Group Member or Leader (1)
7	Fragments/Missing Comma	Group Member or Leader (2)
8	Article	⑤ Successful Students(1) (2)
9	Introduction の書き方	⑥ Plan Children's Free Time (1) (2)
10	Body Paragraph の書き方	⑦ Show Emotion (1) (2)
11	Concluding Paragraph の書 き方	⑧ Preferred Teacher Style (1) (2)
12	復習	⑨ Why Study Abroad? (1) (2)

() 内の数字は提出回

計画を立て、それに即して授業を進めた。なお(1)Subject-Verb Agreement は統制要因として扱い、教師が明示的な指導は行わず、学生には「Criterion」の feedback analysis のみを参照させ、それだけで誤りが修正されていくのかを観察した。

B. 結 果

調査 2 に参加した学生の、9 回分のライティングの総合スコアの平均は、6 点満点中 4.31 点 (2 回目の提出の平均は 5.04 点) であり、30 分で書いた 1 回分のライティングの平均単語数は 257.0 語 (2 回目の提出の平均は 294.5 語) であった。以下、文法・語法項目ごとに結果を述べていく。

(1) Subject-Verb Agreement (明示的な指導なし, feedback analysis あり)

(1) Subject-Verb Agreement に関して、主語が単数扱いになるか複数扱いになるかで、動詞の形を変えなければならないという規則は、全ての学生が理解していたので、この文法項目に関しては教員が明示的な指導を授業中に行わず、学生には「Criterion」で提出したライティングの feedback analysis を参照して、個々の誤りを確認・訂正させ、2 回目の提出をさせた。図 2 A は 9 つのライティング課題におけるクラス全体の Subject-Verb Agreement に関わるエラー数を示す。また、課題により文章の書きやすさは異なり、書いた語数が多ければ多いほど、誤りを犯す可能性も高くなるので、各課題におけるエラー数を全ての学生が書いた総語数で割ったものをエラーの割合として算出し、図 2 B に示した。図 2 A も図 2 B も全体的な傾向は変わらない。

図 2 A・図 2 B に示されるように、2 回目の提出（点線）時にはエラー数はかなり減少するが、課題が変わると、また同様のエラーが繰り返され、全体としてエラー数は減らないことがわかる。2 回目の提出時にエラーがなくなるのは feedback analysis で、エラーの部分がハイライトされるの

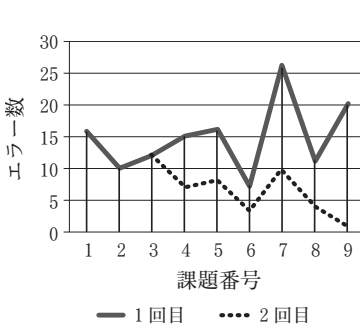


図 2 A Subject-Verb Agreement
エラー数の推移

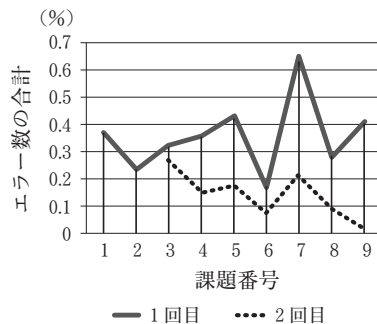


図 2 B Subject-Verb Agreement
エラー割合の推移

で、学生はそれを参照して簡単に訂正できるからである。しかし、課題が変わると、また同じような間違いを繰り返し、結果としてエラーの総数は減少していかない。Subject-Verb Agreement という既知の文法規則であっても、システムに間違いを指摘されただけではエラーは減っていかないのである。このような結果から、Subject-Verb Agreement という文法規則は、学生の中に宣言的知識として存在しているが、手続的知識にはなっていないということが示唆される。

(2) Article (明示的な指導あり, feedback analysis あり)

Article に関して、名詞の前に置き、その名詞が何か特定できる場合には the を、特定できない場合には a または an を付けるという基本的な知識は学生全員が持っていた。しかし、30分と時間が限られているライティング作業では、Article にまで注意がいかないのか、Missing/Extra Article が数多くエラーとして検出された。その多くは、欠落である。そこで、課題5の2回目の提出の前に Article に関する教示を行い、学生の意識を Article 向けさせると、このエラーの数は減り、課題が変わっても2~3週間はエラー数が減ったままであることが分かる(図3A, 図3B参照)。指導後の数週間は、学生たちは、個々の間違いではなく、規則として Article を意識して書いたのであろう。しかし、その意識も次第に薄れ、指導から3週間ほどたつと、Missing/Extra Article のエラーが増える。そのほとんどが Missing Article つまり冠詞の欠落である。つまり、明示的指導の効果は持続しないのである。

誤った冠詞 (Wrong Article) に関しても同様の傾向がみられる(図4A, 図4B参照)。指導後3週間は、冠詞に意識が行くのか誤った冠詞 (Wrong Article) の数は少ないが、1カ月もたつと指導前の状態に戻ってしまう。また、1回目の提出で Missing Article としてエラーを指摘されると、2回目の提出では、the member of a group や one of a

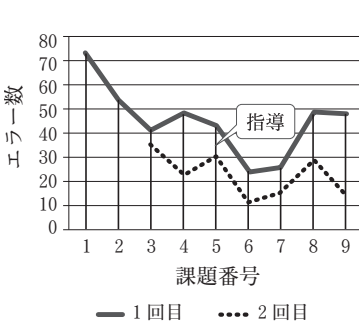


図 3 A Missing/Extra Article
エラー数の推移

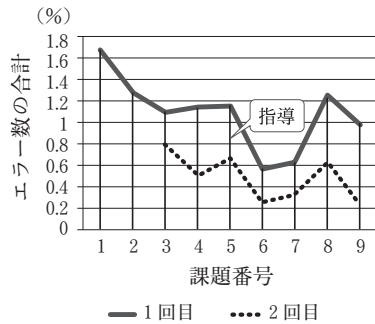


図 3 B Missing/Extra Article
エラー割合の推移

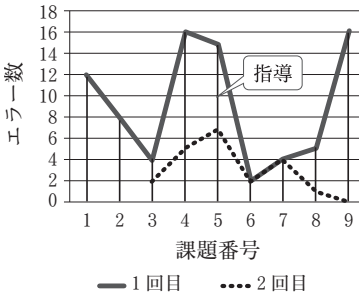


図 4 A Wrong Article
エラー数の推移

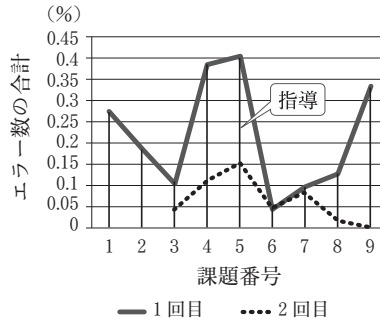


図 4 B Wrong Article
エラー割合の推移

company, as the result のような誤った訂正をしてしまう学生もいた。多くの学生は、冠詞に関する基本的な規則は知ってはいるものの、細かい規則は理解していない、または運用レベルにまで達していないことが示唆される。

(3) Run-on Sentence (明示的な指導あり, feedback analysis あり)

Run-on Sentence に関して、授業開始当初から正確かつ明示的な宣言的知識を持つ学生はいなかった。しかし、比較的単純な規則であるので、

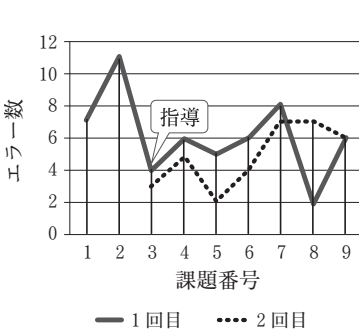


図5A Run-on Sentence
エラー数の推移

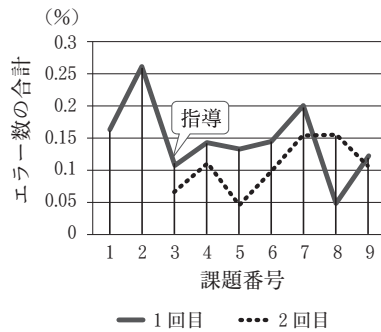


図5B Run-on Sentence
エラー割合の推移

3番目の課題の前に明示的に教示すると Run-on Sentence に関わるエラーは減り、その後目立って増えることはなかった (図5A, 図5B参照)。しかし、注目すべきことは、指導から1カ月もたつとその規則自体が記憶の中で曖昧になるのか、または他のルールが優先されてそちらに注意が向いてしまうのか、2回目の提出でも訂正できない学生がいることである。8回目の課題では、2回目の提出時の方がエラー数が多くなっている。

(4) Fragment/Missing Comma (明示的な指導あり, feedback analysis あり)

Fragment や comma に関する規則を理解させるために、等位接続詞／従属接続詞 (coordinating/subordinating conjunction) や単文／重文／複文 (simple/compound/complex sentence) に関する明示的な説明も行った。中学校・高等学校の授業を通じて、不正確な規則を記憶している学生が多いため、接続詞やコンマを誤って使用している学生がかなりいた。考慮に入れなくてはならない規則が多いこと、また、正しいと信じていた規則を精選しなければならないという認知的負担からか、Fragment/Missing Comma に関しても、指導の効果は長続きしなかった (図6A,

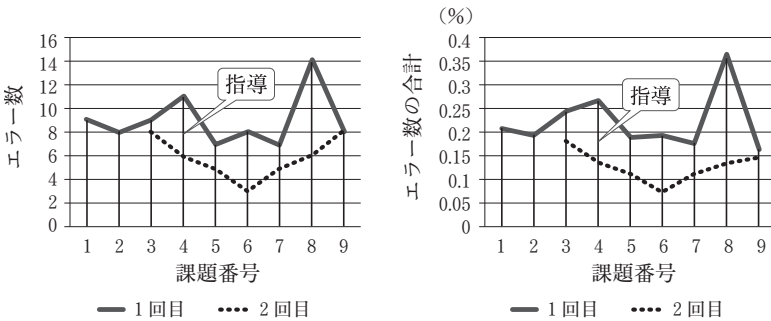


図 6 A Fragment/Missing Comma
エラー数の推移

図 6 B Fragment/Missing Comma
エラー割合の推移

図 6 B 参照)。1 カ月もたたないうちに、学生は同様のエラーを繰り返すようになり、やはりフィードバックをもらっても、訂正すらできなくなってしまうのである。Fragment/Missing Comma に関しては、規則が内在化・定着していなかったという可能性が高い。

V. まとめと考察

Subject-Verb Agreement に関わるエラーに見られるように、システムにフィードバックを任せて、教員が教示もフィードバックも与えないと、その項目に関するエラーは減っていかない。フィードバック後に再提出させると、そのエラーは修正されるが、別課題になると、また同様のエラーが繰り返される。つまり、既知の文法規則であっても、システムに間違いを指摘されただけではエラー数は減っていかないのである。これがこのようなシステムの限界なのかもしれない。また、学生には、Subject-Verb Agreement という規則が内在化されていない可能性や、文法規則を考えずにただ機械的に訂正している可能性も考えられる。したがって、既知と考えられる文法規則であっても、定期的になぜ間違いなのかを説明させる

などして、学生の中に規則を明確化させる工夫が必要なのではないだろうか。

システムのフィードバックおよび教員による教示を行った Article に関してであるが、学生にとって既知の文法規則であるうえに、比較的単純な規則であるためか、一度の教示やフィードバックでエラーの数は激減する。しかしその後、別の内容（本コースでは「Introduction の書き方」であった）を教示すると、学習者の意識は Article から離れるのか、エラー数も徐々に増加し、1 カ月もたたないうちに元の状態に戻ってしまう。つまり、Article は、規則としては学生の中に存在するのだが、運用では使用されない規則、つまり手続的知識ではなく、宣言的知識として存在している可能性が高い。基本的に習得と学習は別の過程であり、習得が学習に変わることはない (Krashen, 1982)。ということは、外国語として英語が使用されている日本に生活する大学生に習得を期待するのは現実的ではない。しがたがって、このような単純な規則であっても、定期的に教示を行い、学習者の注意を喚起していく必要があるのではないだろうか。

学生が規則について明示的に説明できなかった Run-on Sentence に関してであるが、指導後そのエラー数は半減し、その後目立って増加することはなかった。教示の最後に尋ねてみると、Run-on Sentence という用語は知らない、または失念していたが、規則を正確に説明することはできなくても、ネイティブ教員の授業で、なんとなく耳にしたことはあるという学生は半数近くいた。接続詞を使って、文を長く繋げていいかなければ回避できるという比較的簡単な規則であるうえに、曖昧ではあるものの初めて目にする規則ではなかったということも関係あるであろう、教示後、Run-on Sentence のエラーは減る。しかし、規則自体が内在化されている可能性は低く、1 カ月もたつとその規則は曖昧になり、2 回目の提出でも訂正できないような状態となってしまう。Run-on Sentence の指導後に、接続詞、単文・複文・重文について指導し（表 2 参照）、単文ばかり

書かないよう指示したことも影響しているのかもしれないが、2回目の提出では、文と文をつなげて長くする傾向が学生には見られた。

1回目の提出にはない Run-on Sentence を2回目の課題提出で書いている学生が5人いたが、興味深いことにそのうちの4人が留学経験のある学生である。彼らには、推敲する際に、接続詞を使って文を長く繋げてく傾向が見られる。このような学生のひとりが1回目に提出した文章の一部であるが、「Each student has preferences about subject. Some people are good at math, but others are not good at it.」は、2回目の提出では、「Each student has preference about subjects, so some people are good at math, but others are not good at it, and they are good at English.」となってしまう。情報を付加し、不適切な接続詞を使用して既存情報につなげていくことによって、Run-on Sentence となるのである。つまり、Run-on Sentence は、ある程度の流暢さがあるからこそ生じるエラーであり、言語能力の発達過程で必要なエラーである可能性が高い。しかし、定期的に指導を行い、ルールの明示化を行わないと、流暢さが優先されるあまり、Run-on Sentence という規則の重要性が下がり、忘却されてしまうのである。

最後に、Run-on Sentence 同様、システムからのフィードバックに加えて明示的な指導を行った Fragment や Comma に関する規則であるが、接続詞や文の種類（単文／重文／複文）に関する複雑な規則の理解を要するため、指導の効果はあまり見られなかった。中学校・高等学校の授業を通じて、不正確な規則を記憶している学生は多く、接続詞やコンマの使い方戸惑っていた。考慮しなくてはならない規則が多いこと、また既知の知識の再検討・再構築という認知的負担からか、Fragment/Missing Comma に関する指導の効果は長続きしなかった。1カ月もたないうちに、同様のエラーが繰り返されるようになり、フィードバック後の訂正もできなくなっている。つまり、Fragment/Missing Comma に関しては、

規則が内在化・定着していない可能性が高いので、定期的に明示的指導を行う必要があるだろう。

本研究の調査対象となったのは、20名程度の学生である。英語力や過去の教育経験など被験者要因もさまざまで、その結果を一般化することは難しい。また、指導期間も12週間と短いものであり、指導やその効果を観察するには十分なものとはいえない。本研究を全体的な傾向を見るためのパイロットスタディと位置付け、今後は被験者の数を増やし、より長いスパンで効果を検証していく予定である。

引用文献

- Althous, M. A., 小西正恵, 竹森晴夫, 長坂達彦, 宮浦国江, & 八谷芳樹. (2011). 『Magic Hat English Course: Writing』 東京, 日本: 教育出版.
- ベネッセ教育研究開発センター. (n.d.). 第1回中学校英語に関する基本調査 (生徒調査)・速報版. http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/seito_soku/soku_01.html
- Chin, B. A. (2000). The role of grammar in improving students' writing. Retrieved from http://www.sadlier-oxford.com/prof_development/paper_chin.cfm
- Council on International Educational Exchange. (n.d.). 『Criterion ガイドブック』 [カタログ]. 東京, 日本: 国際教育交換協議会 (CIEE) 日本代表部.
- ETS. (n.d.). Number of Japanese TOEFL test takers reaches all-time high in 2011. Retrieved from http://www.ets.org/toefl/news/japanese_toefl_reaches
- Ferris, D. R., & Hedgcock, J. S. (2012). *Teaching ESL composition: Purpose, process, and practice* (2nd ed). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Hillocks, G. Jr. (1986). *Research on written composition: New directions for teaching* (Report No. ISBN-0-8141-4075-0). Urbana, IL: National Conference on Research in English. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 26555)
- IELTS. (n.d.). IELTS 白書 2012-2013. <http://www.eiken.or.jp/ielts/pdf/>

- ielts_hakusyo.pdf
- 和泉伸一. (2009). 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京, 日本: 大修館.
- Kepner, D. G. (1991). An experiment in the relationship of types of written feedback to the development of second-language writing skills. *Modern Language Journal*, 75, 305-313. doi: 10.1111/j.1540-4781.1991.tb05359.x
- 小柳かおる. (2004). 『日本語教師のための新しい言語習得概論』東京, 日本: スリーエーネットワーク.
- Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. New York, NY: Pergamon Press.
- 望月昭彦. (2001). 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』東京, 日本: 大修館.
- 野添絹子. (2009). 英語学習につまずく大学生の認知傾向分析および事例研究. http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/30021/1/Kyoi_kugakuKenkyukaKiyoSep_16_02_No Zoe.pdf
- Raimes, A. (1983). *Techniques in Teaching Writing*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Robb, T., Ross, S., & Shortreed, I. (1986). Salience of feedback on error and its effect on EFL writing quality. *TESOL Quarterly*, 20(1), 145-158. doi: 10.2307/3586390
- Semke, H. D. (1984). Effects of the red pen. *Foreign Language Annals*, 17, 195-202.
- Truscot, J. (1996). The case against grammar correction in L2 writing classes. *Language Learning*, 46(2), 327-369. doi: 10.1111/j.1467-1770.1996.tb01238.x
- Yamamoto, J. (2012). The roles of grammar instruction in English writing class. *新潟経営大学紀要*, 18, 53-69. Retrieved from http://nirr.lib.niigata-u.ac.jp/bitstream/10623/32931/1/18_53-69.pdf

〈論 説〉

中国語の領属性“比”構文について

平 山 邦 彦

目 次

1. はじめに
2. 三種“比”構文成立度判断の立脚点
3. 成立度の高いグループ
 - 3.1 成立度の高いグループ (A)
 - 3.1.1 [1] 隷属関係
 - 3.1.2 [2] 属性関係
 - 3.2 成立度の高いグループ (B)
 - 3.2.1 [5a] 領属関係 (W が“多/少”)
 - 3.2.2 [6a] 親族関係 (W が“多/少”)
 - 3.2.3 [8] 准領属関係
 - 3.3 成立度の高いグループ (C)
4. 成立度の低いグループ
 - 4.1 [3] 材料関係
 - 4.2 [4] 類属関係
 - 4.3 [5b] 領属関係 (W が“多/少”以外)
 - 4.4 [6b] 親族関係 (W が“多/少”以外)
5. 結論

1. はじめに

本稿では領属性“比”構文を考察の対象とする。中国語の“比”構文には以下に示す如く“X 的 N 比 Y 的 NW”形式(それぞれ, X/Y は領有者, N は被領有者, W は比較の結果を示す。以下, 本稿では(a)タイプと称する)

で表わされるタイプが存在するが、この種の“比”構文には以下に示す如く数種類の変換形式が存在している。

(1) (a) 我的年纪比他的年纪大。(私の年齢は彼の年齢より上だ)

→(b) 我的年纪比他大。(私の年齢は彼より上だ)

→(c) 我年纪比他大。(私は年齢が彼より上だ)

→(d) 我比他年纪大。(私は彼より年齢が上だ)

(2) (a) 我的书比他的书多。(私の本は彼の本より多い)

→(b) 我的书比他多。(私の本は彼より多い)

→(c) 我书比他多。(私は本が彼より本多い)

→(d) 我比他书多。(私は彼より本が多い)

(3) (a) 我的书比他的书有趣。(私の本は彼の本より面白い)

→(b)* 我的书比他有趣。

→(c)*⁽¹⁾ 我书比他有趣。

→(d)* 我比他书有趣。

上に三種類の変換形式を示したが、それぞれ(b)タイプ(“X 的 N 比 YW”), (c)タイプ(“XN 比 YW”), (d)タイプ(“X 比 YNW”)となる。更には上に挙げた“比”構文全てのタイプにおける X/Y と N の間には何らかの領属関係が存在するという特徴が見られる。よって、本稿では上に挙げた(a)(b)(c)(d)タイプの“比”構文を領属性“比”構文と称する。

これら四種の領属性“比”構文に対し、朱徳熙(1982)では(a)タイプと(b)(c)(d)タイプに機能的な異なりのある点が指摘されている。具体的に述べると、前者は形式的にも意味的にも“X 的 N”と“Y 的 N”を比較したものとなる。一方、(b)(c)(d)タイプは意味的には N を基準として X と Y を比較したものとなる。更には、(b)(c)(d)タイプは(a)タイプからの変換可否についても類似点を見ることができる。即ち、多くの場合(b)(c)(d)タイプが全て成立可能(或いは容認度が高いものとなる)或いは(b)(c)(d)タイプが全て成立不可(或いは容認度が低いものとなる)の両極に分かれた現象を見る

ことができる。

以上の状況を鑑みて、本稿では次の二点に関心を覚えるところである。

- (一) (b)(c)(d)の成立不成立の個別状況を観察してみる時、そこにはどのような傾向性や特徴が見られるのか⁽²⁾。
- (二) (一)に示した(b)(c)(d)の成立不成立の状況からどのような法則性を見出せることができるのか。また何らかの法則性を見出すことができるとすれば、その規則は人間の言語活動に普遍的に存在する何らかの言語規則を反映したものであるのか。

本稿では上の二つの観点から(b)(c)(d)三種類の領属性“比”構文に対する考察を行なっていく。

2. 三種“比”構文成立度判断の立脚点

冒頭で提示したテーマについて、本稿ではX/YとNの意味関係(X/YとNは名詞性成分に限定)に着眼して議論を進める。意味関係という部分では马真(1999)が(b)タイプを議論する際に詳細な分析を行っているが、本稿でもそれに立脚して議論を進めていくことにする。马真(1999)ではX/YとNの意味関係の意味関係について次の8グループへの分類を行なっている(“ ”は原文の表現、()は筆者による日本語訳)⁽³⁾。〔1〕“隶属关系”(隷属関係)、〔2〕“属性关系”(属性関係)、〔3〕“质料关系”(材料関係)、〔4〕“类属关系”(類属関係)、〔5〕“领属关系”(領属関係)、〔6〕“亲属关系”(親族関係)、〔7〕“时地关系”(時地関係)、〔8〕“准领属关系”(准領属関係)。以下、成立度の高いグループ、低いグループと順に観察と分析を進めていく。

3. 成立度の高いグループ

成立度の高いグループに関しては、X/Y と N の意味関係、そして述語成分のタイプや分布状況から、次の(A)(B)(C)の3タイプに分けることができる。

3.1 成立度の高いグループ(A)

このグループにおける W となる成分（通常は形容詞）は開放的であり、特に統一したパターンを見ることはできない。ここでは、X/Y と N の概念的距離が非常に近く、その共起関係には一定の必然性を見出すことができる。即ち、これら X/Y と N の間では、X/Y という語彙の意味から N という情報が活性化されやすく、更には N の X/Y の支配領域における顕著性が認識され、同時に X/Y と N の間に“全体一部分”関係が認知されるものとなる。第2章で挙げた8グループのうちこのタイプに属するものは、[1]“隶属关系”（隶属関係）と[2]“属性关系”（属性関係）になる。

3.1.1 [1] 隶属関係

このグループの X/Y と N は「全体と部分」の関係を表わす。更には、「全体と部位」の関係と言い換えることもできる。

- (4) (a) 他的眼睛比你的眼睛大。(彼の目はあなたの目より大きい)⁽⁴⁾
→(b) 他的眼睛比你大。(彼の目はあなたより大きい)
→(c) 他眼睛比你大。(彼は目があなたより大きい)
→(d) 他比你眼睛大。(彼はあなたより目が大きい)
- (5) (a) 孩子的皮肤比大人的皮肤嫩。(子供の肌は大人の肌より柔らかい)
→(b) 孩子的皮肤比大人嫩。(子供の肌は大人より柔らかい)

→(c) 孩子皮肤比大人嫩。(子供は肌が大人より柔らかい)

→(d) 孩子比大人皮肤嫩。(子供は大人より肌が柔らかい)

(6) (a) 狐狸的尾巴比狼的尾巴大。(キツネの尾はオオカミの尾より大きい)

→(b) 狐狸的尾巴比狼大。(キツネの尾はオオカミより大きい)

→(c) 狐狸尾巴比狼大。(キツネは尾がオオカミより大きい)

→(d) 狐狸比狼尾巴大。(キツネはオオカミより尾が大きい)

(4)(5)におけるN“眼睛”(目)，“皮肤”(皮膚)はヒト(“他/你”“孩子/大人”)というカテゴリーの中で必要不可欠なものである。(6)におけるN“尾巴”(尾)も“狐狸”(キツネ)，“狼”(オオカミ)という動物と部位として不可避的な存在物である。以上の如く、Nの顕著性とX/YとNにおける“全体-部分”関係は容易に発見できるものとなる。

ここで一点補足を加えておきたい。冒頭でも触れたが、(b)(c)(d)三種の“比”構文は、何れも意味的にXとYを比較したものである。よってNW(上の例ではそれぞれ“眼睛大”(目が大きい)，“皮肤嫩”(皮膚が柔らかい)，“尾巴大”(尾が大きい))はX/Yのある一側面を表わした文とすることができる。またヒトの言語活動において外部世界の描写において身体的特徴を述べることは往々にして用いられる手段である。換言すれば、身体部位の特徴は、全体に対する何らかの印象を与えるものとなる。この部分から見ると、このグループにおけるNは単にX/Yの部位を表わすだけでなく、更にはX/Yのある種の属性を象徴したものと捉えることができる⁽⁵⁾。

3.1.2 [2] 属性関係

このグループは事物と(能力、性質等を含む)属性との間の関係を表わす。

(5) (a) 我的年纪比他的年纪大。(私の年齢は彼の年齢より上だ)

- (b) 我的年纪比他大。(私の年齢は彼より上だ)
- (c) 我年纪比他大。(私は年齢が彼より上だ)
- (d) 我比他年纪大。(私は彼より年齢が上だ)
- (7) (a) 他的脾气比你的脾气好。(彼の気立てはあなたの気立てよりよい)
- (b) 他的脾气比你好。(彼の気立てはあなたよりよい)
- (c) 他脾气比你好。(彼は気立てがあなたよりよい)
- (d) 他比你脾气好。(彼はあなたより気立てがよい)
- (8) (a) 飞机的速度比汽车的速度快。(飛行機の速度は自動車の速度より速い)
- (b) 飞机的速度比汽车快。(飛行機の速度は自動車より速い)
- (c) 飞机速度比汽车快。(飛行機の速度が自動車より速い)
- (d) 飞机比汽车速度快。(飛行機は自動車より速度が速い)

以上の例においても(b)(c)(d)各グループとも成立する。属性は不可視なものであるが、ある事物を構成する上で必要不可欠なものとなり、必然性の強さも否定しようのないものである。言わば「不可視的な部分」と見なすことができる。よって、NのX/Yの支配領域における顕著性も言わずと知れたものとなる。更には、3.1で論じた“隶属关系”(隷属関係)同様、比較項X/Yと比較点Nの間にも“全体-部分”関係を見出すことができることとなる。

ここで、隷属関係と属性関係のX/Yとの間における「全体-部分」性の強弱について触れておきたい。3.1.1で既に論じたが、隷属関係のNはX/Yの属性的特徴を表わすものである。この点から見る時、隷属関係も属性関係をベースとするものとなる。この部分は、統語的な特徴からも見出すことができる。

また、3.1.1でも言及したが、この三種の“比”構文は主述述語文XNWをベースとしたものである。更には一般的な言語コミュニケーションにお

いてNがデフォルト値(default value)となる場合、経済性原則に基づき省略されるのはよく見られる現象である。では隷属物と属性のどちらの省略が許容されるか、少し考えてみたい。まずは、以下の例文を見られたい((9)(10)は袁毓林(1994:247)から引用)。

(9) (a) 他心里非常难受。(彼は心の中が非常にやりきれない)

→他非常难受。(彼は非常にやりきれない)

(b) 他肚子非常难受。(彼はお腹の中が非常にづらい)

—/→*他非常难受。

(10) 这个人性格非常凶狠。(この人は性格が非常に獐猛だ)

→这个人非常凶狠。(この人は非常に獐猛だ)

这个人外貌非常凶狠。(この人は見た目が非常に獐猛だ)

—/→*这个人非常凶狠。

袁毓林(1994:247)では、上のように主述述語文からの小主語(それぞれ“心里”“肚子”“性格”“外貌”)の省略可否から次のような分析を加えている。

“我们发现形容词的选择特征的强弱排列是有一定的规律的。一般的情况是,整体属性强于局部属性,心里属性强于物理属性。例如:(心里>全身>肚子)难受;(样子>颜色>领子)大方;(性格>外貌>眼睛)凶猛;(性格>态度>言语)温和”⁽⁶⁾

ここで省略可能なタイプ“心里”“性格”と省略不可能なタイプ“肚子”“外貌”を鑑みる時、前者の方が後者より輪郭や外延における曖昧性の強さ、という特徴を見出すことができる。換言すれば、それぞれ袁毓林(1994:247)の指し示す“整体属性”と“局部属性”,“心里属性”と“物理属性”に存在する差異はある種抽象性と具体性の差異と通ずる部分があるように考えられる。

以上の点を総括してみると、顕著性と「全体一部分」関係の顕現度は抽象度を強く帯びている属性関係の方が具体性をより強く帯びた隷属関係より勝るものとなる。また隷属関係においても何らかの属性を象徴する機能のある点を鑑みると、隷属関係は属性関係をプロトタイプ (prototype) とした一種の拡張 (extension) モデルと表現することができる。

3.2 成立度の高いグループ(B)

このグループの特徴は W を構成する成分は閉鎖的な形式を表わすという点である。更には X/Y と N の組み合わせを見ただけでは必然性は見出しにくい。よって、X/Y の語彙的意味からは N の活性化は生じないものとなる。しかし、“比”構文の構文的意味 (constructional meaning) の機能により N の活性化が成され、N は比較的 X/Y の支配領域における顕著性を有しやすくなる。更には X/Y と N の間に「全体一部分」関係が認識されやすくなる。更には、N は X/Y のある種の属性としての性格を呈することになる。上に挙げたグループの中でこのタイプに属するのは、[5a] “領属関係” (領属関係) (W が “多/少”), [6a] “亲属关系” (親族関係) (W が “多/少”), [8] “准領属关系” (准領属関係) の 3 タイプになる。

3.2.1 [5a] 領属関係 (W が “多/少”)⁽⁷⁾

この部分の領属関係は、分離可能な領有者と被領有者の関係を表わす。

- (11) (a) 张华的猫比李军的猫多/少。(張華のネコは李軍のネコより多い/少ない)
→(b) 张华的猫比李军多/少。(張華のネコは李軍より多い/少ない)
→(c) 张华猫比李军多/少。(張華はネコが李軍より多い/少ない)
→(d) [?]张华比李军猫多/少。(張華は李軍よりネコが多い/少ない)
- (12) (a) 张三的衣服比李四的衣服多/少。(張三の服は李四の服より多い/少ない)

- (b) 张三的衣服比李四多/少。(張三の服は李四より多い/少ない)
- (c) 张三衣服比李四多/少。(張三は服が李四より多い/少ない)
- (d) 张三比李四衣服多/少。(張三は李四より服が多い/少ない)
- (13) (a) 毛毛的玩具比小红的玩具多/少。(毛毛の玩具は小紅の玩具より多い/少ない)
- (b) 毛毛的玩具比小紅多/少。(毛毛の玩具は小紅より多い/少ない)
- (c) 毛毛玩具比小紅多/少。(毛毛は玩具が小紅より多い/少ない)
- (d) 毛毛比小紅玩具多/少。(毛毛は小紅より玩具が多い/少ない)
- (14) (a) 小王的麵包比小李的麵包好吃。(王さんのパンは李さんのパンよりおいしい)
- (b)* 小王的麵包比小李好吃。
- (c)* 小王麵包比小李好吃。
- (d)* 小王比小李麵包好吃。

ここで挙げた X/Y と N は決して珍しい組み合わせではない。しかし N の有無は X/Y の外延或いは内包の形成に対し根本的な影響力を及ぼすものとはなり得ない。よって通常は例(14)に示す如く、上に挙げた三類は何れも成立しにくいものとなる。では W が“多/少”となる時、いかなる理由でその成立度が増すのであろうか。この点については形式と意味の双方から説明することができる。

形式的な角度から見ると、上の“比”構文3種形式“X 的 N 比 Y 多/少”“XN 比 Y 多/少”“X 比 YN 多/少”は何れも一つの前提を含むものである。ここで挙げた形式は何れも X/Y に含まれる N の領有物の多い少ないを比べるものである。数の多さを比較するということは両者が N をある数有していることが前提となる。換言すれば、これら“比”構文には“X 有数量 N/Y 有数量 N”という“有”構文の存在が前提となる。例えば(12)を例にとると、話者には“张三有 {一、两、三…n} 件衣服”‘李四有 {一、两、

三…n} 件衣服”という数量詞を伴う2つの文の存在が前提となっている。ここで、数量詞の機能について注目しておきたい。周知の如く、中国語の文においては名詞性語句の前における数量詞の有無が文成立に影響を及ぼすパターンが多く存在する。

(15) 这天，我们村死了一个老太太。(→*老太太)。(この日、私達の村で一人の老婦人がお亡くなりになりました)〔古川 1997：242〕

(16) 拿出来一本书 (→*书) [本を取り出す]⁽⁸⁾〔古川 1997：251〕

このような現象に対して、古川(1997)では数量詞が後ろの名詞を〈目立たせる〉機能を有しているから、と指摘している。この観点から見る時、三種“比”構文において“多/少”が用いられる際文の許容度が上がる点に対しては、次のように説明することができる。本節で挙げたWに“多/少”に用いた三種類の文では、“比”構文の構文的意味によりNの定語(連体修飾語)である数量詞の存在が活性化される。数量詞には名詞性成分Nを〈目立たせる〉機能を有しているため、NにはX/Yの支配領域における顕著性が見いだされるようになる。同時にX/YとNにおける“全体一部分”関係が認知されることになる。

次に、意味の角度から分析してみたい。ここでNの数量という点について着目すると、3.1で挙げた各グループにおいてはX/Yに対しては固定された数量(絶対量)となる。一方本節で挙げた例においてNの数は変動的なもの(相対量)である。凡そ相対量の差は往々にしてその所有者の生活、能力或いは生活環境等のある種の属性を象徴するものとなる。換言すれば、可視的事物の数量はその所有者の不可視の側面を推測する手がかりになるのである。当然のことながら、NとX/Yの組み合わせが恒常的なものならば文は容認されやすくなる。例えば(12)について見ると、「服が多い」という情報がインプットされる(側面を見る)と、「衣服へのこだわりがある」「おしゃれである」等の見えない属性に対する想像を膨らませることが可能となる。かくの如く、本来具体的な物質を表わしていた

Nが属性象徴物と変わり、やはりX/Yの支配領域における顕著性とX/YとNにおける「全体一部分」関係を認知することができるようになる。更には、この点を見る時、このグループのX/YとNは属性関係の一種の拡張(extension)形式と見ることができる。

3.2.2 [6a] 親族関係(Wが“多/少”)

このグループには、親類関係はもちろんのこと、師弟関係や身分的上下関係も含まれることになる。

- (17) (a) 我的朋友比你的朋友多/少。(私の友人はあなたの友人より多い/少ない)
 →(b) 我的朋友比你多/少。(私の友人はあなたより多い/少ない)
 →(c) 我朋友比你多/少。(私は友人があなたより多い/少ない)
 →(d) [?]我比你朋友多/少。(私はあなたより友人が多い/少ない)
- (18) (a) 我的孩子比你的孩子多/少。(私の子供はあなたの子供より多い/少ない)
 →(b) 我的孩子比你多/少。(私の子供はあなたより多い/少ない)
 →(c) 我孩子比你多/少。(私は子供があなたより多い/少ない)
 →(d) [?]我比你孩子多/少。(私はあなたより子供が多い/少ない)
- (19) (a) 我的姐姐比你的姐姐多/少。(私の姉はあなたの姉より多い/少ない)
 →(b) 我的姐姐比你多/少。(私の姉はあなたより多い/少ない)
 →(c) 我姐姐比你多/少。(私は姉があなたより多い/少ない)
 →(d) [?]我比你姐姐多/少。(私はあなたより姉が多い/少ない)
- (20) (a) 你的姐姐比小王的姐姐漂亮。(あなたの姉は王さんの姉より美しい)
 →(b)* 你的姐姐比小王漂亮。
 →(c)* 你姐姐比小王漂亮。

→(d)* 你比小王姐姐漂亮。

ここで取り上げた X/Y と N は親族関係を始めとした社会関係という認知領域 (cognitive domain) をベースとしたお互いに独立した役割となる。X/Y と N はそれぞれ独立した存在物となるので、通常 N は X/Y の支配領域には存在せず、顕著性も当然生じえなくなる。よって例(20)に示す如く、一般的には不成立となる。では W が“多/少”の場合、何故許容度が高くなるのであろうか。この部分についても形式と意味の両面から説明することができる。

まずは意味の角度から見ると、概して人間関係は往々にしてその人の生活や人柄を形成する上での大きな鍵となる。更には関わる人間の多さは、ある人物の生活環境や人柄、社会的地位等不可視の属性を知る上での手がかりとなるものである。ここで(17)を例にとると、“朋友多”(友人が多い)という点は、「人柄が素晴らしい」「親しみやすい」「社交的だ」等の属性に対する想像を巡らす手がかりとなるよって、例(17)(18)(19)における N の意味役割はお互いに独立した個体から X/Y の被領有者、更には属性の象徴体となる。それにより、X/Y の支配領域の中で顕著性を帯び、X/Y と N の間に“全体-部分”関係が認知されてくることになる。

形式の面から説明すると、領属関係同様に、成立グループでは三種の“比”構文“X 的 N 比 Y 多/少”“XN 比 Y 多/少”“X 比 YN 多/少”の構文的意味により“X 有数量 N/Y 有数量 N”という“有”構文が活性化される形となり、3.2.1 の領属関係と同様に、このグループでも N は X/Y の支配領域における存在物と認識され顕著性を帯びることとなる。同時に X/Y と N による“全体-部分”関係も認知されるものとなる。

以上の点より、このグループにおける X/Y と N の結合関係は領属関係 [5a] の拡張形式と見ることができる。

3.2.3 [8] 准領属関係

このグループにおける X/Y と N はヒトと技能の関係となる。例文を参照されたい。

- (21) (a) 他的 围棋 比 我的 围棋 下 得 好。(彼の碁は私の碁より上手だ)
 →(b) 他的 围棋 比 我 下 得 好。(彼の碁は私より上手だ)
 →(c) 他 围棋 比 我 下 得 好。(彼は碁が私より上手だ)
 →(d) 他 比 我 围棋 下 得 好。(彼は私より碁が上手だ)
- (22) (a) 小周的 小提琴 比 小李的 小提琴 拉 得 好。(周さんのバイオリンは李さんのバイオリンより上手だ)
 →(b) 小周的 小提琴 比 小李 拉 得 好。(周さんのバイオリンは李さんより上手だ)
 →(c) 小周 小提琴 比 小李 拉 得 好。(周さんはバイオリンが李さんより上手だ)
 →(d) 小周 比 小李 小提琴 拉 得 好。(周さんは李さんよりバイオリンが上手だ)
- (23) (a) 王平的 手榴弹 比 张兵的 手榴弹 投 得 远。(王平の手榴弾は張兵の手榴弾より遠くに飛ぶ)
 →(b) 王平的 手榴弹 比 张兵 投 得 远。(王平の手榴弾は張兵より遠くに飛ぶ)
 →(c) 王平 手榴弹 比 张兵 投 得 远。(王平は手榴弾が張兵より遠くに飛ぶ)
 →(d) 王平 比 张兵 手榴弹 投 得 远。(王平は張兵より手榴弾が遠くに飛ぶ)

本節の冒頭でも示したが、このグループにおける N は技能を表している。技能とは一種の属性となるので、その成立度が高くなるのは当然理に合ったことと言える。但し、中国語で単純に“X 的 N”というフレームの中で N を技能と認識するにはいささか障害があるようである。この部

分は上の例より“V得”を取り去ると、少なからぬ状況で容認度の低下する点から見てとることができる。

(21') (a)* 他的 围棋 比 我的 围棋 好。

→(b) [?] 他的 围棋 比 我好。

→(c) 他 围棋 比 我好。

→(d) ^{??} 他 比 我 围棋 好。

(22') (a)* 小周的 小提琴 比 小李的 小提琴 好。

→(b) [?] 小周的 小提琴 比 小李好。

→(c) [?] 小周 小提琴 比 小李好。

→(d) ^{??} 小周 比 小李 小提琴 好。

(23') (a)* 王平的 手榴弹 比 张兵的 手榴弹 远。

→(b)* 王平的 手榴弹 比 张兵远。

→(c)* 王平 手榴弹 比 张兵远。

→(d)* 王平 比 张兵 手榴弹 远。

上の例からも明らかのように、このグループでは“X 的 N 比 YV 得怎么样”“XN 比 YV 得怎么样”“X 比 YNV 得怎么样”という三種“比”構文の構文的意味により N は技能という属性として設定されていることが分かる。同時に N は構文的意味により X/Y の支配領域における顕著性を帯び、X/Y と N の間に“全体—部分”関係の構成されていることを見てとることができる。この点からみる時、X/Y と N の結合関係も属性関係の拡張形式と見なすことができる。

3.3 成立度の高いグループ(C)

この大グループは成立不成立の状況について、X/Y と N の各組み合わせにおいて大きな隔たりが見られる。この大グループに属するのは次のグループのみである。

[7a] “时地关系”(時地関係)

このグループは事物とそれが産出された時間或いは場所との関係を表す。例文を参照されたい。

- (24) (a) 今年的气温比去年高。(今年の气温は去年の气温より高い)
 →(b) 今年的气温比去年高。(今年の气温は去年より高い)
 →(c) 今年气温比去年高。(今年は气温が去年より高い)
 →(d) 今年比去年气温高。(今年は去年より气温が高い)
- (25) (a) 今天的报纸比昨天的报纸有意思。(今日の新聞は昨日の新聞より面白い)
 →(b) ^{??}今天的报纸比昨天有意思。(今日の新聞は昨日より面白い)
 →(c) ^{??}今天报纸比昨天有意思。(今日は新聞が昨日より面白い)
 →(d) ^{??}今天比昨天报纸有意思。(今日は昨日より新聞が面白い)
- (26) (a) 今年的玉华比去年的玉华能干多了。(今年の玉華は去年の玉華よりずっと有能だ)
 →(b) 今年的玉华比去年能干多了。(今年の玉華は去年よりずっと有能だ)
 →(c) [?]今年玉华比去年能干多了。(今年は玉華が去年よりずっと有能だ)
 →(d)* 今年比去年玉华能干多了。(今年は去年より玉華がずっと有能だ)

ここで(b)(c)(d)について例(24)では容認度が高くなっている。これはNがX/Yの内包を形成する上での必須要素となっているからであろう。この例におけるN(“气温”)は1年間365日いかなる日時時刻に関わらず存在し続けるものである。即ちX/YとNの認知方式はヒトの身体感覚をベースとした枠組み(基本領域(basic domain)⁽⁹⁾)によるものである。かくの如く、NはX/Yの支配領域における顕著性、更にはX/YとNの

間に顕現された“全体一部分”関係が認識されやすいものとなる。付け加えれば、この例におけるNには明確な外延が存在していない。また先に述べたように、Nはある時点を構成する上での必須要素となる。つまりは、ある場所や時期を象徴する属性と見ることができる。この点からみる時、X/YとNの結合は属性関係の拡張形式と見ることができる。

次に(b)(c)(d)の成立度が低くなる(25)について見ていきたい。この部分で、NはX/Yを形成する上で必須要素となるものではない。例えば“报纸”(新聞)は現代社会において一般的には毎日発行されているものである。しかし新聞という存在の消失は1日1日の消失を意味することには成りえない。ここでNはX/Yが存在する上では任意的な要素であり、X/Yという認知フレームに依存することのない独立性の高いものとなる。この部分におけるX/YとNの結合性は社会生活を通じた経験によって初めて認識されるものである。即ち、その認知方式は経験領域(experiential domain)を土台として形成されるものである。よって、その認知レベルは各人の生活環境によって差異が生じるものとなる。そのため、Nの支配領域X/Yにおける顕著性とX/YとNによる「全体一部分」関係は認知にくいものとなる。更に付け加えれば、この部分のNは明確な外延を備えているので、ある場所における領有物と見ることができる。故に、これらの例におけるX/YとNの関係は領属関係と類似していると考えられる。この角度から考えてみる時、X/YとNは領属関係の拡張形式と見ることができる。

例(26)は(b)(c)(d)三種の文において成立度における差異が存在する(その中でも、特に(d)の成立度は低いものとなる)。ここでNとして用いられている“玉华”は、まずは「ヒト」という範疇の構成メンバーと見ることができる。時間軸(X/Y)において「ヒト」の存在は容易に推測できるものとなる。この角度から判断すると、NはX/Yの中でごく自然に想定されるものとなる。当然Nの顕著性とX/YとNの「全体一部分」関係は

認知されやすいものとなる。更に踏み込んで言えば，“玉华”という人物は明確な外延を備えており，更には話者の中である時間に対する何らかのイメージを与えた要素となっている。この点から見ても N（“玉华”）にもある主の属性的要素を見出すことができよう。この角度から見る時，X/Y と N は [1] 隷属関係の一種の拡張形式と見ることができる⁽¹⁰⁾。これに対してもう一方で，“玉华”の特定人物という側面にスポットを当てれば，N は誰もが認識できる普遍的要素とは成りえないので，X/Y を形成する上での必須メンバーとも成りえないわけである。当然この部分では N の支配領域 X/Y における顕著性，そして X/Y と N における「全体一部分」関係は見出しにくいものとなる。よって X/Y と N の関係は領属関係の一種の拡張形式であると見ることができる。

以上の点から，成立グループにおける X/Y と N のペアは属性関係と隷属関係の拡張形式の組み合わせだった一種の混合形式と分析することができる。

4. 成立度の低いグループ

成立度の低いグループに関しては，第3章で指摘したような顕著性と「全体一部分」関係は見出しにくいものとなる。以下簡単に列挙し紹介を行なっておく。

4.1 [3] 材料関係

このグループは製品と材料の関係を表す。

(27) (a) 木头的桌子比铁的桌子轻。(木製の机は鉄製の机より軽い)

→(b)* 木头的桌子比铁轻。

→(c)* 木头桌子比铁轻。

→(d)* 木头比铁桌子轻。

(28) (a) 銀的筷子比木头的筷子重。(銀製の箸は木製の箸より重い)

→(b)* 銀的筷子比木头重。

→(c)* 銀筷子比木头重。

→(d)* 銀比木头筷子重。

ここで X/Y と N の認知プロセスについて見ると、一般的には具体的な物質である N を認知した後に材料を表す X/Y が認知されることになる。通常の認知原則から見る場合、具体的なものから抽象的なものへという手順を踏むのが自然な流れとなる。例えば (27) について、“桌子” (机) の材料が木製なのか鉄製なのかは“桌子”という物体を認知する必要が出てくる。かくの如く、N は X/Y という認知フレーム上に存在していないので、X/Y の支配領域にも存在しないことになる。当然、顕著性や“全体一部分”関係も見いだせないものとなる。

4.2 [4] 類属関係

このグループはある事物と特性との関係を表す。

(29) (a) 百年的树比十年的树粗。(100 年の木は 10 年の木より太い)

→(b)* 百年的树比十年粗。

→(c)* 百年树比十年粗。

→(d)* 百年比十年树粗。

(30) (a) 四个腿的桌子比三个腿的桌子贵。(4 本足の机は 3 本足の机より〔値段が〕高い)

→(b)* 四个腿的桌子比三个腿贵。

→(c)* 四个腿桌子比三个腿贵。

→(d)* 四个腿比三个腿桌子贵。

ここでも X/Y と N の認知プロセスは一般的に具体的な物質を表す N の方が特性を表す X/Y より先に認識されるという点である。例えば(29)を見ると、“树” (木) の樹齡が何歳かを知るには、“树” (木) という物体

を認識せずには不可能となる。以上、ここでもNはX/Yという認知フレームに依拠して存在するものではなくなる。よって、X/Yの支配領域において存在し得ない。当然顕著性や「全体-部分」関係も見出し得ないものとなる。

4.3 [5b] 領属関係(Wが“多/少”以外)⁽¹¹⁾

- (31) (a) 我们的狗比你们的狗听话。(私達のイヌはあなた達のイヌより聞き分けがよい)
 →(b)* 我们的狗比你们听话。
 →(c)* 我们狗比你们听话。
 →(d)* 我们比你们狗听话。
- (32) (a) 张华的猫比李军的猫跑得快。(張華のネコは李軍のネコより走るのが速い)
 →(b)* 张华的猫比李军跑得快。
 →(c)* 张华猫比李军跑得快。
 →(d)* 张华比李军猫跑得快。
- (33) (a) 小王的面包比小李的面包好吃。(王さんのパンは李さんのパンよりおいしい)
 →(b)* 小王的面包比小李好吃。
 →(c)* 小王面包比小李好吃。
 →(d)* 小王比小李面包好吃。

これらの例が不成立な理由に関しては3.2.1で言及済みである。よって、ここで詳述しないことにする。

4.4 [6b] 親族関係(Wが“多/少”以外)

- (34) (a) 张三的父亲比李四的父亲能干。(張三の父親は李四の父親より有能だ)

→(b)* 张三の父亲比李四能干。

→(c)* 张三父亲比李四能干。

→(d)* 张三比李四父亲能干。

(35) (a) 你的姐姐比小王的姐姐漂亮。(あなたのお姉さんは王さんのお姉さんより美しい)

→(b)* 你的姐姐比小王漂亮。

→(c)* 你姐姐比小王漂亮。

→(d)* 你比小王姐姐漂亮。

(36) (a) 王老师的学生比阳老师的学生活跃。(王先生の学生は陽先生の学生より活発だ)

→(b)* 王老师的学生比阳老师活跃。

→(c)* 王老师学生比阳老师活跃。

→(d)* 王老师比阳老师学生活跃。

これらの例が不成立な理由に関しては3.2.2で言及済みである。よって、ここで詳述しないことにする。

5. 結 論

本稿では(b)(c)(d)三種類の領属性“比”構文の成立状況及びその中に貫かれた原則を着眼点として分析を加えていった。最後に、その結論を以下に纏めておきたい。

- (一) (b)(c)(d)の成立度が比較の高いグループは次の6種類となる：〔1〕隷属関係，〔2〕属性関係，〔3〕領属関係（Wが“多/少”），〔4〕親族関係（Wが“多/少”），〔5〕（一部分の）時地関係，〔6〕准領属関係。これらが成立する理由は、X/Yの語彙的意味或いは“比”構文の構文的意味により、X/YにおけるNの顕著性と、この両者における「全体一部分」関係が見出される点にある。

- (二) 本稿の中でも指摘通り、三種の“比”構文は何れも「属性関係」をプロトタイプ (prototype) として一連の拡張 (extension) プロセスを辿ったものである。その具体的なプロセスは次の通りになる：(1)始めに属性関係から「隷属関係」,「(一部の) 時地関係」,「領属関係 (W が“多/少”）」,「准領属関係」へ拡張。(2)始めに拡張されたグループの中で「領属関係」は「(一部の) 時地関係」へと拡張。(3)始めに拡張されたグループの中で「領属関係 (W が“多/少”）」は「親族関係 (W が“多/少”）」へと拡張。以上(1)(2)(3)の拡張プロセスから観察する時、成立グループの拡張方式は一種の放射状カテゴリー (radial category) を形成しているという特徴が見出せる。

《注》

- (1) 本稿に示す(b)(c)(d)タイプの非文マークは、容認度の高い方から順に“?” “??” “*” の三種類で示している。
- (2) 成立度という観点に関して(b)(d)形式については、平山 (2009, 2010a, 2010b, 2010c, 2011) において言及済みである。本稿では(b)(d)形式成立に貫かれた条件が(c)形式にも適応できるかという点を主な関心点としている。
- (3) 議論の都合上、(1)から(8)の配列は马真 (1999 : 181-182, 2004 : 280-281) のものに若干の調整を加えている。
- (4) 本稿の例文訳は特に言及がない場合、筆者によるものである。
- (5) この点に関して先行研究においても類似した観点からの記述が見られる。例えば刘月华 (2001 : 842) において“我觉得猫的眼睛比狗(的)(眼睛)亮。” (私は猫の目は犬(の)(目)よりキラキラしていると感じる) 等の例を挙げながら次の指摘がなされている：

一般来说, 如果作为比较方面的属性只适用于 A 项和 B 项, 不会适用于 B 项中的定语, 那么除可省中心语外, 还可将结构助词“的”省去, 而不会改变原句的句义。

(一般的に、もしも比較に用いられる属性が B 項の中心語 (被修飾語) として適用されるのではなく、A 項及び B 項の双方に適用される場合のみ、中心語以外に“的”を省略しても元来の文意は変わらないものとなる)

この部分から見るように、刘月华 (2001) は隷属物の“眼睛”を属性として見なしている点を見出すことができる。

- (6) 省略という部分について本文で提示したいのは属性関係の方が隷属関係よりデフォルト値になりやすいという点である。属性物であっても省略不可のものは多々存在する。換言すれば、属性においてもその程度に差異は存在している。袁毓林(2008:116)では、XとWの間における意味接点(“语义节点”)の部分が鍵とある。更には次の説明が行われている。例えば“房子大”(部屋が広い)という文で一般的にデフォルトとなるNは“体积”(体積)ではなく“面积”(面積)となる。その理由として、“房子大”という言葉を目にした時、[面积](面積)、[体积](体積)という二つの意味接点の他に、[住人](人を住まわせる)という意味接点の加入により[面积](面積)という意味接点としての性格が加重されたことにあるという。
- (7) 本節(3.2.1)で示した「領属」は、本稿全体で示す「領属」とは異なり狭義の「領属」を示している。
- (8) 例(16)の例文訳は古川(1997)によるものである。
- (9) 辻(2002:64)参照。
- (10) (26)の成立度に隔たりの見られる要因としては、更に「特定—不特定」を巡る語順原則の作用していることが挙げられる。周知の如く、中国語の語順では一般的に特定の成分は前に置かれる傾向が強く、不特定な成分ほど後ろに置かれる傾向性が強くなる。ここで“玉华”は特定成分となる為(b)(c)(d)成立度の差異は、この語順原則と基本的に合致したものとなる。更に、本稿の調査では例文(c)の容認度は(b)に劣るものとなる。紛れもなく“玉华”は“今年”という時間成分より特定性がずっと強くなる。この点から見ると、(c)は配列順序はこの原則に反したものとなるので完全に容認できるものとなりにくいことが推測される。一方で例文(b)は構造助詞“的”の機能を借りて、その容認度を保っていることが考えられる。
- (11) 本節(4.3)における領属関係も、3.2.1同様、狭義のものを指す。

参考文献

- 刘丹青(2003)《语序类型学与介词理论》,北京:商务印书馆。
- 刘焱(2004)《现代汉语比较范畴的语义认知基础》,上海:学林出版社。
- 刘月华等(2001)《实用现代汉语语法(增订本)》,北京:商务印书馆。
- 陆丙甫(2008)语序类型学理论与汉语句法研究,《当代语言学理论和汉语语法研究》,北京:商务印书馆,241-256。
- 马真(1999)“比”字句新探,《现代汉语虚词散论》,北京:语文出版社,179-204。

- 马真(2004)《现代汉语虚词研究方法论》,北京:商务印书馆。
- 孟维智(1987)关于一个“比”字句的分析《语文研究》第1期,17-19。
- 平山邦彦(2010a)“他比我年纪大”类的“比”字句——兼谈“他的年纪比我大”《东方语言学》第7辑,15-26。
- 平山邦彦(2010b)論“他比我年紀大”類の“比”字句. US-China Foreign Language 8 (6), David Publishing Company, 1-5.
- 平山邦彦(2011)汉日比较句“他的年纪比我大”和“彼の年齢は私より上だ”《汉日对比研究论丛》第2辑,111-120。
- 杉村博文(2007)基于汉外对比的教学语法,《汉语教学学刊》第3辑,北京:北京大学出版社,163-174。
- 沈家煊(2006(b))转指与转喻,《认知与汉语语法研究》,北京:商务印书馆,30-52。
- 沈家煊(2006(c))再谈“有界”与“无界”,《认知与汉语语法研究》,北京:商务印书馆,177-194。
- 许国萍(2007)《现代汉语差比范畴研究》,上海:学林出版社。
- 袁毓林(1994)一价名词的认知研究,《中国语文》第4期,103-125。
- 袁毓林(2008)面向当代科技的语言研究的理论和方法,《基于认知的计算机语言学研究》,北京:北京大学出版社,115-133。
- 张旺熹(1993)主谓谓语句的语义模式,《世界汉语教学》第3期,161-167。
- 朱德熙(1982)《语法讲义》,北京:商务印书馆。
- 朱德熙(1999)关于“比”字句,朱德熙编《朱德熙文集》第3卷,北京:商务印书馆,48-49。
- 古川裕(1997)数量詞限定名詞句の認知文法——指示物の〈顯著性〉と名詞句の〈有標性〉,『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』,東京:東方書店,237-266。
- 平山邦彦(2009)“X比YNW”と「AはBよりもCがD」についての一考察,『日中言語対照研究論集』第11号,93-107。
- 平山邦彦(2010c)“他的年纪比我大”類の“比”構文について——その変換に着目して『拓殖大学 語学研究』第123号,93-107。
- 辻幸夫(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社。

【付記】 本研究は日本学術振興会(JSPS)科研費(若手研究(B)(課題番号:24720191))の助成を受けたものである。

〈論 説〉

現代中国語における量詞“台”について

永 江 貴 子

1. 量詞“台”と“輛”

日本語において車等の車両類を数える時に「台」を用いる。中国語においては自動車・自転車など車（車両）を数える量詞は“輛”を用い，“台”は「芝居や出し物を数える」や「機械を数える」場合に用いられる。《現代汉语词典 第6版》をまとめた以下の表を参照されたい。

表1 《現代汉语词典 第6版》における“台”と“輛”

“台”	a) 用于整场演出的戏剧、歌舞等：一台戏 / 一台晚会 b) 用于机器、仪器等：一台机床 / 三台天文望远镜
“輛”	用于车：一辆汽车 / 一辆三轮儿 / 一辆坦克

これに関し、北京出身の中国語母語話者から車（車両）を数える量詞として最近“台”を用いることもあると指摘された。そこでネット上で用例を調べたところ、(1)のように“台”が用いられている例があった。

(1) 近日，编辑从湖南德顺马自达4S店（新浪微博）了解到，现在到店购买马自达CX-7优惠1.7万元，店内仅限1台现车⁽¹⁾。

また(2)と(3)はいずれも同じページからの用例⁽²⁾であるが，車を数える量詞として(2)の部分では“輛”，(3)の部分では“台”が使

われていた。

(2) “今年我们将生产及销售重型卡车 5000 辆，公司年产值将达到 12.5 亿元。” 陕汽集团董事长长沙环通汽车制造有限公司总经理盛利兴介绍，总投资 10 亿元的陕汽环通二期正在紧张建设当中，建成后可年产汽车 5 万辆，年销售收入 100 多亿元，新增加就业岗位 3000 多个，并带动本地上下游几十个配套产业。

(3) 记者在建设现场看到，陕汽环通二期的总装车间已经封顶，正在进行设备安装。技术人员介绍，车间投产后，8 分钟就可生产一台汽车。

(1)~(3) の用例を鑑みると、現代中国語において車（車両）を数える量詞は“輛”だけではなく“台”も使われるようだ。そこで本稿において車（車両）を数える量詞として“台”の使われ方を“輛”と比較しながら考察することを目的とする。まずは日本語と同じように“台”（臺）を車（車両）の量詞として用いる台湾語の状況を取り上げ、更に最近出版された中国大陆と台湾の中国語を対比した《两岸常用词典》（中国大陆出版）と《两岸常用词典》（台湾出版）を概観する。

2. 台湾における“台”

樋口（2000）によると台湾語における量詞“台”（臺）は、(4)の機械を数える量詞や(5)の車（車両）を数える量詞の2つのタイプが使われる。

(4) *tâi* 臺 機器類
chit tâi la-jí-o•h （一台のラジオ）

(5) *tâi* 臺 車に添える量詞
Hit tâi chhia chin tōa. （その車は大きいですね）

中国大陆と台湾の中国語を対比した《两岸常用词典》（中国大陆出版）

と《兩岸常用詞典》（台湾出版）では以下のように述べられている。

- (6) a) 用于计算戏剧等的演出。[例] 好戏连台 | 一台晚会。
 b) 用于计算机器或电子设备。[例] 两台电视 | 三台电脑。
 (《兩岸常用詞典》“台 / 臺”)
- (7) 1 用於計算戲劇等的演出。㉑好戲連臺 | 一臺野戲。
 2 用於計算機器或電子設備。㉑三臺電腦 | 一兩臺電視。
 (《兩岸常用詞典》“台 / 臺”)
- (8) 用于计算车。[例] 一辆车 | 两辆机车。
 (《兩岸常用詞典》“輛 / 輛”)
- (9) 用於計算車子。㉑一輛車 | 兩輛機車。
 (《兩岸常用詞典》“輛 / 輛”)

辞書の記述では、台湾でも中国大陆と同じように車を数える場合に使われる量詞は“輛 / 輛”で、“台 / 臺”は①芝居等を数える場合②機械や電子機器を数える場合に用いられるとされている。

但し、台湾のネット上では車を数える場合の量詞は(6)のように“台”が用いられ、また先に取り上げた中国大陆の(2)(3)のように“台 / 臺”と“輛 / 輛”が混在する(10)(11)のような例が散見された。

- (10) 一台車開 15 年以上能省多少錢？ 據消費者報告調查發現，一台車若能使用 15 年以上，亦或累積 22.5 萬英里的里程數，車主可以省下 31000 美元，差不多台幣近百萬元。所節省下的費用，是以平均每五年買一台新車的價格下去計算⁽³⁾。
- (11) 國道 1 號南下彰化路段，下午 5 點多發生一起連環車禍！ 1 輛行駛外線車道的轎車，疑超車不慎擦撞小貨車，小貨車失控，再擦撞到內線的另一台轎車，3 台車翻覆撞成一團，造成 3 人輕重傷送醫⁽⁴⁾。

以上より、先行研究では車を数える量詞として“台”の例は指摘されていないが、中国語インフォーマント、またはネット上の文において車両を

数える量詞として“台”が用いられるようだ。

では、車を数える量詞としての“台”は“輛/輛”と比較してどのくらい割合で使われているのだろうか。またこの用法の“台”は何故使用され、こういった特徴があるといえるか⁽⁵⁾。

3. 調査方法

まず車を数える量詞としての“台”と“輛/輛”を調査するため中国の新聞《人民日报》と台湾の新聞《聯合報》の2006年1月1日～2012年12月31日までの“一台車”および“一輛車/一輛車”の用例を抽出してそれぞれの数を対比する。次に中国や台湾のインフォーマントに“一台車/車”の使用可否や、“一輛車/一輛車”と比較した場合の違いを聞く。

4. 調査結果

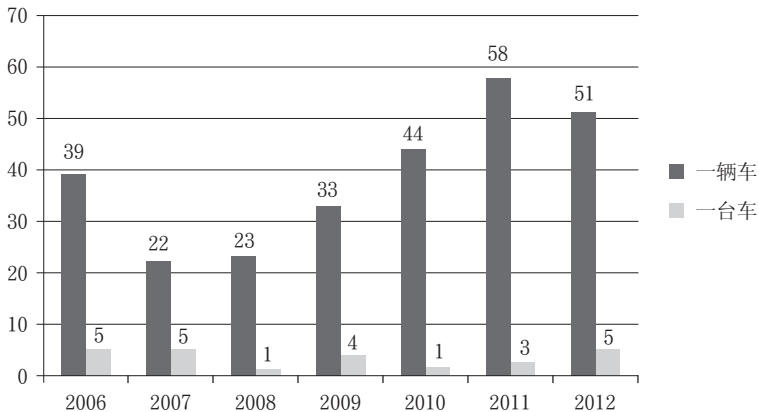
4.1. 新聞データより

- (12) 然后把苜蓿、甜菜渣、胡萝卜、啤酒糟等配方放进饲料搅拌车，一边粉碎，一边搅拌；一边行进，一边就把调好的饲料放在牛圈跟前。就这么一台车，不紧不慢，就能解决整个农场1000多头奶牛的饲料供应。(2006年12月3日)
- (13) 要是换成天然气，只花90元就跑下来了，一天能省50元，一个月能省1500元，一年下来就是18000元，而一台车“油改气”花费才5500元左右。(2006年8月7日)
- (14) 拉运石头经济效益好，每天一台车净收入可达100至150元，家里的日子都越过越宽裕，户户建起了楼房，更可喜的是20多年来所有的女司机没发生过一宗事故。难怪有人说，“葵阳农家女，真是了不起！”(2006年5月14日)

表2 《人民日报》⁽⁶⁾ から“一辆车”と“一台车”

	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
一辆车	39	22	23	33	44	58	51
一台车	5	5	1	4	1	3	5

グラフ1 《人民日报》から“一辆车”と“一台车”



(15) 由于神龙在产品开发和工业化中拥有8%左右的知识产权，届时，标致在海外合资工厂每生产一台车，要向神龙支付25欧元的技术转让费。刚刚发布的东风雪铁龙凯旋也将在南美巴西、阿根廷等国生产。（2006年2月20日）

(16) 分部领导以身作则，处处严格自率，在官兵面前树立清正廉洁的形象。2002年，分部4名常委在南京分到经济适用住房，整个装修过程，他们没用分部一个兵，没动分部一台车，没花分部一分钱。（2006年1月28日）

(17) 他跑图书馆翻阅相关资料，到书店买专业书，自学热处理、机械制图、金属工艺等专业知识，对照书本反复操练，经过几个月苦练，终于修好了一台车。（2007年8月31日）

(18) 每天2600多台车在广场内流动，开展29天来，车辆累计达到

73000 多台次，但“没有一台车磕磕碰碰，没有收到一个观众的投诉”。（2007 年 8 月 14 日）

(19) 广州市交委副主任刘卫指出，与全国其它城市一样，广州当时选择了“双燃料系统”，通过改变原有燃油发动机的燃烧参数，让一台车既能烧油，也能烧气。（2007 年 8 月 6 日）

(20) “每卖出一台车，我们就捐种一棵树。”（2007 年 4 月 20 日）

(21) 独腿的旅伴在西藏，张丽颖还结识了一个让她印象深刻的旅伴。那位来自四川的女孩，因为小时候的一场车祸失去了一条腿，但是她却拄着拐杖独自去过很多地方。两人租了一台车，搭伴从拉萨到了成都。（2007 年 4 月 12 日）

(22) 同时，公车带来惊人浪费。除去司机工资，单车平均费用达到 6 万元，一台车一年费用相当于再买辆经济型车。出租车的使用效率约为公车的 5 倍，而运营成本仅为公车的 15%。（2008 年 11 月 28 日）

(23) 广州市交委副主任刘卫指出，与全国其它城市一样，广州当时选择了“双燃料系统”，通过改变原有燃油发动机的燃烧参数，让一台车既能烧油，也能烧气。（2009 年 11 月 12 日）⁽⁷⁾

(24) 县里每月给每个“中心”划拨办公经费 2000 元，还配备一台车。县委书记范汝雄说：“把钱花在事前疏导、化解矛盾上，比事后平息纠纷，划得来！”（2009 年 11 月 11 日）

(25) 据测算，在不开空调情况下，混合动力公交车百公里油耗约 30 升，比传统柴油车节约 2 升油，一台车每月少说可以节油 70 多升。（2009 年 10 月 1 日）

(26) 一汽佳宝吉林办事处销售经理刘辉告诉记者，按照规定，禁止农机部门组织集体跨市购车，“我们已经通知各经销商，发现违规销售，一台车罚款 1000 元。”（2009 年 3 月 23 日）

(27) 三名指战员负责运泡沫，一桶泡沫 19-25 公斤，一晚上一台车用将近 4 吨泡沫，三个人记不清搬了多少趟，实在搬不动了，就坐在

地上用背顶着桶往前挪；一线官兵的战斗靴里都是滚烫的泡沫和原油，靴子和皮肤粘在一起脱不下来…（2010年7月26日）

(28) “演出一台戏，行走一台车，吃饭一张桌，点燃‘一团火’”。（2011年11月7日）

(29) “我比较了解这个机器，就是给车上装了无人驾驶。比如说这是一台车，它过来的时候取一条直线，设置A点B点后，种子和肥加完了，方向盘一松，自己突突就跑啦，误差不超过2.54厘米。（2011年9月8日）

(30) 没伤一个兵、没亡一个人、没翻一台车，没报废一台机械，真正实现了安全、科学、迅速的抢险目标！（2011年8月6日）

(31) 二是从经济上考虑，开车并不划算，养一台车，汽油费、过路费、保险费等，钱花得真是让人心疼。（2012年9月4日）

(32) “使用车辆定位数据传输业务后，一台车一年投入成本1000多元，但由此带来了燃油节约、减少车辆损耗、提高运力和运输效率，70台车每年产生经济效益上百万，单车效益超过1万元……”（2012年7月2日）

(33) 孙善英有着自己的长远打算，“再就是还想买台消防车，不然就这一台车一次只拉3.8吨的水，浇完了，不管多远都需要回来加水，现场就失去控制了。两台车就能倒得开了。”（2012年5月4日）

(34) 为了保证公务用车，惠东将留用车辆使用范围进行了细分。执法执勤车辆保证平均10人一台车，集中停放、管理。（2012年2月24日）

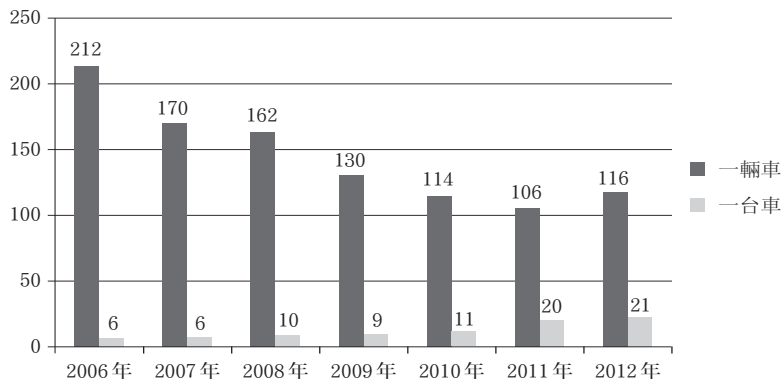
(35) 启动一台车至少要两三分钟，两三台下来，就再也不想往座椅上坐了，衣服贴在身上哇凉哇凉的。”（2012年1月31日）

(36) 不過北市公車業者聞訊，大多興趣缺缺，公車業者指出，改裝一台車需80萬元，他們質疑交通局是否真的有財力推動？（2006-07-07）

表3 《聯合報》⁽⁸⁾ から“一輛車”と“一台車”

	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
一輛車	212	170	162	130	114	106	116
一台車	6	8	10	9	11	20	21

グラフ2 《聯合報》から“一輛車”と“一台車”



- (37) 投入貨運10年的「伊的鍊」貨車公司老闆柯金生直言，過去景氣好時，一輛車一天可接5趟生意，專載電子零件與五金，全省跑透透，不二價客人還求著要，一台車一個月淨賺20萬元，現在漫天殺價還攬不到生意，很多貨車一天接不到一趟。(2006-06-14)
- (38) 台北市做得到嗎？業者肯定地說：「做不到」，一台車成本這麼貴，北市14家公車業者，去年只有4家有盈餘，誰還要花大成本？除非政府補貼買車、降低貨物稅與大車進口車稅，但不管中央或地方，都沒看見改變現狀的蛛絲馬跡。(2006-05-08)
- (39) 地利村民透露，「只要開車通過幾十公尺便橋，短短數秒，離開駐站人員視線，一台車可現賺幾百元，獲利高，距離又短，而且不花自己的油。」(2006-04-28)
- (40) BMX的其中一種玩法「平地花式」(Flatland)，外在條件門檻

較低，無須架設高台或任何設備，只要有一台車、一個平面場地就能玩！（2007-10-28）

- (41) 昨天比賽上，郭品超車速約在 170 公里左右，賽程緊張刺激，他不但為了搶車道，一度與另一台車車身貼在一起，車尾也遭碰撞，但他說，賽車的過程中即使被撞也來不及反應害怕，因為精神太緊繃了，就是一股腦地往前開。（2007-08-13）
- (42) 一位新店地區的房仲業務員舉例，先前遇過一對年輕夫妻，一進店裡就指名要買當地的山邊別墅。夫妻倆各有一台車，平常上、下山的交通不成問題；但幾年後小 Baby 出生，夫妻倆先是為了誰要天天帶小孩去保母家爭執不休，接著小孩上了幼稚園、小學，兩人又為了小孩接送問題吵個沒完。（2007-02-17）
- (43) 同台出席節目錄影的名模陳思璇則爆料，一回她回家發現一樓門口停了一台車，造成住戶出入不便，當下她很想罵人，敲敲車窗，居然發現 NONO 和蔡淑臻在車上，由於她手裡抱著一大箱櫻桃很累，看到兩人居然閒情逸致談情，氣得不知如何是好。（2007-01-21）
- (44) 她騎著新買的單車「MINI」，由於外型真的太迷你，阿嶽也忍不住調侃：「好大的一台車！」他嚴格要求卓文萱連騎一個小時，不准停下來，卓文萱完成挑戰，張震嶽大讚她腿力夠，是厲害的好學生。（2008-12-05）
- (45) 財團法人真佛覺心基金會主辦的「捐一台車，幫助一萬個老人」捐車活動，盼今年能募集到 50 部中古車，在妥善的保養及維修後，將每一部車送到遍佈全台有需求的社福機構中，幫助所有需要幫助的長輩與弱勢團體；捐車專線：22516557。（2008-10-03）
- (46) 相較於計程車業者一直都有政府照顧補貼，貨運業一直是被遺忘的一群，多年來承受的壓力已是冰凍三尺，今年來油價、輪胎的漲幅更是達到所能忍耐的極限；路上跑的每一台車，背後都要支撐一

個家庭，停徵汽燃等稅，是遲來的正義，可讓相關業者暫得苟延殘喘，以免因工作青黃不接時被迫賣掉車子而淪為失業一族。(2008-07-16)

- (47) 「拜託ㄟ，一公升瓦斯氣費用才十四元，汽油要廿八元，用膝蓋想也知道瓦斯車卡俗…」桃園縣合作計程車龜山站站長邱宏森說，日本人早就開瓦斯車了，沒聽過有安全的問題，「五年下來，差不多賺一台車回來」。(2008-05-12)
- (48) 「一台車，方便機動，一人飽、攏總飽。」石松湖以三輪車改裝成行動咖啡車，讓咖啡隨車四處飄香；今年台灣國際咖啡節以古坑鄉綠色隧道為主場地，也讓在當地擺9年攤位的行動咖啡車成了遊客焦點。(2009-11-09)
- (49) 不怕媒體渲染，兩人8月下旬某晚，就以情侶姿態出席藝人朋友的聚會，還黏TT地搭乘同一台車，上月14日中村獅童生日聚會，也以女友的身分介紹出席的黑木梅紗。(2009-10-05)
- (50) 因陸客團多數是老人，園內接駁車生意大好，現有五十餘輛加入營運，每人收費五十到八十元不等，一台車一天可賺五千元。最大問題是無牌營業，加上園內並無人車分道，人車擁擠險象環生。(2009-06-07)
- (51) 市警局交通大隊執法組長唐國強說，今年六月十九日，員警在承德路一段七十一號前執行臨檢勤務時，發現這輛保時捷未懸掛車牌，立即攔停並依法開罰扣車，「沒想到一扣就扣了半年」。這是保管場保管過最貴的一台車，不少員警執行拖吊任務後，還特地到這輛保時捷旁看一下，覺得非常新鮮。(2010-12-07)
- (52) 搭檔沈建宏則以吸血鬼造型現身，將滿18歲的他，先前跟乾爹何潤東開口想要一台車，何潤東卻笑說：「我會送他一台腳踏車，因為送他車，他會載女生兜風，被拍到不好啦。」(2010-10-17)
- (53) 油料平日用在301電聯車共22列車、352顆連軸器上。徐佳青批，

列車故障更換一次輪軸要花 400 至 500 克油，只剩一桶「連一台車都應付不來」。(2010-05-21)

(54) 「相當不便民！」她批評，從讀高中、大學到研究所，甚至現在上班都要搭公車通勤，但建國路段班次那麼少，又只有一台車，「根本沒人敢搭！」(2010-04-12)

(55) 掃墓公車昨天幾乎班班客滿，首都客運共派出掃墓公車 140 輛、2966 個班次，因班次密集，幾乎不到兩分鐘就有一台車；同時派出 320 名工作人員，全日共提供 6 萬 6129 杯咖啡、熱茶，已出借掃墓工具 1737 套，首都客運表示，今天將繼續提供烏龍茶、咖啡或免費借用掃墓工具等服務，民眾可多加利用。掃墓公車資訊可電洽 0800000866。(2010-04-05)

(56) 2012 年他說，雖然很想換一台車，但是一家 3 口平時只靠妻子種菜賺點小錢，家境並不好，而且復康巴士的時間很固定，無法應付突發的狀況，「上次就是因為媽媽的尿管突然掉了，才趕緊載去醫院」，加上經濟無力支付搭乘計程車的費用，16 年來都是靠這樣的方式載送年邁老母。(2011-06-30)

(57) 林姓騎士直呼「好衰」，他說，只是到超商買東西，差點被車撞到，但剛回神，就看到機車被撞壞了。店員則說，當時他正準備結帳，忽然一台車撞進門，撞擊聲響超大，他嚇了一跳，至今仍心有餘悸。(2011-06-28)

(58) 經濟部將從本月十八日實施水量減供百分之五，科技廠商心慌慌，新竹、台中、台南三個科學工業園區都接洽運水，水車業者大發利市。業者透露，一台車一萬元計算，一天四趟，廿台車就可賺進八十萬元。(2011-05-12)

(59) 莫少聰和孫興吸毒案引發中、港、台震撼，兩岸三地媒體自前天守候在北京朝陽區看守所一整天，據騰訊娛樂報導，昨凌晨北京公安上演調虎離山之計，讓媒體搞不清哪一台車載著的是莫少聰或孫

興，但也有報導指兩人是搭同一輛車離開。(2011-05-01)

(60) 宥勝透露在澳洲時打了 10 幾種工，包括在飯店打掃、遊樂園工作、撿樹枝、到農場摘水果等，他也在當地買了一台車，工作之餘在當地開車到處晃。他說在當地生活讓他可以放很開，「在台灣時會有很多規矩、被侷限，在當地我對人生改觀，很多不一樣的想法。」(2012-09-19)

(61) 美利達總經理特助鄭國華表示，已流行 3 年的公路車市場趨近飽和，今年開始自行車流行分眾化明顯，原有玩家再晉級，需要性能更強的車款，今年公路車與越野車都有性能大幅躍進的新世代車款。一台車雙功能的跨界車興起也是今年新趨勢。(2012-08-29)

(62) 舉例來說，若一台車加滿汽油要 50 公升，若是刷卡加油，每公升享有降價 1.5 元優惠，卡友一次就可省下 75 元 ($1.5 \times 50 = 75$)；若一個月要加 4 次油，卡友總共可省下 300 元。(2012-07-01)

以上，車を数える量詞としての“台”と“輛/輛”を調査するため中国の新聞《人民日報》と台湾の新聞《聯合報》の 2006 年 1 月 1 日～2012 年 12 月 31 日までの“一台车/車”および“一辆车/一輛車”の用例を抽出してそれぞれの数を対比した。これらのコーパスからの例を観察すると，“台”を使用している“车”に「機械や設備」と解釈できる「マシン」と見なせる特徴がある。例えば《人民日報》のデータでは「生産手段としての機械“车”（例 (12) (13) (14) (19) (23) (25) (27) (29) (33)）」、「消耗設備の“车”（例 (16) (18) (30) (31) (32)）」、「製品・商品機械の“车”（例 (15) (17) (20) (22) (24) (34) (35)）」といずれも機械（マシン）“车”の下位分類とできそうである。また《聯合報》を見ると，話題が「生産手段としての機械“車”（例 (37) (39) (46) (48) (50) (58)）」、「消耗設備の“車”（例 (36) (38) (53) (62)）」、「製品・商品機械の“車”（40) (42) (44) (45) (47) (51) (52) (55) (56) (60)）」のように“車”が機械（マ

シン）として捉えられる。

4.2. アンケート、インタビュー結果

中国大陸、台湾の人に以下のような質問をした。

- ① “一台车（車）”も使用するか
② “一辆（輛）车（車）”との違いは何か

ほぼ全員が①は使用すると、②に関しては同じように使うと答えた。②に関して更に詳しく聞いたところ以下のような回答が得られた。

中国大陸

- ・“一辆车”は車なら何でも使用するが、“一台车”は車でも特別な感じ。
 - ・“一台车”は台湾の感じがする。
 - ・可以说“一台车”，主要是从发动机的角度讲的，偏重于汽车是机器。例如清查学校国有资产时常填一台车。一辆车大概是更通常的用法，可能是从外观、总体上讲的。
- （“一台车”といえるが、エンジンの角度から述べたものである。車が機械だということに偏っている。例えば学校の国有資産を精査する場合“一台车”と常に書き込む。“一辆车”は普通の言い方で、外観からも全体的にも言うことができる。）

台湾

- ・小説や正式な文章の場合は“一辆車”を用いる。
- ・裁判などの場合は“一辆車”を使う。
- ・“一台車”は台湾語の影響での使用で、やはり“一辆車”の方がいい。

5. まとめと考察

新聞データによると、書面語においては車の量詞は中国大陸、台湾ともに“輛”/“輛”であるが、少数ながら“台”の例も散見されている。台湾の新聞データでは、車の量詞としての“台”が年々増加している傾向が見られるが、中国の新聞データにおいて車の量詞としての“台”はほぼ同じ

数を推移している。

この結果に関して、車の量詞として“輛”/“輛”があるから車の量詞としての“台”をブロッキング⁽⁹⁾しているが、体系のあきまとして台湾語では車の量詞として“台”を用いるからその影響で台湾では“台”を用い、更にそれが中国に入った⁽¹⁰⁾のではないだろうかと考えられる。しかしながら、台湾において車の量詞としての“台”がここ2年で増加傾向にある点で異なった要因があるようだ。

“台”は《現代汉语词典》より機械や電子機器を数える量詞である。また調査結果の中に「エンジンの角度から見ると車は機械」という記述がある。即ち、車を数える量詞として用いられるが元の機械を数える量詞としての形式は保持していると考えられる。罗文筠(2012)によると現在、外来語が中国語の中に大量に入ってきているが、それを適切に処理して“約定俗成”しているという。外来語という点からみると、machine⁽¹¹⁾という語は《英汉大词典》によると中国語では“机器、机床、机械(装置)”や“机动车、汽车、摩托车”と訳される語であり、その点でも車は機械に偏る量詞“台”が使われるようになったと言えるのではないか。即ち、車は機械の下位範疇ともいえるため、機械を数える量詞としての“台”が車を数える量詞としても使用されていると結論付けられる。

《注》

- (1) <http://auto.sina.com.cn/car/2013-07-05/07351183297.shtml>
- (2) <http://news.sina.com.cn/o/2011-08-16/090822998165.shtml>
- (3) http://hyundai.autonet.com.tw/cgi-bin/file_view.cgi?a709001340001
- (4) <http://tw.news.yahoo.com/%E5%9C%8B%E9%81%9333%E8%BB%8A%E9%80%A3%E7%92%B0%E6%92%9E-%E8%BB%8A%E7%88%9B%E7%BF%BB%E8%A6%863%E4%BA%BA%E5%82%B7-162737809.html>
- (5) なお車の量詞として“部”もあるが、今回は考察対象から外す。
- (6) “人民网”<http://www.people.com.cn/>
- (7) 例(19)と例(23)は同じ例文であるが、日付が異なる日で同じ文が用い

られたため、2つの例文として扱うこととする。

- (8) “聯合知識庫” <http://udndata.com/>
- (9) 宮川 1989: 210 によると、ブロッキングは Aronoff 1976 以前から論じられている概念で、単語だけではなくフレーズや文全体に対しても働くことが指摘されている。例えば pale green や pale blue が可能であるのに *pale red が不可能であるのは、pink という意味的に *pale red に相当する単語が既に存在するからだという。
- (10) “有去吗?” のような“有+VP”構造の台湾から中国への影響が張 2009, 陳 2012 で分析されている。
- (11) 日本語でも車はマシンと呼ばれ、その場合『大辞泉』によると「自動車。オートバイ。特にレース用のものという」という。

参考文献

- Aronoff, M. 1976 *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press
- 陳麗君 2012 〈台、華語語言接觸下的「有」字句〉《台灣學誌》第五期
- 樋口靖 2000 『台湾語會話 [第二版]』東方書店
- 羅文筠 2012 〈新形式外来語詞的吸收与规范化〉《中华文化论坛》06 期
- 宮川繁 1989 「使役形と語彙部門」『日本語学の新展開』
- 張仲霏 2009 「現代中国語における“有+VP 構造について」『神奈川大学人文学会誌』169 期

辞書

『大辞泉』小学館

李行建主編 2012 《兩岸常用詞典》高等教育出版社

陸谷孫 2007 《英漢大詞典》上海譯文出版社

中華文化總會 2012 《兩岸常用詞典》中華文化總會

中国社会科学院语言研究辞典编辑室編 《現代漢語辭典第 6 版》商務印書館

(付記)

本稿は拓殖大学言語文化研究所の 2013 年度個人研究助成に基づく研究成果をまとめ、日本中国語学会関東支部例会第 3 回（2013 年、於：拓殖大学）で発表し、更に加筆・修正したものである。有益なご助言を下された査読員の先生に心より感謝を申し上げます。

(原稿受付 2013 年 9 月 30 日)

〈研究ノート〉

国友次郎と種子島敬輔の英語論文

— モンソン・アカデミーの卒業式で

朗読された英文の紹介と考察 —

塩 崎 智

はじめに

米国各地の新聞記事を過去に遡って検索できるデータベース、*America's Historical Newspapers* を使用し調査したところ、モンソン・アカデミー (Monson Academy, 米国マサチューセッツ州の私立学校) の卒業式で日本人留学生が朗読した英語論文が、新たに2本発見された⁽¹⁾。

1本は1872年7月4日の *Hartford Daily Courant* (コネチカット州都の地元紙) に掲載された “The Fall of the Feudal System in Japan” である。朗読者は熊本藩留学生の国友次郎 (1849-1904) で、同年7月3日の卒業式で読みあげられた⁽²⁾。

もう1本は掲載時期が前後するが、1870年8月17日の *Providence Evening Press* (ロードアイランド州都の地元紙) に取り上げられた “Oriental Civilization” である。朗読者は薩摩藩留学生の種子島敬輔 (1844-不明) で、同年6月28日の卒業式で朗読された⁽³⁾。

本稿ではこの2本の英語論文の原文を紹介し、その内容に関していくらかの説明と考察を加えたい。

筆者は歴史資料としての米国新聞記事活用を試みている。日本人留学生関連記事、あるいは、その背景資料的記事を積極的に収集し、現地における日本人留学生の言動を、その時代の地理、社会的背景から理解、考察することが目的である。また、幕末維新期の日本人留学生の場合、大学よりも私立アカデミー（中等教育）で学んだ例が多く、彼等がそこで受けた教育の内容、彼等の将来に与えた影響といった点も研究対象として考えている。本稿はこの2点を意識して個別事例をまとめたものである。

なお、今回扱う2本の英語論文であるが、種子島の論文の方が発表が早いものの、新聞の記事が転載であるので、直接地元紙に掲載された国友の論文を先に取り上げることとする。両方とも、【資料】として記事の原文と論文の拙訳を付した。【資料】には、2013年夏の現地調査で新たに発見したモンソン・アカデミーと日本人留学生に関する記事の原文と拙訳を入れておいた。

国友論文と新聞記事

国友の論文を採り上げた記事の見出しは、MONSON ACADEMY. A Japanese Essay. となっている。

記事によると、この年の同校卒業生は7人。半世紀前の1822年卒業クラスの3人が列席し、式はいつものように華やかに行われた。しかし、この年の卒業式の最大の呼び物は、2人の日本人留学生の出席と英語論文の朗読だったと書かれている。この2人は熊本藩留学生の国友次郎と津田静一（1852-1909）である。実は2人とも前年の1871年の卒業生であり、国友は卒業後アナポリスの海軍兵学校（United States Naval Academy）の正規の学生として、津田はイエール大学シェフィールド科学学校（Sheffield Scientific School）で聴講生のような資格で学んでいる⁽⁴⁾。

つまりOBが母校の卒業式に出席し、卒業生と共に壇上で英文を朗読し

たことになる。これが異例かどうかは不明だが、留学生という理由での特別扱いと考えるのが自然であろう。母校としては、ここで英語を鍛え名門大学で学んでいる2人の留学生をアピールすることは、同校の教育レベルの高さを示すことにもなる。

津田の論題は“The Opium War of China”（「中国におけるアヘン戦争」）である。戦争当時中国にいたある出席者は、津田の論文に「正確で雰囲気をよく伝えている」とコメントしている。この論文は記事には掲載されていない⁽⁵⁾。モンソン・アカデミーの卒業式で複数の日本人留学生が発表した論文が、ほぼ全文地元紙に掲載された例は他にもあるが、記事が長過ぎてしまうせいか、2本以上の論文が一つの記事で全文掲載されたことは無い⁽⁶⁾。

国友の論題である“The Fall of the Feudal System in Japan”（「日本の封建制度の崩壊」）は、イエール大学のウールジー学長（Theodore Dwight Woolsey）に言わせれば「世紀の大事件」である、と記事に書かれている⁽⁷⁾。読者の関心を大いに引くと思われたのだろう、論文全文が引用掲載されている。

国友論文は、8段落で構成されている。

江戸時代、日本の富の大半を握っていた封建領主である大名たちが、自主的に天皇に領地を返上し、無血の封建制崩壊という世界史上例のない快挙が実現したという内容である。全文と拙訳、簡単な解説を【資料1】として付した。

この論文の特徴は、将軍と天皇という政権交代の主人公ではなく、封建領主である大名の動向に焦点を当てた点にある。国友は聴衆が理解しやすいように、大名を西洋の貴族階級になぞらえている。西洋の革命と異なり、封建領主の側からの自発的行為により平和裏に維新が実現した点を強調している。そして、この大名自身、あるいはその子弟が、米国に西洋文明摂取のために留学に来ていることで、演説に現実感を持たせている。

最後は、当時米国を訪問中の岩倉使節団に言及し、不平等条約改正の後方支援をして論文を結んでいる。この点を国友は最も強調したかったのかもしれない。

国友は、なぜメリーランド州からスピーチをしに、はるばるマサチューセッツ州の片田舎の母校に来たのか。やはりタイミングを考えると、この岩倉使節団の条約改正の支援が目的だった可能性が高い。日本は封建制度を極めて平和裏に脱却し完全に西洋風の近代国家になったので、欧米と対等な条約を結ぶのに相応しい、と主張したいのだろう。

日本人留学生が公の場で、英語でそれなりに高度な内容を語るには、原稿を読み上げるとしても、その準備などで相当の英語力を要する。国友は留学前から慶應義塾と長崎で英語を鍛えてきた。加えてモンソンでの2年間でアナポリスでの1年間を経ているので、英語にはかなり自信を持っているはずだ。卒業式での英文演説はすでに1度経験済みである。

多くの聴衆の前で語る機会を見つけるのも難しい。日本人留学生がスピーチをするというだけでは聴衆は集まらない。その意味で、地方の名門校の卒業式は、多くの市民が集う格好な発信の場である。しかも地元新聞が記事で取り上げてくれれば、文字媒体でも広がり、さら他地域の新聞に掲載される可能性もある。国友は自分の卒業スピーチ全文が地元新聞に掲載された経験があったので、今回もその広報効果を狙い、わざわざ母校を訪れたのではないだろうか。

約8か月前の1871年11月29日の*New York Tribune*（ニューヨーク発行の主要紙）に、POLITICAL CONDITIONS OF JAPAN という見出しの下で、特派員記者が廃藩置県の様子を詳細に報道した長文記事が掲載されている。半年強の時差はあるが、明治維新における廃藩置県の重要性は、既にニューヨークの主要紙で伝えられていた。男子は大学進学、女子は良妻賢母の育成を目指した私立校の卒業式に集うような人々にとっては、既知ではあるが、もっと深く知りたいと思われるテーマだったかもしれない。

種子島論文と新聞記事

種子島論文が掲載されたのは、ロードアイランド州都プロヴィデンスの地元紙、*Providence Evening Press* である。1870年8月17日の掲載と、卒業式関連の記事にしては随分と遅い。この記事が *Springfield Republican* の記事の転載だからである。記事の記述から卒業式が行われたのが6月28日と分かるので、1か月半後の転載ということになる。

見出しと冒頭の短い解説部分には次のように書かれている。

東洋文明に関する日本人の論文

Springfield Republican によると、1870年6月28日に行われたモンソン・アカデミーの年次の発表会で、日本の長崎出身の吉田彦磨が次の論文を朗読した。

この後、すぐに論文の引用が始まるので、記者によるコメント、感想などは一切書かれていない。今後、転載元の *Springfield Republican* の記事の内容を確認する必要がある。残念ながら *America's Historical Newspapers* では、6月29日及びその数日後の紙面が収録されていない。

なお、これと同じ論文が、1872年にニューヨークで出版された *The Japanese in America* の Part II の The Japanese Students という章に収められている⁽⁸⁾。

国友論文と比べると、短い段落（全14）がテンポよくつなげられた論文という印象を受ける。まず、東洋と西洋の定義の矛盾から入る。どこを基準に西・東と分けるのか。人類は洋の東西に関わらず、多くの共通点を有している。どこに住んでいても所詮は同じ人間なのだと述べる。

しかし、そうは言っても身内びいきは人間の性である。種子島は、ここ

で自らの出身である古の東洋の多様な精神的豊かさを強調する。東洋は古代ギリシャ、ローマの遙か以前から宗教、哲学などの精神分野を極めていた。そしてその宗派が相互に対立し、征服、被征服を繰り返してきた。実はこの対立という課程が重要なのである。対立無しにより高い次元での統一はない。人類はこうして進歩してきた。

ところが、今やアジアの停滞は目を覆わんばかりである。原因はいろいろあるが、精神の自由が保障されていない点が最も大きい。実はこの点で優れていたのは西洋だった。古代ギリシャはその最良の例である。

今、東洋を停滞から救うのはこの西洋による精神の解放である。西洋文明は、東洋に物質、精神の両面で浸透しつつある。これがうまく行けば、東洋は西洋による帝国支配に対する怨恨も忘れ、西洋への恩義が増していく。こうして、東洋と西洋の対立が解消され、人類は将来的に豊かな統一へと向かって行くのである。日本にとっては、この西洋の代表がまさに米国なのだと論を結んでいる。

時間的、地理的に大変壮大な規模の論旨の展開が印象的である。種子島がモンソン・アカデミーの古典コースでどのような教育を受けたのかは定かではないが、この論文には、その豊かな実りが感じられる。

1870年7月1日の *Springfield Weekly Republican* には、MONSON ACADEMY という見出しのもとに、次のような好意的なコメントが寄せられている。

One of the Japan student, Yoshida Hecomaro, who has been an inmate of the academy for four years, read a dissertation on Oriental Civilization, which displayed deep thought and an almost wonderful originality.

(4年間モンソン・アカデミーで学んだ吉田が朗読した論文は、深い思索と大変素晴らしい独自性を示していた。)

前年に朗読された論文もそうだったが、ここでも種子島のキリスト教信仰がうかがわれる⁹⁾。最後の段落でそれが明らかに示されている。ただ、キリスト教の日本への導入に関して、具体的に進言するわけではなく、前作よりはトーンが低くなっている。

種子島の論文は、決して抽象的な議論に終始せず、1870年1月26日の東京・横浜間の電信開設や、4月25日の東京・横浜間の鉄道測量開始などの現実の最新の情報も盛り込んでいる。

今回と前回の論文で、種子島の論文は、*deep thought, very thoughtful production, an almost originality, liberal* といった高い評価を受けた。その深い精神性と自由で独自の発想が聴き手に感銘を与えたのだろう。種子島のモンソン・アカデミー卒業後の動向は定かではない。当時、米国で学んでいた日本人の中で類稀な精神性を発揮した種子島の知性が、日本への帰国後大学などの高等教育の場で活かされることが無かったのは惜しまれる。

終わりに

今回の発見で、モンソン・アカデミーの卒業式で英文スピーチを朗読した日本人名と論題をまとめると次のようになる。

- | | | |
|---------|-------|--|
| 1869年6月 | 吉原 重俊 | “Japan as it was and is” |
| | 種子島敬輔 | “Introduction of Christianity in Japan” |
| 1870年6月 | 種子島敬輔 | “Oriental Civilization” |
| 1871年6月 | 津田 静一 | “The Government of Japan” |
| | 国友 次郎 | “Changes in Japan since 1868” |
| 1872年6月 | 津田 静一 | “The Opium War of China” |
| | 国友 次郎 | “The Fall of the Feudal System in Japan” |

この中で地元紙に2本とも論文が掲載されたのが種子島と国友である。当時の新聞の編集者は、これらの論文のどこに魅力を感じて掲載したのだろうか。

国友の論文は、明治維新という大変革の実態を、実際に現地で体験した日本人が、適度に詳細に語ってくれている点がポイントだろう。当時の米国紙に掲載された日本関連記事は、米国人記者が現地から送ってくるレポート、現地から船便で送られてくる英字新聞からの情報、訪米中日本人へのインタビューなどを伝えるものが多かった。*New York Times* を例に取ると、1870年から72年にかけて、毎年25本ほどの日本関連記事が掲載されていた⁽¹⁰⁾。この中で、在米日本人のインタビューを元にして構成された記事はごく少数である。

その場合問題となったのが、日米双方の側の言語能力である。米国人記者は日本語能力が皆無であり、当時の訪米日本人の英語力もネイティブ並という例はほとんどなかっただろう⁽¹¹⁾。両国の政治制度や、文化、社会が異なるため、日本の維新前後の状況を外国人に正確に理解させることはなかなか難しい。将軍、天皇、大名、大政奉還、版籍奉還といった政治用語は、英語一語で対応させるのは不可能である。その結果記者が質問できる、或いは日本人が答えられる内容に限界が生じ、インタビューが浅薄な内容に終始してしまう。

明治維新という政治的大変化の実態を、大変大雑把ではあるが、具体的に外国人にわかりやすく説明しようとした国友の姿勢とその努力の結果が評価されたのではないだろうか。国友は日ごろの経験から、維新について米国人が知りたがっている、あるいは誤解しがちな点を把握していたのだろう。

種子島の論文は、基本的にはやはり維新という歴史的事件を扱いながらも、キリスト教や思想といった精神文化に焦点を当てている。この点が他の留学生の論文と決定的に異なる。モンソン・アカデミーがあるニューイ

ングランドは熱心なクリスチャンが多い。種子島が選んだテーマは当然、住民の関心を引くと思われただろう。新聞のコメントから判断する限りでは、彼独自の発想、思考も興味を持たれたようだ。

今後の研究方針としては次の点を考えている。おそらくモンソン・アカデミーの卒業式で日本人が論文を発表した例はもう出てこないだろうが、念のために各年の6月終わりから7月初めにかけての地元紙の記事を調査する必要がある。さらに、データベースなどを駆使して、これらの記事の他紙への転載例を発見し、日本人留学生在が発信した情報の広がり具合を確認したい。今回も、種子島の例から、同じニューイングランドのロードアイランド州プロヴィデンスの新聞でも論文全体が掲載されていたことが分かった⁽¹²⁾。

また、モンソン・アカデミー以外の中等教育を行う学校、あるいは大学、大学院の卒業式で日本人が行った英文スピーチの例も継続して調査しなければならない⁽¹³⁾。同時に、米国メディアが当時報道していた日本関連情報も、重要な背景知識としてその内容を把握しておく必要があるだろう。

《注》

- (1) モンソン・アカデミーの卒業式で日本人留学生在が英文を朗読した例としては、次の4件が地元新聞記事から既に判明している。1869年の種子島敬輔（薩摩藩）の“Introduction of Christianity in Japan”と、吉原重俊（薩摩藩）の“Japan as it was and is”, 1871年の国友次郎（熊本藩）の“Changes in Japan since 1868”と津田静一（熊本藩）の“The Government of Japan”である。今回の発見で1870年と1872年の例が付加された。これでモンソン・アカデミーでは、1869年から72年まで4年連続で日本人留学生在が卒業式で英語論文を発表したことになる。

同校に日本人留学生在が最初に入校したのは、1866年12月のことである。薩摩藩米国留學生一行で種子島敬輔はその一人だった。一行は密航留学であったため、米国では全員変名を使用していた。記事で使われている吉田彦磨は種子島の変名である。

幕末維新期に同校で学んだ日本人留学生は1873年までで13人を数える。1873年の卒業式関連の記事は現在調査中である。

1869年と1871年の英文に関しては、拙稿、「幕末維新期、米国日本人留学生による英文発信例の考察——中等学校（モンソン・アカデミー）卒業式で朗読された英文スピーチを資料として——」『拓殖大学 語学研究』（127号，2012年，pp.1-43）参照。

- (2) 国友に関しては拙稿、前掲 p.19 と注(8)を参照。なお国友は留学前に慶應義塾で学んでいた。同塾の入学者記録である入社帳には1864年春に慶應義塾入社と記されている。同時に熊本藩から計8人が入塾している。国友の在学期間は明らかでないが、1867年の時点で長崎で英語を学んでいたの、慶應の在学期間は長くて2年間ではないだろうか。渡米するまで長崎で英語を学んでいたとすると計5年以上の英語学習歴があったことになる。国友の長崎時代に関しては、拙稿、前掲の注(8)を参照。国友の名字はNadaと書かれているが、これが「のだ」なのか「なだ」なのかは不明である。国友のモンソン・アカデミーの在籍年は、1871年、1872年、1874年となっているが、新聞記事によると1871年6月卒業となっている。
- (3) 種子島については、拙稿、前掲、注(11)を参照。なお、最近の調査で種子島関連の記事を発見した。1870年10月30日の*New York Sun*の記事によると、種子島は当時ニューヨーク市内のセント・ニコラス・ホテルに宿泊していた普仏戦争視察団一行を訪問した。一行のメンバーは、品川弥次郎、桂太郎、大山巖、中浜万次郎等である。同じ薩摩藩出身の大山に会うためだろうか。記事によると、種子島はハーバード大学入学の準備中ということである。記事の種子島に関する記述の部分のみ引用する。

They were called upon by YOSHIDA H. HICOMARO, one of their countrymen, himself of high rank, who has been in this country nearly four years and who speaks English fluently. He has graduated at Monson Academy and is preparing to enter Harvard College.

(視察団一行は吉田彦麿の訪問を受けた。吉田自身、高位の身であり米国滞在は4年にもなる。英語は流暢だ。モンソン・アカデミーを卒業し現在はハーバード大学入学を目指して勉強中である。)

また、この4日前の9月26日の*New York Tribune*の記事から、種子島がアナポリス海軍兵学校生の横井左平太(1845-75)とともに9月25日頃にニューヨークのホテルに滞在していたことが分かる。

HOME NEWS

PROMINENT ARRIVALS

Brevoort House Yoshida Hicomaro and Sataro Ise of Japan.

伊勢佐太郎は熊本藩留学生横井左平太の変名である。横井は1845年生まれで種子島とほぼ同じ年齢だった。両人の交流については不明である。

- (4) 津田と津田の英語論文に関しては、拙稿、前掲、注(15)と(20)を参照。
- (5) この論文は、津田静一『榎溪津田先生伝纂』（津田静一先生二十五回忌追悼会、1934年）の pp. 31-35 に掲載されている。

この英文スピーチの原稿をタイプ打ちしたものが、滞米中演説草稿摘録と題して掲載されている。そこに、次のような説明が付してある。

（筆者云。滞米中自筆の英文にて「愛国者」「日本政府」「鴉片戦争」の三文あり特に鴉片戦争の一文を摘録せるが発音に関し細かに符号を附しあるより推察して学区又は学会の如き席上にて演説せるものかと思わる。）

このうち、「日本政府」は1871年の卒業式で朗読されたことが新聞記事の掲載により判明している。津田のモンソン・アカデミー入学は1871年なので、1870年6月の卒業式朗読はあり得ないので、「愛国者」が、いつ、どこで朗読されたかは不明。「鴉片戦争」の自筆原稿の書き込みは、実際の演説に際しての書き込みという点で大変興味深い。

- (6) モンソン・アカデミーに関する記事をよく掲載したのは、最寄りのコネチカット州都ハートフォードの *Hartford Daily Courant* と、それと並ぶこの地域の中心都市マサチューセッツ州スプリングフィールドの地元紙 *Springfield Republican* である。同州都ボストンの新聞にも掲載されることがある。両紙とも、*America's Historical Newspapers* で記事検索が可能だが、大変限られた日付の新聞記事しか検索できないのでリサーチに限界がある。
- (7) Theodore Dwight Woolsey (1801-1889)。イエール大学の法学者で、1846年から71年まで Yale College の学長を務めた。
- (8) 拙稿、前掲注(23)を参照。14本の英語論文が取り上げられている。種子島だけが、目次で名字ではなく Hicomaro と名前前で記されている。本文でも変名の吉田が Yashida と綴られている。当時の日本人名の表記方法はまだ確定されておらず、データベースでの氏名検索の際注意を要する。
- (9) 種子島の1869年6月の卒業式スピーチの題は、“Introduction of Christianity in Japan” である。一読すれば、筆者が信仰深いクリスチャンであることが分かる。
- (10) データベース ProQuest で検索した結果である。1872年の場合は、当時米国諸都市を歴訪していた岩倉使節団関連の大量の記事がこれに加わる。
- (11) 米国新聞の日本人インタビューで、英語が堪能だと書かれている例もある

が、これも何を基準にしているか不明であり、多分に社交辞令も含まれているだろう。

- (12) 地元の *Hartford Daily Courant* と *Springfield Republican* 以外では、モンソン・アカデミーで学ぶ日本人留学生の記事は、ボストンの主要紙 *Boston Transcript* に転載されていたことがあった。
- (13) 論文の内容は不明だが、伝記資料などから判明している例としては次のものがある。

金子堅太郎 Rice Grammar School (Boston, マサチューセッツ州)

“Rising Sun”

執行 弘道 Central School (Middle town, コネチカット州) “Rising Sun”

また、次の記事によると、卒業式で日本人留学生が日本語で論文を朗読した例もある。これは1872年7月に行われたマサチューセッツ農科大学の卒業式でのことである。テーマと内容は不明である。

Connecticut Courant, 1872年7月27日

MASSACHUSETTS AGRICULTURAL COLLEGE

Second Graduating Anniversary, Amherst, Mass., July 17, 1872

The anniversary exercises of the Agricultural College occurred on Monday, Tuesday and Wednesday of this week. Being a state institution, the religious instructions of the college are of the most general character, and, unlike other colleges, it indulges in no Baccalaureate. The alumni are not as yet so numerous that they need a day set apart for them, so the exercises are comparatively short. The only exercise on Monday was prize speaking in Amherst College Hall at eight in the evening. The declamations were, for the most part, very good. **A Japanese member of the college delivered an original essay in his native tongue. His fierce gesticulations and the peculiar intonations and flow of his language afforded a deal of merriment to the audience.**

(太字部分のみ拙訳：日本人学生が母国語で論文を朗読した。彼の熱のこもった派手な身振りと独特な日本語の抑揚とその音の流れは、聴衆を大いに楽しませた。)

1870年7月20日の *New York Tribune* の記事では、新島襄がアマースト・カレッジの卒業式で行った日本語の演説が話題になっている。そのためあっ

てか、残念なこと内容が残っていない。

New York Tribune, 1870年7月20日

GENERAL NOTES

A curious instance of the cosmopolitan character of the age was afforded at the Amherst Commencement last week, at which Mr. Joseph Nee Shima, upon taking the degree of B.A., recited an oration in the Japanese, which is his native tongue. (以下省略)

(先週アマースト・カレッジの卒業式で、国際的な時勢を反映した興味深い例が示された。新島襄が学士号を受け取る際に母国語の日本語で演説を行ったのである。)

【資料 1】 国友次郎の論文を掲載した新聞記事

Hartford Daily Courant 1872年7月4日

MONSON ACADEMY.

A Japanese Essay.

Correspondence of THE COURANT

This excellent school held its anniversary exhibition Tuesday. The old Congregational church has been moved to give place to a new one. The old building has taken a lower place on Main street, and been fitted up as a public hall. In this the exercises came off. I was not present at the examinations, but those whose judgment is reliable say they were superior this year. It is always pleasant to record improvement. The boys and girls of Tolland county have very generally resorted here for the education which the district schools of the county could not give.

At the exhibition yesterday there was an abundance of flowers, music by a brass band, a goodly number of spectators notwithstanding the sweltering heat. The graduating class numbers seven. J. S. McCarthy, of South Wilbraham, took the first prize for a declamation entitled "The Moor's Revenge." from a Polish author. The second was carried off by W. W. Leete, of Thorndike; his declamation was Edward Everett's comparison of Napoleon and Washington. That the declamations were above the average seemed to be the general opinion.

Among the visitors were three members of the class of 1822. After fifty years they returned to the school where they fitted for

college and where they placed the first foundation stones of their education.

But the most interesting feature of the whole exhibition was the presence of the Japanese youth and the reading of their pieces. The readers of THE COURANT will remember that an essay read by one of these youth was printed last year. Since then, the author has entered the Annapolis Naval Academy by the favor of our government. The other is at Yale College. They came back to Monson where they spent part of the current year, to show how much they had advanced in the very short time they had been in this country.

Saneach Tsuda is now in Yale College; his essay was on “The Opium War of China.” A gentleman present who was in the east at that time, says that it was a correct and vivid account of the war.

Giro Nada whose essay was published last year, is the naval cadet. His paper this year, was on “The Fall of Feudalism in Japan.” President Woolsey of Yale says this event is one of the wonders of the age. The essay which is given below is of special interest as coming from a native. After the public exercises the teachers, trustees and invited guests sat down to a bountiful dinner. (太字は筆者による。国友と津田に言及している部分。)

GIRO NADA'S ESSAY,

The Fall of the Feudal System in Japan.

- ① The feudal system of Japan was established about nine hundred years ago. Its nature was nearly the same as that which formerly extended over many countries of Europe and it had its origin in nearly the same causes. But its recent fall in Japan was totally

unlike anything which has ever happened in Europe. Indeed it was an event unparalleled in the history of any nation on the globe. Whilst Japan was in a less civilized state than it is to-day, and so long as the policy of excluding intercourse with foreign nations continued, the feudal system did very well. When this policy of excluding ceased, it was necessary that feudalism should fall. Why was this, and how did it take place? What was its effect?

- ② In feudalism the nobles — that is, dukes, earls and barons — each had a territory or a piece of land as their own, and also their own retainers or subjects, and in the aggregate the general government had a less number of subjects than the nobility. Hence the nobles, even under the slightest provocation, were often in conflict with each other, and sometimes fought against the general government. There were about six or seven hundred of these nobles in Japan, some of whom had an army and a navy of their own, with some hundred thousands of their own retainers, while others had less.

日本における封建制度の崩壊

(日本の封建制度が確立されたのは約 900 年前のことである。本質的には欧州諸国に広がっていた封建制度とほぼ同じであり、制度の発生の経緯も概ね同じである。しかし、最近起こった日本の封建制度の崩壊は、欧州での崩壊とは似ても似つかぬものだった。古今東西、地球上のどこにもその類例は見当たらない。封建時代の日本は、文明度という点では現在に劣っていたが、鎖国が行われていた間は、封建制度はうまく機能していた。しかし、開国した後は、封建制度は崩れざる

をえなかった。これは、なぜか。どのようにそれは起こったのか。その結果はどうなったのか。封建制度下では、貴族（以後、大名）は、それぞれ自分の領土を所有していた。また、家臣や家来も従えていた。総計すればその数は、政府（以後、幕府）の家臣、部下の数を上回っていた。ほんの些細な事が原因で起こった大名間のいざごは絶えず、幕府に盾つく者もいた。大名は、600~700 ほどおり、中には自前の陸軍と海軍を保有していた者もいた。家臣の数は様々だが数十万を下らない者もいた。）

ここで西洋風に noble と表現されているのは、江戸時代の大名を指していると考えていいだろう。後半で述べられている大名間のいざごとは、幕末における薩摩藩と長州藩の対立をその例と考えることができる。陸軍、海軍の件も両藩が顕著な実例として当てはまるだろう。総じてここで国友が行っている封建制度の説明は、幕末にあてはめれば理解できるものである。

- ③ After the visit of Commodore Perry to Japan in 1854, many nobles began to have a new idea as to the kind of government needed in the changed circumstances of the country. They saw that in consequence of the great number of small powers, that civil wars would be frequent and the empire be in a state of anarchy, and consequently easily fall a prey to foreign powers. In order to remove the fear of such an event, and to establish a firm and strong government for the whole people the nobles agreed to unite together and to surrender their combined powers to the emperor requesting him to be the ruler of the entire country. This surrender of their powers to the emperor by the nobles was

entirely voluntary on the part of the nobility. The plan was formed by themselves, as the result of their own opinions, for the sake of the good of our country. The emperor did not propose the measures, nor did he in any way use the forces to abolish the feudal system and the privileges of the nobility. I am proud to say this, for in no other country could such a great change have taken place without a civil war. But we had no civil war: not a drop of blood was shed. It was a great revolution entirely brought about by a change in the minds of the higher classes. The emperor knew nothing of this revolution till the nobles sent their rolled petition to him, in which they said that things had changed since feudalism was established; that improvement should be made as civilization advances: and that as other old customs had been given up, so it was time to change the system of government. The emperor was of course glad to hear the proposal for such a change, which could thus benefit nearly forty millions of people. He therefore accepted the proposal of the nobles to surrender their powers to him, at the same time encouraging them to introduce western civilization in every proper method. As an example for their imitation in the way of progress, he himself began to study the German language.

(1854年のペリー提督の来航以来、多くの大名が、この転換期に必要なとされる政府の形態について考えを改め始めた。国が無数に小さく分割されていては、国内で戦乱が絶えず無政府状態に墮す恐れがある。そうなれば容易に海外列強の餌食になってしまう。この危険から逃れるために、そして全国民のための強力な中央政府を確立するために大名は一致協力し、その全権力を天皇に委ね、国家の統治者として君臨

するよう要請した。この権力の移譲は完全な大名側の発意によって行われた。国家の良き将来を思い、自らの意見をまとめて自らで計画を立案した。天皇は封建制度に対して何ら措置を講じるよう要求したこともなければ、制度や大名の特権の廃止にいかなる権力の行使をしたこともない。これは自分が胸を張って言いたいことなのだが、他の国であれば内乱無しでこのような大変革はまず起こりえなかつただろう。日本では内乱どころか、血一滴流されることはなかつたのである。

これは、ひとえに支配階級の考え方の変化により引き起こされた偉大な革命だった。天皇は、大名から要請を記された巻物を受け取って初めて事の起こりを知つたのだった。そこには次のような事が書かれていた。文明化が進み、古い習慣が廃止されるにつれ、様々な改善が必要である。封建制度を改める時が来た。天皇は、もちろんこの変化の要請を聞いて喜んだ。こうして、約4000万の民は変化の恩恵に浴すことができたのである。天皇は大名の特権譲与の要請を受け入れるとともに、可能なあらゆる方法を用いて西洋文明を導入するよう大名を促した。その具体的な一つの例として、天皇自らがドイツ語を学び始めた。）

この段落は、大政奉還についての説明と理解していいだろう。実際はより複雑なプロセスを経ていたが、大名主導の変革という点がひたすら強調されている。江戸から明治への変化が無血だったと書かれているが、これは事実とは言えない。1871年の論文でも、將軍は9日間の内戦の後敗北して江戸に逃げたと書いている。明治天皇のドイツ語学習とは、加藤弘之によるドイツに関する講義のことと思われる。

- ④ The nobles of Japan, have now, by their own acts, become equal in rank to the common people. And not only have they thus

given up their rank, but they have even given much of their property and revenue to the emperor. For the government could not support its army and navy and other expenditures without means, and the wealth was largely in the hands of the nobility. At first the government declared that one-tenth part of their former revenues should be retained or given back to the nobles; however, after a few months, they sent to the emperor another petition, in which they said that one-tenth of their former revenue was too much for those who were of so little use to their country, but recommended that if any of the nobles had the ability to occupy any public office, then a proper salary should be paid for their service. But one-tenth of the former revenue of many of these nobles were some seven or eight times greater than the salary of the President of the United States. They retain now, I think, only one-fiftieth part of their former revenues.

(日本の大名は、今では自ら望んで平民と同じ地位にいる。つまり、自分たちの高位を放棄したのだが、それだけでなく自分たちの財産や収入の多くも天皇に差し出した。新政府には収入が無かったので、陸軍、海軍及びその他の支出を賄うことができなかったからだ。実際、当時の富の多くは大名によって握られていたのである。最初、新政府は大名に以前の10分の1の収入を保持してよいと宣言した。しかし、その数か月後、大名たちは天皇に2通目の請願書を送った。それは、自分たちはほとんど国家の役に立っていないのだから10分の1は多すぎるといったものだった。もし、官職に就ける能力がある者がいれば、それに見合った俸給を貰えばいいとも書いてあった。実際この10分の1というのは、米国大統領の給料の7、8倍にあたる金額である。大名は今、かつての50分の1の禄を食んでいると思う。)

版籍奉還では、大名は藩の禄高の10分の1を個人的な家禄として認められた。この段落の内容も、あくまで大名主導の改革実現という点が強調されている。歴史的事実とは随分異なるようであるが、国友は当時、実際このように理解していたのだろうか。国友のこの大名主導という発想がどこから生まれたのかは興味深い点である。具体的な数値を用いて説得するという技術は米国で学んだものであろう。

- ⑤ Some of our former nobles who had large fortunes are now building hospitals, schools, a (1 語不明), and many other charitable institutions in our principal cities. In some instances, several unite together in such progress. Others have become merchants, traders and farmers. It is very hard for persons of this class, who had no previous knowledge of the several kinds of the business, to enter these new occupations. But they are determined to do it in every possible way. Hence, many of our nobles are coming to this country, as well as to Europe, to study the arts and occupations of life in your western civilization; and everything we find here that is useful and good, we will take back with us and adopt them in our own land.

(大変豊かな大名の中には、主要都市に、病院、学校、(一語不明)、そして多くの慈善施設を建てている者もいる。大名が共同でこのような計画を実行している例もいくつかある。商業や貿易、農業に勤しんでいる者もいる。しかし、この種の知識が無い武士階級には、ビジネスの世界に入っていくのは大変難しい。それでも、彼らは何としてでもやっていこうと決心したのである。そこで彼らの多くが、西洋文明における職業知識や役に立ちそうな事を学びに、ヨーロッパや米国に来ているのである。ここで、優れているあるいは有用だと思った物は

何でも日本に持ち帰り採用するのだ。)

維新後の大名の社会貢献の具体例が挙げられている。旧領主であった大名の中には、自らの資産の多くを新政府に進んで差し出しただけでなく、公共の施設の建設にも積極的だった者もいたということで、大名の貢献度を強調している。福井藩のように羽二重の輸出を積極的に推進した藩もあった。農業に関しては、時代はかなり下るが福井藩第18代当主松平康荘(1867-1930、留学期間1884-1890)のように英国留学で農芸を専攻した例がある。江戸時代と異なり、生活の糧がなくなった大名やその子弟の多くは、職業に関する知識を得るために留学したと書かれているが、現実には教養を身に付ける、西洋文明を体験するといった、上流階級の子弟ならではの目的が多かったのではないだろうか。

⑥ We do not intend to follow after and be behind western civilization and new inventions always. We mean to overtake you some day, and let you and some other nations exchange places with us in the race of progress and civilization. And if we advance in the same proportion as we have since 1854, when we made a beginning, then we trust we will succeed at no distant day to the full extent of our hopes and ambitions. In order to do this, we know that we must work very hard in each and every object we aim to secure, until it is our own: we must do as much as you in the way of progress, and more: for if we only do as much, then we shall always be behind, and never come to a state of equal civilization with you.

(我々は、いつまでも西洋文明とその新しい発明に追従し後塵を拝し続けるつもりはない。いつの日か西洋諸国に追いつき、進歩と文明と

いう競争において立場を逆転させる。我々は1854年以来、かなりのペースで進んできたが、これと同じペースを維持し続ければ、そう遠くない日にこの野望が実現するだろう。そのためには、我々は精進しなければならない。西洋と同じペースで進んでいては、永遠に追いつかないので、文明上同等の地位につくためには、その上を行かねばならない。）

日本の文明化の速度を落とすことなく、一刻も早く西洋諸国家に追いつき追い越すという野心が表明されている。西洋先進国への挑戦状と言えなくもない。

後の時代には「黄禍」(yellow peril)と言われ西洋から警戒された日本の発展は、この時点ではまだ現実ではなかった。国友のこの朗読の2年前の10月、普仏戦争視察団がニューヨークを訪問した際に、一行の一部が当時のニューヨークを代表する新聞の一つであった*New York Sun*のオフィスを訪問した。10月30日の同紙に掲載されたこの訪問を伝えた記事の見出しは、OUR JAPANESE COUSINSとなっている。米国側も、この段階では、日本を自らが開国させ西洋化に導いた身内の国という見方が支配的だったのだろう。そういう状況であれば、この国友の野心も微笑ましいものとして受け入れられたのではないか。

- ⑦ How can we possibly overestimate the immense benefit the fall of the feudal system has brought to Japan! It was a dim light which foretold and ushered in the brilliant day. It was like a summer shower — quickly passed away, but leaving new beauty and life where each rain drop fell.

（封建制度の崩壊が、日本にどれほど大きな利益をもたらしたことだろう。それは、文明化された輝ける日へと日本を導くほのかな明かり

だった。夏のにわか雨とも言えるだろう。すぐに通り過ぎて行くが、降る先々で新しい美しさと命の息吹を残すのだ。)

封建制度＝悪，西洋文明＝善という視点が，抒情的な比喩を駆使して表現されている。日本の和歌や俳句を彷彿とさせるレトリックである。

- ⑧ The first imperial ambassadors ever sent from our land are in this country. They have come to make a new treaty, since the old treaty will expire at the end of July. They come to this country first, because the American was the first of the western nations who made treaty with us. Let us hope that our ambassadors and your government will form a most friendly and lasting treaty for the interests and happiness of both nations.

(日本から派遣された最初の特命大使使節団が，今，ここ米国に滞在中である。彼らは，旧条約が7月末に失効するので，新条約を締結するため来ている。彼らは訪問国の最初の国に米国を選んだ。それは米国が最初に日本と条約を結んだ国だからである。願わくば，大使一行と米国政府の間で，両国に利益と幸福をもたらすような，最も深い親善に基づき永続する条約が結ばれんことを。)

当時，米国を岩倉使節団一行が訪れていた。条約改正は訪問の目的の一つであり，使節団に対する米国の歓迎ムードに一行は期待を抱いていた。結局条改正交渉は7月22日に打ち切られ失敗に終わった。このスピーチを国友が書き，読み上げた時には，まだ条約改正実現の希望があった。国友にしてみれば，米国市民の支持を得るという後方支援を行ったつもりだったのである。そして，これこそが，このスピーチの最大の目的だったのである。

【資料 2】 種子島敬輔（吉田彦磨）の論文を掲載した新聞記事

Providence Evening Press 1870年8月17日

A Japanese Essay on Oriental Civilization.

The Springfield Republican reports the following dissertation delivered at the annual exhibition at Monson Academy, June 28, 1870, by Yoshida Hicomaro, Nagasaki. Japan.

転載記事であるせいか、この論文に関するコメントは以上のみである。種子島の出身は薩摩ではなく長崎と記述されている。

① Since the time when the world was proved to be spherical in form, by its circumnavigation by Magellan, the terms oriental and occidental have not been used with strictly scientific accuracy; for the United States of America are east of Japan, and yet Japan is called an oriental nation, though in fact it is occidental in relation to them.

（マゼランの世界周航によって地球の球体が証明されて以来、東洋と西洋という言葉は、科学的に見れば不正確に扱われてきた。例えば米国は日本の東方にあるが日本は東洋の国と呼ばれる。実際、日本は米国から見れば西洋に当たるのだが。）

② Notwithstanding this geographical absurdity in their application, still these terms have, in history and literature, a signification which is well enough understood, since the term oriental designates those countries and whatever belongs to them, which are south and east of the Black Sea, while all Europe and the American Continent are spoken of as occidental.

(このように地理的にみれば、おかしな使い方がされてきたのだが、東洋と西洋という言葉は歴史的そして文学的な意味ではそれなりに重要性がある。一般的には東洋は黒海よりも南と東の国々を指し、西洋はヨーロッパとアメリカ大陸の全ての国を指す。)

- ③ It is an evident and remarkable fact, that, throughout the East, a striking uniformity exists as to the type of civilization called oriental, relating to ideas, customs, habits, and manners, though it includes many different races, nationalities, and religions. So there is in the general character of western or occidental civilization a general uniformity which is very evident.

(東洋は、多様な人種、国民、宗教が存在しているにも関わらず、思想、習慣、風習、礼儀作法などにおいて一つの文明として際立った統一性を示している。これは明白で驚くべき事実である。西洋も同じように統一性がある。)

- ④ Why there is that marked distinction in the character of a people, which is expressed by these general terms of locality, I cannot understand. The difference in the local condition and character of mankind are infinite, and cannot be determined definitely.

(東洋と西洋という地理的な言葉によって表現される人々の性格が、どうしてこうもはっきり異なるのか。地理的な条件と人間の性質の間に明確な因果関係が付けられるものではない。)

- ⑤ We know what changes are produced by the vicissitudes of time; but, notwithstanding the infinite diversity in the condition of mankind, we know that human nature is the same everywhere

and always; that there is unity in the consciousness of mankind in all places alike; and all are animated with love and hatred, with grief and fits of passion.

（我々は、時代の変遷によってどんな変化が生まれるか知っている。しかし、人間が置かれている条件が千差万別であるにもかかわらず、人間の理性、感情といった本質は不変かつ普遍的である。）

前段落までは、東洋と西洋の相違について述べていたが、この第5段落と次の第6段落では、人類の共通点について記述している。

- ⑥ Men in every land have conscience or the power to judge what is right or wrong in acts. Integrity is as highly valued in Japan as in the western nations. In the great cities of the West, such as London, Paris, and New York, the degraded classes are not unlike those who live in the great emporiums of the East, such as Calcutta and Yeddo.

（どの土地の人間も善悪を判断する良心を持っている。高潔さは西洋と同等に日本でも高く評価されている。ロンドン、パリ、ニューヨークなどの西洋諸国家の大都市には下層階級がおり、カルカッタや江戸のような東洋の商都も状況は同じである。）

- ⑦ Persons not conscious or reflective, are apt to treat unfairly and unjustly, with conceited biases and prejudices, such facts as these. Bound as I am by so much love and sympathy for the oriental country to which I belong, I may carry philosophy too far, and flatter too much the civilization of the East, and yet I cannot but regard the East as being the cradle of civilization, and as the

earliest source of light of every kind which relates to the arts and philosophy.

(深く考えない人、あるいは理性的でない人は、うぬぼれた偏見や先入観に捕われ、人類は同じだという事実を不当に軽んじる傾向がある。自分なども、自分の出身である東洋の国（日本）を深く愛し、大いなる共感を覚えるあまり、東洋文明を誉め過ぎているかもしれない。東洋は文明の揺籃の地であり、芸術や哲学に関する最古の光源は東洋にある、などと考えてしまうのである。)

この第7段落は1つの転換点で、一転して東洋賛美に移っている。しかし、これは理性を欠いた人のすることだと謙虚に自分の非を責めながら述べている。聴衆が西洋人であるということを意識したのだろう。

⑧ The Eastern nations mirrored forth their intellectual life before Greece and Rome began to exist and long before other European nations, whether Teutonic or Celtic, were anything but strictly barbarous, being buried in utter darkness and ignorance. Long before the ages of improvement in the West, the faculties of the mind, endowed by the Creator, were not undervalued in the East. The metaphysical speculations of India, and the theologico-philosophical doctrines of the Vedas, were not surpassed by the Greek or Roman writers. The uninspired wisdom of Confucius made the nearest approach to the divine morality of the gospel. The rationalistic discourses of Loo reached a climax of excellence. The pantheistic theory of the philosopher Hagel was understood in the East very early.

(古代ギリシャ文明やローマ帝国が始まる以前、つまりチュートン人

であれケルト人であれ、ヨーロッパの国々が完全に野蛮人で無知の闇に埋もれていた時代よりも更に前に、東洋の国々は知的生活という点で輝きを放っていた。西洋がその後大きな進歩を遂げるずっと前に、創造主により与えられた知性は東洋では既に重んじられていた。インドの形而上的思索、ヒンズー教の神学的且つ哲学的教義は、ギリシャやローマの哲学を凌駕していた。儒教の叡智は福音が伝えるキリスト教的道徳の域にほぼ達していた。魯の聖人の合理主義的講話の素晴らしさがそれをよく表している。哲学者ヘーゲルの汎神論は、東洋では大変早くから理解されていた。）

この第8段落は、種子島がモンソン・アカデミーで受けた古典教育の成果であろう。当時のニューイングランドでは、ラルフ・ウオルド・エマソンやヘンリー・デビッド・ソロー等により東洋の宗教や儒教の思想は既に紹介されていた。一部の知識人には種子島の主張は、さほど抵抗無く受け入れられただろう。

⑨ It is certain that very long ago in the East there were many theories, systems of philosophy battling each other with various forms and principles, just as we now see these conflicts going on to-day in the western world.

（東洋では、昔、多くの宗教論や哲学論がその形式や原理をめぐって対立していた。今の西洋に見られる教派間の争いと同じである。）

⑩ By this I infer that the theories of social life, and ideas or opinions concerning philosophy, metaphysics, morality, and theology must continue to battle each other as they always have, from the earliest times; that opinions and systems will conquer and be

conquered, will rise and fall again and again, as the history of the human mind and human nature shows in all ages and countries, East and West.

(社会生活の原理や哲学、形而上学、道德観、神学に関する意見は、今までずっとそうであったように、切磋琢磨し合うべきである。意見や制度は相互に征服し合い、浮き沈みを繰り返すものなのだ。それは、人間の知性と人間性の歴史が、洋の東西、古今を問わずに示していることである。)

- ⑪ We trust and earnestly hope that, by and by, this process of struggles will bring all thinking minds into a certain equilibrium as to the matters of belief and right action, though that end we have come far short of, as yet.

(我々が切に望み、信じている事はこうである。この相克の過程が全ての思想に調和をもたらし、正しい信仰と行動に我々を導くのである。それはまだ途轍もなく先の話であるが。)

相克が相互を高め合い最後には至高のレベルの調和を生み出すという種子島の論理は、この後で洋の東西間にも適用される。

- ⑫ If we turn now and ask for reasons why Asia, long the seat of so much mental activity and conflict, and the source of so many systems of philosophy, should now be sunk into such utter darkness, why the progress in philosophy made in ancient time should now be checked, and why social life in all its forms and institutions should now be confined, as it were, by mechanical rules, there are many reasons, of course, to account for this; such as

despotic government, the organization of caste, the vain formalities of social etiquette, which are each and all especially paralyzing in their influence, and so preventing the progress of civilization. But the greatest, the most specific and essential obstacle of all which retards and holds us back, is the total absence of freedom in the spirit and in the mind of the people. This lack of freedom has tended to the result which in turn has become a great hindrance to progress, that is, a want of that flexible and versatile character of mind which once so distinguished the Greeks, and is not wanting among modern occidental nations. If this want of flexibility and versatility must remain as the fault of the eastern nations, then they must decay continually. Social stagnation and utter decline is the great danger of our people, unless they are shaken out of this lethargic condition by some vehement convulsion.

（さて、アジアの話である。アジアは長きに渡り、豊かな精神活動の場であり、相互の相克の場であり続けた。また、多くの哲学体系が生まれた地でもあった。そのアジアがなぜ今、暗闇の中に沈んでしまっているのか。なぜ、かつての哲学上の進歩が阻害されてしまっているのか。なぜ、その正当性が確認されねばならないのか。なぜ、あらゆるレベルでの人間関係が、現代の機械的な法則により現代では制限されてしまっているのか。もちろん、それには多くの理由がある。専制的な政府、身分制度、無意味な形式主義に墮した社会上のマナーなど。これらの影響が麻痺を引き起こし、文明の進歩を阻んでいるのである。しかし、最大のそして根本的なアジアならではの障害は、人々の精神の自由が完全に奪われていることである。自由が枯渇すれば進歩は大いに阻害されるものだ。古代ギリシャでは知力が柔軟に様々な目的に

利用されていた。このギリシャならではの伝統は現代の西洋諸国に受け継がれている。もし、東洋が自ら望んでこの西洋の美德を欠き続けるならば、東洋は今後も朽ち続けるに違いない。もし、東洋が何らかの激しい動きに突き動かされ、この不活発な状態から振り出されなければ、社会的な停滞と衰退の危機から逃れられないだろう。）

第12段落は異例の長さである。種子島は精神面で優れていたアジアの衰退の理由を解き明かしている。種子島は東洋を盲目的に最良していたわけではなく、その衰退の理由と西洋から東洋が学ぶべきものを理性的に把握している。

- ⑬ We look to the western nations for this hoped-for wakening power. The steamship, railway, and telegraph, are pushing their mighty forces further and further into the profundities of oriental life. The quickening effects of western activity and enterprise are felt everywhere, and are causing rapid and more surprising changes in many respects. As the final result, western influence on the national character and civilization of the East no doubt will work counter changes, and have great reactive power. History has shown us that changes in civilization have been intensely slow in their beginning, and often very rapid in the latter stage of assimilation.

（我々は自分たちを目覚めさせてくれる力を期待して西洋に眼差しを向けている。蒸気船、鉄道、電信が東洋の思慮深い生活に、徐々に強い影響力を及ぼしつつある。西洋の活動力と進取の気性の刺激的な影響が随所で感じられる。そして多くの点で急速で驚くべき変化を引き起こしている。最終的には、このような西洋的な現象は、東洋人の国

民的性質や文明に影響を与えるが、大きな反作用も引き起こすはずだ。歴史が示すところによれば、文明の変化は最初の段階で異常なほど遅い。しかしその後、同化の段階は一気に加速することがよくある。）

第13段落では西洋の物質文化がもたらした東洋への影響について述べている。

- ⑭ I firmly hope that the people of my native land will soon incorporate many of the noble ideas and principles of the western world into our own institutions; especially that we, as a nation, may be able to penetrate and understand the eternal truth of God and his great providential scheme. Then, I trust, our ancient civilization will become more noble than ever before, and especially, so I trust, that the great empires of the East will cherish and maintain a magnanimous spirit, so that they may forget and forgive every injustice long practised by some of the western nations; and also remember, with amity and good-will, the kindness of those nations, especially the people of the United States of America, who desire to do them good.

（自分が切に望んでいることは、日本人がすぐに西洋世界の崇高な思想と原理を自分たちの制度に導入することである。特に、国家ぐるみで神の永遠の真理の世界に入り理解できるようになることだ。その結果、古代から続く日本の文明は今まで以上に崇高なものになるはずだ。さらに、東洋のこの偉大な諸帝国は寛大な精神を慈しみながら維持し、西洋の諸国家によって長きに渡り実行されたあらゆる不実を忘れ許すはずである。もちろん西洋国家による善行も友好的に覚えていることだろう。特に東洋人のために思っている米国の場合はである。）

この最後の段落で、キリスト教への種子島の深い帰依が現れている。前年の論文では種子島のクリスチャンとしての信条が色濃く現れていたが、この論文では、種子島の思考の世界の拡大が感じられる。最後は、聴衆である米国人を意識した一言で結んでいる。

【資料3】

2013年8月の米国における調査で、モンソン・アカデミーと日本人留学生に関する以下の新聞記事を発見した。解説を付して紹介する。

1. *Springfield Weekly Republican* 1871年4月7日

The spring term of the Monson Academy, Rev. Charles Hammond principal, began on Wednesday with a good number of students, including several Japanese from their native country, to take the places of their countrymen who were graduated at the close of the last term. One of the latter, it will be remembered, went as secretary to a Japanese prince, on his tour of the European countries.

(モンソン・アカデミーの春学期が水曜日に始まった。多数の学生がいるが、その中には日本から来た何人かの学生も含まれている。冬学期の終わりに卒業した数人の日本人留学生の後を継いだわけである。この卒業生の1人が日本人のプリンスの訪欧に秘書として同行したことは記憶されている。)

モンソン・アカデミーの当該時期のスクール・カタログによると、1871年6月終了の年度に入学したのは、国友次郎、津田静一、中原邦之介の3人である。このうち複数名が1871年4月開始の春学期に入学したことになる。津田はニュージャージー州のラトガーズ大学附属のグラマースクー

ルに 1870 年 1 月に入学しているの、直接日本から来た学生ではない。記事の記述に従うと国友と中原の可能性が高い。

春学期があるということは、おそらく 3 学期制で冬学期は 1871 年 1 月～3 月ということになる。同カタログによると、1871 年 6 月終了年度が在学最終年度となるのは、湯地定基のみである。湯地はおそらく 1872 年 9 月から、マサチューセッツ農科大学（Massachusetts Agricultural College）に入学している。

新聞の記述に従えば、最低もう 1 名の日本人卒業学生がいたことになる。その可能性があるのは種子島敬輔である。種子島は 1870 年 6 月終了学年までの在籍となっている。注(3)で記したように、種子島は 1870 年 10 月終わり頃の時点では、1871 年秋からのハーバード大学入学を考えていた。そのため、1871 年度の冬学期のみモンソン・アカデミーに復学していた可能性がある。犬塚孝明氏によると、種子島は 1870 年頃英国に渡り、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに学んだとのことである（犬塚孝明「第二次薩摩藩米国留学生覚え書——日米文化交流史の一齣」『日本歴史』453 号、1986 年、P. 50）。この記述が正しければ、prince に従って渡欧したのが、種子島という可能性も出てくる。

prince は大名あるいは家老クラスの子弟を指すと思われるが、この語は当時の米国新聞での使い方が曖昧であるため個人名を確定できない。

当時の学校が制作、発行していたスクール・カタログは貴重な資料であるが、1 学年度のどの程度の期間、あるいはどの時期に在籍していればカタログに在生学生として記載されるのかという点を明らかにしなければならない。

2. *Boston Daily Evening Traveler* 1873 年 3 月 31 日

The report that Japanese students have been withdrawn from

Monson Academy, is untrue. One student only has been transferred to a military school by order of his government.

(日本人留学生がモンソン・アカデミーから引き上げたという報道は間違っている。日本政府の命により1人のみが陸軍兵学校に転校しただけである。)

同校のカタログによると、1873年6月終了年度に在籍していた日本人学生は、岩男三郎、池田猪之助、吉田慶蔵、湯地定監の4人である。この記事によれば、1873年3月終了の冬学期で日本人学生が全て同校を去るという報道がこれ以前になされたことになる。

1名の学生が陸軍兵学校に転校したと書かれているが、これはアナポリス海軍兵学校に入学した湯地ではないだろうか。

ボストンの新聞にこのような記事が掲載されていたことから、モンソン・アカデミーと日本人留学生との関係が、地元モンソンのみでなくマサチューセッツ州周辺である程度一般的に広く認知されていたことがうかがわれる。

(原稿受付 2013年9月27日)

〈資 料〉

フアン・デル・エンシーナ 「牧人劇 (Églogas)」に現れる レオン方言的特徴の考察

—「牧人劇Ⅱ」—

廣 澤 明 彦

0. はじめに

スペインの文献学者、メネンデス・ピダル (Menéndez Pidal, Ramón) は、著書『レオン方言』(“El dialecto leonés”, 1906, 以下, MPL) の中で、15~16 世紀のスペインで劇作家として活躍したフアン・デル・エンシーナ (Juan del Encina) の演劇作品から、レオン方言的特徴を伴う例を度々引用している。

本稿は 1496 年にサラマンカ (スペイン) で出版された、フアン・デル・エンシーナの『詩歌集』(“Cancionero de las obras de Juan del Encina”) に収められている 8 つの「牧人劇 (Églogas)」のうち、2 番目に数えられる作品『同じ降誕祭の夜に上演される牧人劇』(“Égloga representada en la misma noche de Navidad”) に注釈を加え、その中のレオン方言的特徴について紹介したものである。底本は廣澤 (2011) で用いたペレス・プリエゴ (Pérez Priego) の注釈、監修による、エンシーナ (Encina,

Juan del, “Teatro completo. Edición de Miguel Ángel Pérez Priego”, 1998, 以下, PPCA) を用い, 適宜, アルベルト・デル・リオ (Alberto del Río) の注釈による, エンシーナ (Encina, Juan del, “Teatro. Edición de Alberto del Río”, 2001, 以下, DRCR) も参照した。

脚韻は「牧人劇 I」の場合と同様に, ABBA-ACAAC の型と, 巻末の 7 連のビリャンシーコから成る (SJE, p.49)。

尚, 参考として記載した訳は, 全て試訳である。

1. 注 釈

Égloga representada en la misma noche de Navidad

[タイトル]⁽¹⁾ 同じ降誕祭の夜に上演される牧人劇

1⁽²⁾. ÉGLOGA REPRESENTADA EN LA MESMA NOCHE DE NAVIDAD.

- MESMA NOCHE: 「同じ夜」。これは牧人劇 I (以下, 引用の際は *I* とする) と同じ日, 即ち 1492 年のクリスマスイブに上演された作品である。• MESMA: → *misma*⁽³⁾。

2. Adonde se introduzen los mismos dos pastores de arriba, llamados Juan y Mateo.

- Adonde: cf. *I* の前書き 2 番目の文。• introduzen: → *introdu-*

(1) 筆者の補足説明は [] 内に入れた。

(2) 前書きは散文であるので, 便宜上一文ごとに番号を付した。

(3) → の記号は, 現代のスペイン語の表記, 及び語順を提示する場合に用いた。即ち A→B, 「A は現代のスペイン語では B [の語順]」。以下同様。

cen。・de arriba: 「上の」。ここでは *I* を指す。

3. Y estando éstos en la sala adonde los maitines se dezían, entraron otros dos pastores, que Lucas y Marco se llamavan.
・maitines: 「朝の勤行」。・se dezían: →se decían。・llamavan: →llamaban。・*I* にすでに登場した Juan, Mateo にこの作品では Lucas と Marco が加わる。
4. Y todos quatro, en nombre de los cuatro evangelistas, de la Natividad de Cristo se començaron a razonar.
・quatro: →cuatro。・en nombre de: 「～の名で」。 *I* の前書き 3 番目の文でも用いられ, 「～という名の役で」の意味。・Natividad: 「降誕」。・començaron: →comenzaron。・razonar: 「話す」。・evangelista: 「福音史家」。『新約聖書』でイエスの生涯を扱った 4 つの「福音書」の作者, マルコ, マタイ, ルカ, ヨハネに対応するスペイン語名, Marco, Mateo, Lucas, Juan の役名で演じられる。

前書きの部分の訳

1. 同じ降誕祭の夜に上演される牧人劇。
2. 上と同じフアンとマテオという名の 2 人の牧人が登場する。
3. この 2 人が朝の勤行が行われている広間にいると, そこにルカスとマルコという名の別の 2 人の牧人が登場する。
4. そして 4 人全員が, 4 人の福音史家として, キリストの降誕について話し始める。

Juan. Mateo ¡Oh, nora buena vengáis!

Lucas ¿Y vosotros acá estáis? 3

1) Dios mantenga: 「当時の田舎の人たちの間での日常のあいさつの決まり文句であり、その後戯曲の羊飼いにより良く用いられている」⁽⁴⁾ (PPCA, p.107)。挨拶なので訳すのは適切でない場合もあるが、mantener の原義を考慮し、mantenga は神に対する命令形ととり、お恵み、庇護を求めて呼びかける意味とした。2) nora buena: 「en hora buena のこと。前置詞の語頭音消失と後続の語との縮約形で、田舎の羊飼いの言葉にしばしば現れる」(PPCA, p.107)。現代スペイン語で、対応する enhorabuena は「おめでとう」の意味で用いられるが、ここは原義の「良い時に」、「折よく」の意味にとる。cf. *I*, v.52⁽⁵⁾。2) vengáis: この行は挨拶を構成しているのであまり分析するのは適切ではないかもしれないが、眼前の「来た」という事実に対して venir の接続法が用いられていることから、感情の主節を用いる名詞節の用法が想定できる。「君たちが来ることが我々にはうれしい」の意味である。即ち、*nos alegramos de que vengáis nora buena* と補ってとらえることにする。3) acá: 「ここに」。この作品 *II* は、同じ日に *I* に続いて上演されたので、引き続き出演しているフアンとマテオに対して、「まだここにいたのか」の意味で言っている。

訳 (v.1-v.3)

ルカス、マルコ 神のお恵みを、ご加護を!

フアン、マテオ おお、よく来たな。

ルカス あれ、君たちここにいたの?

Mateo ¡Miafé, ha! Venga quien venga. 4

(4) 参照した文献の拙訳を「」に入れた。

(5) v. = verso (「行」)。即ち、cf. *I*, v.52 = 「牧人劇 *I* の 52 行目を参照せよ」。

Mateo	¿Y cuándo, cuándo nació?	10
Lucas	Aun agora, en este punto: Dios y hombre todo junto, y una virgen lo parió.	13

10) cuándo: →cuándo。11) agora: →ahora。11) aun: MED によると 15 世紀には現代の aún「まだ」(=todavía) と aun「さえ」(=hasta) の意味で用いられており、前者は「二音節語」。v.11 の aun は後者の意味を参考として用いる。したがって aun agora は「たった今」。11) en este punto: en punto が「ちょうど」の意味であり、時点の意味の punto に este を用いた限定、ととる。したがって「まさに今」。12) todo junto: 先行する Dios y hombre と同格。13) virgen: 聖母マリアのことでもあるが、una virgen と不定冠詞を用いているのを考慮して、「一人の乙女」とした。13) lo: 他動詞に先行する直接目的語 v.12 を受ける。13) parió: <parir「産む」。現代のスペイン語では人間の動作には用いられないが、MED は、12~15 世紀には人の場合にも用いられ、他動詞としても用いられるとしている。ただし 16 世紀のピカレスク小説、*La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades* (1554 年) において、主人公ラサロの母親が自分を生んだことに関して述べている箇所、parióme allí「(彼女は)私をそこで生んだ」(現代スペイン語の語順では、me parió allí) と、parir を人に用いている例も確認できる。

訳 (v.10-v.13)

マテオ	え、いつ生まれたんだい？
ルカス	ちょうど今、この瞬間にだよ。 神と人間まとめて1つを、 一人の乙女が生んだんだ。

Marco	Bien lo barruntava yo.	14
-------	------------------------	----

Mateo	Yo también bien lo sentía,	15
	mas primero lo sintió	
	aquellotro que escribió	
	que una virgen pariría.	18

14) barruntava: →barruntaba。barruntar(tr.) 「～の予感がする」。
 15) también: tan+bien から成る語であるが、現代の表記は también。
 16) mas: =pero。17) quellotro: →aquel otro。「代名詞の縮約と -l- の口蓋化によるもの」(PPCA, p.108)。cf. *I*, v.49。17) escribió: →escribió。17) que: 関係代名詞。先行詞は quellotro。18) que: 接続詞。主動詞は v.17, escribió。ちなみに『マタイによる福音書』(1:22-1:23, 以下、『マタイ』) に処女が懐胎、男子を出産するという旧約聖書の予言に触れた箇所があり、マテオにそれを言わせている。それを予言した v.17 quellotro 「あの別の人」とは、PPCA (p.108) によると『イザヤ書』(7:14) のイザヤに言及しているという。14-16) 3か所で用いられている lo は v.12 を受けるとも、或いは v.12-v.13 を受けるともとれる。後者の場合事柄を扱うことになり、その場合の lo は中性。

訳 (v.14-v.18)

マルコ	ちようどおいらもそんな予感がしていたぜ。
マテオ	おいらだってちようどそう感じていたさ、 だけど最初にそれに気付いたのは 乙女が産むだろうって 書いた例のあの人さ。

Lucas	¿Qué te parece Mateo?	19
Mateo	¿Y a ti, Lucas? Di, verás.	20
Lucas	¿Y tú, Marco, qué dirás?	
Marco	Qu'es cumplido mi desseo.	22

20) a ti: 省略されている部分を示すと, ¿Y qué te parece a ti? もしくは ¿Y a ti qué te parece? となる。22) desseo: →deseo。22) qu'es cumplido: →que es cumplido。v.22 は v.21 への返答であり, ¿qué dirás? 「何を言うか」に対しそのまま答えるとする, 省略されている主節は digo, 以下 que に導入された従属節の部分のみが v.22 に現れている。即ち, *Digo que es cumplido mi desseo.* 22) *es cumplido mi desseo:* 3つの解釈が想定される。cumplido を cumplir の過去分詞とする場合, 自動詞ととらえれば, v.9 の場合のように mi desseo を主語とした現在完了「私の望みがかなった」。他動詞であるとする, mi desseo が主語となる受動態で「私の望みがかなえられる」。cumplido を形容詞とする, 完了でも受動でもなく「私の望みがかなっている」。生まれたという出来事に対してのコメントという文脈から, ここは現在完了ととる。

訳 (v.19-v.22)

ルカス どう思うマテオ？
マテオ お前こそどうなのさ, ルカス? 自分で言ってみれば分かるだろうよ。
ルカス じゃマルコはどう思う？
マルコ おいらの願いがかなったぜ。

Lucas	¿Y tú, Juan del buen asseo,	23
	qué dizes que estás callando?	
Juan	Miafé, digo que lo creo,	25
	que ya estava yo en oteo	
	de luengo tiempo esperando.	27

23) asseo: →aseo 「清潔さ (limpieza), 詮索好き (curiosidad), 装飾 (adorno), 身繕い (compostura)」(RAE)。I, v.50, v.77 においてファンはめかしこんでいるという言及がある。この作品でもそのままの衣装

で登場していると考えられる。24) *dizes*: →*dices*。続く *que* 以下の節は理由, または譲歩ととり, *dizes* 自体を強調しているものとした。即ち「君は黙っているが, 何か言いたいことあるのか」。25) *miafé*: cf. *I*, v.27。25) *que*: この *que* は *digo* の名詞節を導入。25-26) , *que*: 説明の理由節を導入。「なぜなら」。26) *estava*: →*estaba*。26) *oteo*: *otear* には「高いところから見る」の意味があり, その名詞形。27) *luengo*=*largo*。27) *esperando*: これは願望の意味を込めながら「待つ」の意味にとり, v.26 の *estava* と連続し, 進行形の意味とする。「なぜなら私は既に見えるところで長い間待っていたからね」。cf. v.149-v.150。

訳 (v.23-v.27)

ルカス じゃあすてきなおベベのファンは？

黙っているけど何か言ってよ。

ファン いいとも, おいらそうだと信じてたよ。

だっておいら既に見えるところから

長い間ずっと待っていたからね。

Mateo ¿Qué esperavas? Di, zagal, 28
por tu salud, habra, habra.

Juan Que Dios, que era la palabra, 30
decendiese a ser carnal. 31

28) *esperavas*: →*esperabas*。28) *zagal*: 「少年」, 「男」, 「牧童」。マテオは *I*, v.37 でもファンに *zagal* と呼びかけている。29) *habra*: →*habla*。tú に対する命令。cf. *I*, v.120。30) , *que*: 先行詞に v.30 の *Dios* をとり, 説明の関係節を導入している。即ち *que* が主語の役割, *era* (<*ser*) が繫辞動詞, *la palabra* が補語とし「そして彼は言葉であった」。ところでこの作品の4人の登場人物は4人の福音史家の名に対応しているが, このファンの発言が『ヨハネによる福音書』(1:1。以下, 『ヨハネ』)

訳 (v.37-v.40)

天から神の名は降りてきた、
それはかつてない程の偉大なもの、
人々は彼をイエスと呼び
そして称号は救世主と呼ぶように。

Juan Ya tenemos Dios y hombre, 41
ya passible el impassible.
¿Quién avrá que no se asombre?
¿Quién avrá que allá no encombre
ver visible el invisible? 45

41-42) ya: ya A, ya B といったように、並列の接続詞的に用いられる。
41) Dios y hombre: 「神と人」、つまり「イエス・キリスト」のこと。42) passible: (→pasible) 「感受性の強い」、「傷つきやすい」の意味があるが、文脈から判断すると「受難 (pasión) を被りうる」という形容詞である。それに否定の接頭辞がついた impassible (→impassible) は「受難を被り得ない」、定冠詞がつくので名詞化され「人」ととる。el impassible es ya passible とし、自ら原罪を救済できない人間が、神の子、即ち v.41 にある神と一体のイエス・キリストが受難を被り (passible)、「人」が贖罪されるということであろう。43) avrá: →habrá (<haber)。43) se asombre: →se asombre。asombrarse 「驚嘆する」の接続法現在。43) この行は一見、hay que~が想定されるが、ここの que は関係代名詞で先行詞は quién, avrá は haber の一般動詞の用法「居るだろう」ととる。「驚かない者がいるだろうか」。44) encombre: →encumbre (PPCA, p. 109)。encumbrar は「高く上げる」、「称揚する」、「褒めたたえる」の意味。44) que: これも関係代名詞とする。vid. v.43。45) ver 以下の句は v.44 の encombre の直接目的とする。ver の直接目的語は el invisible,

目的格補語は visible。「見えないもの (つまり神) を見えるもの (つまり神の子) として見ること」。44) allá: イエスが生まれたベツレヘムを指す。この作品の後半に牧人たちはベツレヘムに向かう。

訳 (v.41-v.45)

ファン もうおいら達に神の子がいるからにゃ
 ご難を受けて下さるのさ。
 驚かない者がいるだろうか？
 そちらでは称賛しない者がいるだろうか？
 神の子を見ているのにさ。

Lucas	Embió Dios embaxada a la Virgen con Graviel para en ella venir él, y luego quedó preñada.	46 49
-------	--	----------------------

46) embió: →envió (<enviar)。主語は後続の Dios。46) embaxada: →embajada 「メッセージ」。embió の直接目的語。47) a la Virgen: embió の間接目的語。定冠詞と大文字で始まる語での la Virgen の表記で、通常聖母マリアのことである。この後 v.59 で名前が紹介されるので、ここでは「聖母に」。47) Graviel: →Gabriel。大天使ガブリエル。46-47) ここを分かりやすい語順にすると、Dios embió embaxada a la Virgen con Graviel。「神は天使ガブリエルでもって聖母にメッセージを送った」となる。48) この ella は v.47 の la Virgen をうける。él は神とも聖母の体の中に宿る神の子ともとれるが、三位一体の「聖霊」のことかもしれない。48) para には venir él が後続している。「目的」の意味が基本であるが、文脈を考慮して説明的に「結果」としてとらえる。49) preñada: 「妊娠した」。

訳 (v.46-v.49)

ルカス 神は大天使ガブリエルを遣いにして
 聖母にメッセージを送ったのさ。
 それで彼女に聖霊が下って
 そしてそのあと身籠ったのさ。

Dizen que estava turbada 50
del mensage nunca visto,
mas quedó muy confortada,
que esperaba ser llamada
la madre de Jesucristo. 54

50) dizen: →dicen。50) estava: →estaba。estava turbada の主語は la Virgen。51) mensage: →mensaje。51) del: この de は主題を導入する前置詞とする。「～に関して」。51) visto: mensage にかかっている ver の過去分詞である。ver には「見る」以外にも「経験する」の意味があるので、それを考慮して「聞く」とした。もちろん天使の出現を重視すれば「見る」の意味となろう。52) quedó: cf. v.49。52) confortada: <confortar 「励ます, 元気を回復させる」。53) esperaba: →esperaba。53) , que: porque に相当し, 理由の節を導入する接続詞と解釈すると, 「なぜならイエス・キリストの母と呼ばれるのを望んでいたから」となる。線過去の esperaba が用いられているので, v.52 の点過去の時点での状況を表現することにもなり, メッセージを聞く前から望んでいたと解釈できる。あるいはこの v.53 の, que を理由ではなく v.50 の que が導入する節と同等のはたらきで, 主動詞 dizen につなぐ用法と解釈すれば, v.53 の esperaba は過去の描写の意味とも取れなくもない。即ちメッセージを聞いた後, 降誕まで「望んでいた」となる。ただしこの解釈の場合には v.53 の que の前に等位接続詞 y が用いられていれば明確になる。第3の解釈としては

この, que を中世で多用された意味のない que とするものである。つまり理由でもなく, v.50 の dizen にもつながらないものであり, 本稿では「ついには望むようになった」の意味ととる。いずれにしても省略や語順の自由さがある韻文であることを考慮しなければならない。ちなみにこのルカスの発言は『ルカによる福音書』(1:26-1:28。以下、『ルカ』)に相当する箇所を扱っている。

訳 (v.50-v.54)

聞いたこともないお告げに
 おったまげたんだってさ,
 けれどもとつても勇気がわいて,
 ついには救い主^{キリスト}イエスの
 母と呼ばれることを望んだんだ。

Mateo	Con el dedo acertaría, que deve ser una esposa de Josepe, muy hermosa, essa tal que tal paría.	55 58
-------	---	----------------------

55) acertaría: <acertar 「言い当てる, 探し当てる」。55-56) ここは v.56-v.57 を挿入された部分ととり, v.58 の essa tal を v.55 の acertaría の直接目的語とする。主語は大天使ガブリエルではなくマテオとし, 過去未来を用いた条件文の帰結の用法とする。「私はそのように産んだその人を指で指し示して言い当てることが出来るだろう」。56), que: 先行詞は後続の v.58, essa tal。56) deve ser: deber (de) + inf. 「～に違いない」の用法。「そしてその人はヨセフの妻に違いない」。57) Josepe: 「ヨセフ, マリアの夫。[「スペイン語の」ホセ (José), ヘブライ語の Yoseph, Josep に由来] (PPCA, p.109)。58) essa tal: →esa tal。この tal は代名詞的に用いられる。58) que tal paría: この tal は副詞的に「そのように」。

未来と命令で相手の発言を促す用法も想定できる。即ち「さあ、言ってくれ」。67) , qu'es: →, que es。理由、或いは意味のない que。67) zagal: cf. v.28。67) de buen ardid: 「利発な (ingenioso)」(DRCR, p.15)。ardid は「策略」の意味。MED は 14~15 世紀の形容詞の意味として「抜けない (astuto)」, 「巧みな (mañoso)」, 「利発な (sagaz)」を挙げている。

訳 (v.66-v.67)

ルカス さあ、さあ、言ってくれよ、ファン、
頭の冴えてる羊飼いなんだからよう。

Juan	Digo, digo que Él es vid,	68
	vida, verdad y camino.	
	Todos, todos le servid,	70
	todos conmigo dezid	
	qu'Él es el Verbo divino.	72

68) digo: v.66 でルカスに言ってくれと言われ、「言うぞ」の意味と、I, v.149 と同様に「分かった」の意味ともとれる。68) digo que: 確言の意味。cf. I, v.136。68-69) 「これらは『ヨハネ』 15:1 [「わたしはまことのブドウの木、(…)]、及び 14:6 [「わたしは道であり、真理であり、命である」] の言葉である」(PPCA, p.110)。70) Todos: 呼格で「みんな (~せよ)」。70) le servid: servir は自動詞であることから、この le は間接目的格であり、leísmo ではない。71) conmigo: →conmigo。71) dezid: →decid。72) qu'Él: →que Él。72) Verbo: 「み言葉」。「三位一体の第二位 [キリスト]。語頭は大文字を用いる」(RAE)。

訳 (v.68-v.72)

ファン よし、言うぞ、その子はまことのぶどうの木であり、
いのちで、真理で、道なのさ。

みんな、みんな彼に従って
 みんなおいらと一緒に言ってくれ
 イエスは神のみことばであるってさ

Mateo Sí dezimos.
 Marco Sí dezimos. 73

73) 2人のセリフで一行をなす。dezimos: →decimos。

訳 (v.73)

マテオ ああ言うぜ。
 マルコ 言うともさ。

Lucas Assí digo yo también, 74
 que nacido es en Belén 75
 y de un ángel lo supimos. 76

74-85) この箇所は『ルカ』の 2:8-2:20 の「羊飼いたちの礼拝」に基づく場面である。74) assí: →así。74) también: →también。75) , que: 接続詞。v.74 の digo が主動詞。75) nacido es: 自動詞 nacer の現在完了で助動詞に ser を用いたもの。つまり es nacido という正確な語順が想定できる。主語は Él。76) de un ángel: 「一人の天使から」。76) supimos: 主語は「我々羊飼い」、つまりルカスとマルコのこと。

訳 (v.74-v.76)

ルカス それじゃあおれも言うぜ、
 ベツレヘムでその子が生まれたと
 おれたちは一人の天使から聞いたのさ。

Aunque gran temor huvimos 77
 y nos puso gran anteo,

だって天使の群れから

「お空の神に栄光を」の賛歌を聞いたんだぜ。

Sonavan con gran dulçor 82
 unos sonos agudillos
 de muy huertes caramillos
 al nacer del Redentor. 85

82) sonavan: →sonaban. 主語は v.83 の sonos。82) dulçor: →dulzor, 「甘美」, 「甘さ」。83) agudillos: agudo 「かん高い」に示小辞を用いた形式。84) huertes: →fuertes。85) Redentor: 「救い主」。イエス・キリストのこと。85) al nacer: 現代語では al+不定詞で同時性, 即ちここでは cuando nació 「生まれた時」に置き換えられる。ただし後続する要素 del Redentor が形容詞的要素であるので, この nacer は名詞的に nacimiento の意味とし 「誕生の時に」 ととらないといけないかもしれない。いずれの解釈でも訳に大差はない。尚, 『ルカ』のこの箇所では笛の音に関する言及は確認できない。

訳 (v.82-v.85)

冴えた笛の
 かん高い調べが
 甘美に響き渡っていたけど
 その時が ^{あがな} 贖い主の降誕だったんだぜ。

Juan Nació nuestro Salvador 86
 por librar nuestra pelleja.
 ¡O, qué chapado pastor,
 que morirá sin temor
 por no perder una oveja! 90

86-90) この箇所は『ヨハネ』10:7-10:18におけるイエスのいくつかの発言の翻案であることを考慮して読み進めていく。87) pelleja: librar 「解放する」の目的語。「毛皮」, 「羊皮」, 「命」の意味がある。ここは牧者が導く「羊の群れ」。「私たちの羊の群れを解放するために、救世主が生まれた」。88) chapado: I, v.37 では「品行方正」と解釈した。ここでは『ヨハネ』の「良い牧者」の意味とする。90) por: 目的の意味とする。「羊を失わないように」。89-90) 「(彼は) 羊を失わないように恐れずに死ぬだろう」。同じく『ヨハネ』, 10:11, 10:15, 10:18 が元になっている。

訳 (v.86-v.90)

ファン 我らが主の降誕は
 おいらたちのケモノを導くためなんだ。
 ああ、何とまあ立派な羊飼いなんだろう、
 一匹の羊も迷わせないために
 怖じずに死のうってえんだから！。

Lucas ¡Qué pastor tan singular 91
 te parece este donzel!
 Todos bivamos con él,
 que éste nos viene a salvar. 94

91) この行だけを訳すと「何と比類なき羊飼いか！」。92) donzel: → doncel. 生まれたばかりのイエスを指す。91-92) ここは1つの文であり、核となる動詞は v.92 の parece. この parecer は主語、主格補語、間接目的格代名詞の3つの項をとっている。それぞれ v.92 の este donzel が主語、間接目的格代名詞は te, v.91 の行全体が、やや変則的であるが主格補語とする。92) te: 「お前に」。ここでのルカスの前に発言したファンに対しての言葉である。つまり「『ヨハネ』においては」の意味。93) bivamos: → vivamos. 93) todos: 後続の bivamos から判断して、呼び

渡すのさ。

Mateo Miafé, con Él nos uñamos, 100
que su yugo es muy suave
y su carga no es muy grave,
mas muy leve, si miramos:
si de gana la tomamos,
gran gasajo sentiremos. 105

100-103) この箇所は『マタイ』11:30 が元になっている (PPCA, p. 111)。100) miafé: 「まぎれもない」。vid. *I*, v.7。100) nos uñamos: → nos unamos < unirse 「互いに結び付く」。「-n- の口蓋化を伴う。牧人の発話で多用」(PPCA, p.111)。MPL (§8.2.) は語頭、あるいは音節頭の l- の硬口蓋音化をレオン方言の特徴として挙げている (cf. *I*, v.153)。それと類似の現象として、MPL (§8.3.) 及び ZVD (p.130) は、語頭の n- の硬口蓋音化もレオン方言の特徴としている。101) , que: 理由の節を導入する接続詞。101) yugo: 「くびき」。102) su carga: 「彼の [つまりイエスの] 荷」。103) si miramos: 「もし見ることができれば」。104) la: v.103 の carga を受ける。105) gasajo: ここでは「喜び」。vid. v.79。sentiremos の直接目的語。

訳 (v.100-v.105)

マテオ そうともさ、イエスとともにおれたちは繋がるのだ、
だって彼の^{くびき}軛はとてもやわらかく
そして彼の荷はあまり重くない、
いやむしろ軽いんだ、もし見えればだけど。
もしよろこんでその荷を受ければ、
おれたちは大きな喜びを感じるだろうさ。

「それらの予言はその子のことを言っている」ととる。vid. v.17. 109-112) las profecías que (relat.) dicen que (conj.) aquellos profetaron 「あの者たちが予言したと言っている予言」。aquellos を先行詞とする関係節は v.111-v.112 の que (relat.) pernunciaron la venida de Mexías 「救世主の到来を告げた」。110) dicen: → dicen (<decir)。110) profetaron: 主語は v.111 の aquellos。「profetizaron (<profetizar 「予言する」) のこと。韻律を合わせるために用いられた古形」(PPCA, p. 111)。111) pernunciaron: レオン方言の特徴である接頭辞の per- を用いて意味を強化した形式。現代語の anunciar。cf. I, v.41。112) Mexías: → Mesías 「メシア」, 「救世主」, 「イエス・キリスト」。113) cuyas carreras y vías: cuyas の先行詞は v.112 の Mexías。vía は「道」, carrera は現代語では「職業」, 15世紀には「生活の様式」(MED) といった意味もあるが、ここは『ヨハネ』の方の「洗礼者ヨハネの証し」(1:23) の箇所に説明を求め、どちらも「道」とする。114) d'Él: → de Él。114) aparejava: → aparejaba < aparejar 「準備する」。先行する v.113 が直接目的語であるので、las を補って las aparejaba と捉える。主語は v.115。115) el hijo de Zacarías 「ザカリアの息子」, 即ち「洗礼者ヨハネ」のこと(『ルカ』1:5-1:66 に詳しい)。洗礼者ヨハネも福音書記者のヨハネと同様、スペイン語では Juan 「フアン」である。この後 v.116 で牧人の Juan に呼び掛ける箇所があり、その区別のため洗礼者ヨハネを「ザカリアの息子」と呼んだととる。116) boz: → voz。116) dezías: → decías。116-117) 全体が v.115 と同格で説明している。la boz que (relat.) tú dezías que (conj.) en el desierto clamava (→ clamaba) 「砂漠で叫んでいたと君が言っていた声」。

訳 (v.109-v.117)

マルコ ^{メシヤ}
 救世主の到来を
 告げた者たちが

予言したと言っている
その予言ってのは、その子のことだぜ、
メシアの行く道は
「彼」が現れる前に
ザカリアの息子が準備していたんだ、
フアンよ、おめえが「砂漠で叫んでた」
って言ってた「声」ってやつだぜ。

Aquel que nos predicó	118
que vernía después dél	
otro más valiente qu'él,	120
que es aqueste que oy nació.	121

118-120) ここでの *aquel* と *él* は洗礼者ヨハネを指す。118) *Aquel*: *es* が省略されたものとする。即ち, *es aquel que* 「それは *que* 以下をしたものである」。118) *predicó*: <*predicar*。現代語では「説教する」, 「諭す」, 「いさめる」, 14-15 世紀には「公表する」, 「明らかにする」(MED) という意味もあり。119) *vernía*: *venir* の過去未来形。用法も過去から見た未来。vid. *I*, v.70。119) *dél*: →*de él*。120) *otro*: v.119 の *vernía* の主語, イエスのこと。120) *valiente*: 「すてきな」, 「すばらしい」, 「ひどい」, 「すごい」(TSW)。120) *qu'él*: →*que él*。比較の対象。121) , *que*: 関係代名詞, 先行詞は v.120 の *otro*。121) *aqueste*: 「*este* の古形」(TSW), 「詩で用いられる形式」(RAE)。イエスを指す。121) *oy*: =*hoy*。

訳 (v.118-v.121)

その人なんだぜおれたちに
自分のあとに自分よりもっとすごい
別なのがあるだろうって教えてくれたのは、
それが今日生まれたその子のことだぜ。

Y este mesmo le embió,	122
yo le vi por nuestra aldea,	
y aun él dixo: “No so yo	
ni menos soy dino, no,	125
de desatar su correa.”	126

122) este mesmo: →este mismo 「まさにこの人」。文脈から判断して v.121 の *aqueste*, つまりイエスのこと。122) *le embió*: →*le envió*。le はレイスマで、洗礼者ヨハネを指す。v.123 の *le* も同様。124) *dixo*: →*dijo*。124) *so*: 「*soy* [のこと]」。当時の言葉では [*so* と *soy* の] 両方の動詞形式が交替していた。*so* はレオン方言で保存されていたようである」(PPCA, p.112)。ちなみに *so* は現在標準アストゥリアス語(文法化されたレオン方言)にも認められた形式である。cf. GRAM, p.202。124) *no so yo*: 「私ではない」。洗礼者ヨハネが自身がメシアでないことを述べた福音書の場面(『ヨハネ』1:19-1:28, いわゆる「洗礼者ヨハネの証し」)に対応している。125) *ni menos*: 現代語では *ni mucho menos* は否定の強調として用いられているが, *ni* は否定の列挙, *menos* を「むしろ～ない」(TSW)と分けてとらえる。「[メシアは] 私ではなく, それどころか私は [v.126 の *de* 以下の] 価値もない」。125) *dino*: 「形容詞, 古語, *digno* のこと。今日では俗語」(RAE)。126) *desatar su correa*: *su* は「イエスの」, *correa* はただのひもではなく履き物のひも。

訳 (v.122-v.126)

そしてまさにその子的那个人を遣わせたので
うちの村でおいらその人を見かけたんだ。
で、おまけにこんなこと言ってたよ、「私ではない
それどころか私は、
あのお方の靴ひもを解く資格もない」ってね

(Marco)⁽⁷⁾ Quísole Dios embiar 127
 delante por mensagero,
 porque pudiesse primero
 todo el hato recordar. 130

127-130) この箇所も「洗礼者ヨハネの証し」の翻案。127) Quísole Dios embiar: →Dios quiso enviarle. le はレイスモで洗礼者ヨハネを指す。128) delante: 「前に」, 「正面に」。この作品では牧人たちが自分たちの村で洗礼者ヨハネを見たという話になっている。128) por mensagero: mensagero: →mensajero. por は資格の意味「～として」。即ち「使者として」。129) , porque: 後続する節に接続法が用いられているので, 目的の para que の意味にとる。129) pudiesse: →pudiese. 129-130) porque todo el mundo pudiesse recordar ととる。130) hato: 「牧群」, 「牧者の飯の泊まり場」(TSW)。130) recordar: 「目覚めさせる (despertar)」(DRCR, p.19)。

訳 (v.127-v.130)

神様はその人を使者として
 おいらたちの前に送りたいかったんだな,
 だってまず群れ全体を
 起こすためによろ。

Juan Vino al mundo a predicar 131
 de Cristo, por su mandado,
 para testimonio dar. 133

131) vino: 主語は「洗礼者ヨハネ」。132) de: 「～について」。133) su:

(7) 本稿が底本とした PPCA は, この v.127-v.130 の台詞をカッコつきでマルコのものとしているが, 特にそれに関するコメントは確認できない。DRCR はこの箇所をマルコの台詞としている。本稿は底本の表記に従った。

だって他のやつが 5000 個のパンでするよりも
その子は 5 個のパンだけで
それより多くの牧人頭を満腹にするだろうからね。

Lucas	Mateo, si no revellas	145
	y te percude cariño,	
	vamos a ver aquel Niño	
	qu'es de las cosas más bellas.	148

145) revellas: PPCA (p.112) は、「反抗する (te rebelas), 抵抗する (te resistes), 意地を張る (te obstinas)」の意味を挙げている。このうち te rebelas は、レオン方言の特徴である l の硬口蓋音化を伴った revellas との対応を想定させる (ただし revelar 「明らかにする」とは別)。MED によると revellar は「抵抗する (resistirse), 起き上がる (levantarse)」。DRCR (p.18) は v.145 について「もしお前がびっくり仰天していなければ (si no te quedas pasmado)」の解釈を挙げている。マテオは v.100-v.105 が最後のセリフであった。146) te percude cariño: 現代スペイン語 (RAE) では percude (<percutir) は、「何かに汚れを染み込ませる (penetrar la suciedad en alguna cosa)」の意味。MED には 15 世紀のレオン方言の用法として「心配させる (preocupa)」とあり。PPCA (p.113) は「叩く (golpea), 揺する (sacude)」。「生じる (sobreviene)」の意味も挙げており、それに従えば「君に親愛の情が生じれば」となる。CRDR は v.146 を「そして君が親愛の情を感じていれば (y te sientes cariñoso)」としている。RAE は percutir の語源をラテン語の percutere としており、LLJ ではその語義として 1. 穴をあける (…), 2. 激しく揺り動かす (…), 4. 傷つける (…), 6. 感動させる, 心を動かす, 心を捕える, を挙げている。これらのことから v.147 の percutir の用法が特にレオン方言的ということでもなさそうである。147) Niño: 幼子おきなごイ

エスのこと。148) qu'es: →que es。この que は関係代名詞。148) この行を直訳すると「最も美しいものに属す [ところの]」となるが, cosas は形容詞 bellas の意味を修飾する要素ととり, 「もの」とはせず「とても美しい (幼な児)」。

訳 (v.145-v.148)

ルカス マテオ, もしお前がいやじゃなくて
可愛いなと思うなら
とても美しい
その幼な児を見に行こうぜ

Mateo	Y tú, Juan, que las estrellas	149
	oteas de hito en hito,	150
	ven, verás la mayor dellas,	
	luzero de las donzellas,	
	con su hijo tan bendido.	153

149) , que: 説明の関係節を導入する関係代名詞。核となる動詞は v.150 の oteas, v.149 の las estrellas はその直接目的語。150) oteas: <otear. cf. v.26. 150) mirar de hito en hito で「じっと見つめる」の意味。v.25-v.27 で, フアンは「高い所から遠くを見ていた」とある。151) la mayor: estrella 「星」を指す。151) dellas: →de ellas. ellas も estrellas を指す。152) luzero: →lucero 「金星, 大きく輝く星」。152) donzellas: →doncellas 「乙女たち」。「乙女たちの中で最も輝く星」, 即ち聖母マリアのこと。153) bendito: 「祝福された」。

訳 (v.149-v.153)

マテオ それじゃフアン, 星を
さっきからじっと見つめているけど,
来いよ, 一番でかいのが見られるぜ,

乙女たちの中でもびか^{いち}いで、
祝福された息子と一緒にのがよ。

Lucas	A Belén vamos, zagales,	154
	que allí dizen que ha nacido	155
	en un pesebre metido,	
	embuelto en unos pañales;	
	entre brutos animales	
	quiso venir a nacer	
	en tan crudos temporales.	160
	Por pagar bien nuestros males	
	ya comienza a padecer.	162

154) zagales: 「若者たち」の意味であるが、羊飼いたちに対する呼びかけ。尚、ここがルカスのセリフであることから分かるように、ここは『ルカ』(2:8-2:20)にある羊飼いの礼拝の場面である。155) , que: 理由の節を導入する接続詞として用いられている。155) dizen que ha nacido: dizen→dicen。v.76に「おれたちは一人の天使から〔誕生を〕聞いた」とあるので、ここの dizen は無人称ととる。ha nacidoの主語は示されていないが、v.147の Niño。156) metido: meterの過去分詞。直前の pesebreにかかるとはならず、v.155の ha nacidoの主語にかかると主格補語。158) pañales: 現代語では、「おむつ」、(特に複数で)「産着」の意味。MEDでは「乳児を包む布(15世紀)」。尚この2つの主格補語、v.156の metido、v.157の embueltoは、時系列を考慮して、「生まれた、そして布に包まれて、飼葉おけに入った」と解釈する必要がある。159) quiso venir a nacer: 贖いのために、敢えて動物たちや悪天候の中で生まれてきたというニュアンス。160) crudos temporales: 「激しい嵐」。いずれの福音書にも言及されていない。161) pagar: 「贖う」の意味。161) males: v.34

貧しさの何たるかを教えてくださってるんだ。

Nunca fue tan gran pobreza 167
para hijo de tal padre.
Aballemos sin pereza,
vamos a tomar barveza 170
y a gasajar con su madre. 171
Fin

167) fue: <ser, 存在の意味の一般動詞ととる。主語はこの行の tan gran pobreza。「そんなひどい貧しさは決してなかった」。168) この行は「そのような父親の息子にとっては」の意味であるが, hijoの前にも tal を補い, 多少ニュアンスは異なるが, 「父親にとっても息子にとっても」の意味ととる。169) aballemos: <aballar, 「歩きましょう (caminemos)」(PPCA, p.113)。尚, I, v.35 では他動詞として用いられていると解釈できたが, ここでは自動詞として使用。169) pereza: 「遅さ, 怠惰」。170) barveza: 「意味の明瞭でない語。おそらく何らかの食事の一種 (…)」(PPCA, p.113)。「羊肉を用いた煮物」(DRCCR, p.19)。171) gasajar: 「他動詞, 15世紀, もてなす, 歓待する ([現代語の] agasajar)」(MED)。cf. v.79。尚この行について DRCCR は “y a celebrarlo con su madre” (「そして彼の母とともに彼 [の誕生] を祝いに [行こう]」) (p.19) とし, celebrarlo と直接目的格代名詞を補って解釈している。

訳 (v.167-v.171)

その幼な児にとっても, お父っつぁんにとっても
かつてないほどの貧しさでさあ。
ぐずぐずしないで行きましょう,
羊の煮込みを食べに
そしてそのおっ母さんと彼にお祝いを言いにさあ。

おわり

Mateo	De los primeros seremos vamos, vamos, vamos, Juan.	172
Lucas	Bendidos los que verán lo que nosotros veremos.	175
Marco	Aballemos, aballemos, y no estemos anaziados.	
Juan	Mas dad acá, respingüemos y dos a dos cantiquemos porque vamos ensayados.	180

172) 語順を Seremos de los primeros. と捉える。primero は人を表す名詞, 即ち「[幼な児の誕生に立ち会う] 最初の人たち」。de は全体の一部を意味する用法。「私たちは最初の人たちのうちの一部となるだろう」。

173) v.149 以下においてもマテオはフアンに呼び掛けている。この 2 人は *I* に引き続き, この作品にも出演している。174) benditos: bendecir 「祝福する」の過去分詞, 「祝福された」。ただしここは感嘆文としての用法ととり, *¡Que sean benditos los que verán... (!)* と補って解釈する。即ち, 「[v.175 を] 見るであろう者たちは祝福されるように」。175) この行 lo que 以下は, v.174 の verán の直接目的語, 「私たちが見るであろうことを」, 即ち幼な児の誕生のこと。176) avallemos: 1 人称複数の肯定命令形, 「歩きましょう」。vid. v.169。177) この行は 1 人称複数の否定命令, 「anaziados の状態にいるのはやめましょう」。177) anaziados: 「遠い (alejados), 離れた (apartados)」(DRCR, p.19)。「enaciados [に同じ, 即ち], 「離された」, 「群れから遠い所にいる」, これ [=anaziados] はフアン・デル・エンシーナの作品の, 田舎風の言葉の中に残っている古形」(PPCA, p.114)。anaciados という語は MED に記載がある。

即ち「13世紀，形容詞，enaciado, tornadizo, renegado [と同義]」。enaciado について RAE は「古形，形容詞，「移り気な」(tornadizo)，「改宗者」(elche)，「背教者」(renegado)」としている。この anaziados (現代の表記では anaciados) について DRRCR, PPCA の解説を適用するならば，v.176-v.177 は「歩きましょう，歩きましょう，そして [羊の群れからは] 離れないでいましょう」となる。ただし v.177 の y を逆説の意味にとり，「だけど離れないでいましょう」ともなり得る。羊飼いなので，当然羊も連れてイエスの誕生した小屋を訪ねることなのだろう。

178) Mas dad acá: 「だけどここで [エサを] 与えなさい」。dad は現代スペイン語と同じで，dar の 2 人称複数の肯定命令。mas は現代スペイン語では文語で pero と同義の反意接続詞である。PPCA, DRRCR いずれの版も無強勢の mas であるが，もし más であるとすれば，「ここでもっと沢山 [エサを] あげなさい」の意味になる。ちなみに mas も más も語源はラテン語の副詞 magis で，この語には「さらにもっと」，「むしろ」の意味があった。178) respingemos: <respingar. この語には「(動物が) うなりながら身もだえする」(TSW)，等の意味があるが，PPCA (p.114)，DRRCR (p.19) では，いずれも「跳びましょう (saltemos)」としている。

179) dos a dos: 名詞+a+同一名詞の用法で，ここは「2人ずつ」の意味。179) cantiquemos: <cantar, 「自動詞，15世紀，歌う (cantar) [に同じ]，他動詞としても用いられた」(MED)。

180) porque vamos ensayados: 現代のスペイン語をあてはめてそのまま解釈すれば，ここは「我々は練習してあるので」となろう。ir+過去分詞で「状態」の用法がある。porque の前にコンマ (,) を補えば，説明的に「何故なら我々は練習してあるからだ」となる。ただしこの vamos について DRRCR は，接続法の vayamos の意味としており (p.19)，その場合 porque は目的の para que の意味となる。更に状態の迂言形式の意味を排除し本来の「行く」の意味を用いるとすれば，ensayados は副詞的意味を伴う主格補語

ととれる。即ち「[我々は] 練習して [ベツレヘムに] 行くために」。

訳 (v.172-v.180)

マテオ	俺たち一番乗りかもな。 さあ、行こうぜ、フアン。
ルカス	おいらたちが見る光景を 見る者たちは祝福されよ、だ。
マルコ	歩こうぜ、歩こうぜ、 だけど羊は放っとけないな。
フアン	だったらここで食わしときなよ、 さ、2人づつ跳ねて歌おうよ 稽古しながら行くためにさ。

Villancico⁽⁸⁾

Gran gasajo siento yo.	181
¡Huy, ho!	
Yo también, soncas, ¿qué ha?	
¡Huy, ha!	
Pues Aquel que nos crió	185
por salvarnos nació ya.	
<i>¡Huy, ha! ¡Huy, ho!</i>	
<i>Que aquesta noche nació.</i>	188

(8) 現代のスペイン語では villancico は「クリスマスキャロル」を指すのが普通である。RAE はこの語が villano (「平民」, 「村人」) に由来するとし、その 1 の定義として「畳句 (estribillo) を頻繁に用いる短い民謡」としている。この作品が作られた 15 世紀末は、villancico の主題は未だクリスマスだけに限定されていなかったと想定される。ちなみにこの villancico には、フアン・デル・エンシーナ自身の作曲によるメロディーがあるが、Jones, R. O. *et al.* (1975), pp.369-370 でその楽譜を確認することが出来る。

181) gasajo: 「喜び」, 「細やかさ」等の意味があるが, v.79 では「贈り物」と解釈した。ただしここはイエスのこと。cf. v.171。181) siento: <sentir 「感じる」だが, 先行する gran gasajo が目的語であるので, 「予感する」の意味ととる。182) ¡Huy, ho!: いずれも驚き, 感嘆の間投詞とする。即ち ho=oh。183) tanbién: =también。183) soncas: 「本当に (en verdad)」, 「確かに (por cierto)」, PPCA (p.97), vid. *I*, v.2。183) ¿qué ha?: この ha は次の v.184 の ha と同形であるが, 疑問文であることから haber の 3 人称単数の活用形であると想定される。その場合この ha は完了時制の助動詞としては用いられておらず, 15 世紀に tener と交替し始めるまで, 本来有していた「持つ」の意味の一般動詞の用法であると想定できる。qué はその直接目的語で, 「[彼は] 何を持つのか」という意味が考えられる。ただし haber の 3 人称単数には無人称の用法 hay がある (v.5, v.6, v.7 では ay の表記)。場所の副詞 allí に相当する語末の -y は, CDCE によれば存在する場所が明示されている場合には省略されることがあった。v.183 の ha が無人称の用法であれば, 「何があるのか」の意味。ついでに言えば現代のスペイン語で ¿Qué hay? は挨拶で, 「調子はどうか」の意味で用いられる。184) ha: この ha は肯定の意味の間投詞ととる。vid. v.4, *I*, v.142。185) pues: 理由の節を導入する接続詞。185) Aquel que nos crió: ここの指示形容詞 aquel は指示代名詞 aquél と同等の役割を担っているが, 直示 (前方照応) の機能を有していないことから, 指示形容詞 Aquel に後続する名詞が省略されているととらえ, それが v.185 の関係代名詞 que の先行詞, 更に v.186 の nació の主語であるとする。PPCA, DRRCR いずれの版でも大文字で転記されていることから, Él が「神」を意味する場合と同様に, Aquel はそれに後続する名詞は特に特定しなくても「あのお方 (=神)」の意味で用いられていると解釈できる。vid. v.114。crió<criar。ここは crear の意味。criar と crear は現代のスペイン語では意味を区別しているが, 両者の語源は同

じラテン語の *creäre* である。しかし *crear* は教養語であり、CDCE によれば黄金世紀 (Siglo de Oro, 16~17 世紀) においても *criar* の方が優勢であった。185-186) この箇所は「というのも我々を創造したそのお方は、我々を救済するためにすでに生まれた」となろう。v.186 の *por* は目的の意味 (=para)。188) *Que*: 理由の節を導入する接続詞。188) *aquesta*: 指示形容詞 *esta* に相当。vid. I, 前書きの 3 番目の文。188) *nació*: ここは完了形の *ha nacido* が用いられるべきであるが、MPL (§ 21.1.) はアストゥリアスを中心とするレオン方言域のいくつかの場所において、完了時制が欠如している旨挙げている。GRAM にも完了時制は記載されていない。ただここはレオン方言が反映されたものではなく、韻の関係で点過去が用いられている可能性も否定できない。vid. v.155. cf. v.9, v.137。

訳 (v.181-v.188)

ビリャンシーコ

すばらしい贈り物なんだろうな。

ウイ、オー！

確かにおいらもそんな気がする、何があるんだろう？

ウイ、アー！

だって俺たちを創造した神が

俺たちを救済するためについに生まれたんだよ。

ウイ、アー！ ウイ、オー！

だって今夜生まれたんだから。

Esta noche, al medio della,	189
quando todo estava en calma,	190
por nos alumbrar ell alma	
nos nació la clara estrella,	
clara estrella de Jacó.	

¡Huy, ho!
Alegrar todos, ahá. 195
¡Huy, ha!
Pues Aquel que nos crió
por salvarnos nació ya.
¡Huy, ha! ¡Huy, ho!
Que aquesta noche nació. 200

189) al medio della.; della→de ella, 先行する女性名詞 *noche* を指す。即ち, a la medianoche 「真夜中に」の意味。190) quando: →cuando。190) estava: →estaba。191) , por nos alumbrar ell alma: →, por alumbrarnos el alma。nos は間接目的格で el alma が直接目的語, この行の por は目的の意味 (=para), 「私たちの魂を照らすために」。MPL (§ 20.3.) は不定詞に前置詞又は que などの接続詞が先行する際に, 無強勢代名詞が不定詞に先行する位置 (後接) で用いられる現象が, 14 世紀から 16 世紀にかけてのスペイン語の文語で用いられている旨指摘している。つまりこの作品の時代には, レオン方言的とは言えない。cf. *I*, v. 120。191) ell: →el。cf. *I*, v.49。192) nos nació la clara estrella: この nos も間接目的格, la clara estrella は主語。「私たちに明るい星が生まれた」。189-193) この箇所について PPCA (p.20) は, 「星 (estrella)」は東方三博士 (Los Reyes Magos) が目指したもの (『マタイ』2:2-2:10) でもあり, 『ヨハネの黙示録』(22:16) の「明けの明星」(キリストのこと) でもあるとしている。v.193 の estrella de Jacó は, 『民数記』(24:17) の「ヤコブの星」のことで, キリスト出現の予言とされるものの一つ。195) alegrar todos: v.191 で用いられている目的の意味の por を補って捉える。todos は目的語で, 「皆をよろこばせるために」。195) ahá: →ahao。「間投詞, 離れているところにいる者を呼ぶための方法, [古典] ラテン語の heus [間投詞, (注意を引く叫び), 「おーい」, 「ほら」, 「そら」] に由来

¡Huy, ha! ¡Huy, ho!

Que aquesta noche nació.

212

201) lugar:「都市 (ciudad), 町 (villa) あるいは村 (aldea)」(MED)。Belén についての説明として挿入された句。202) claror:「輝き, 明るさ」(TSW)。202) relumbrea: →relumbra (<relumbrar「過度に輝く」)。主語は先行する claror, 「とても偉大な光が, 過度に輝いている」。203) yo te juro que:「私は que 以下を誓います」。que 以下の従属節は v.204。203) esta aldea:「この村」, ベツレヘムのこと。esta の前に前置詞 en を補ってとらえる。204) todo el mundo:「[ベツレヘムの] みんな, 全ての人」。204) ha de sonar: haber de+inf. で「～しなければならない」だが, ここでは未来の意味とする。この sonar は soñar と読み替える。即ち v.204 は「全ての人たちが夢を見るであろう」と解釈することにする。205) , porque tal fruto nos dio: tal fruto「そのような果実」が 3 人称単数の dio の主語ととれなくもないが, ここは直接目的語ととる。nos は間接目的格で「私たちに」, 即ち「何故なら [彼は] 私たちにそのような幼な児を与えたからです」となる。ただし dio の主語が特定できないので, この行は, porque tal fruto nos lo *dieron* と無人称の文と読み替える。「何故なら私たちはそのような幼な児を与えられたからです」。207) Gran onra se le daría: onra→honra。gran onra を主語ととれば, se は受け身。le は間接目的語であり, その指示内容は v.204 の todo el mundo が「人」を意味するので該当しそうであるが, v.205 の tal fruto を幼な児ととらえるので, le は幼な児イエスを受ける。「彼 (=イエス) には大きな榮譽が与えられるだろう」。

訳 (v.201-v.212)

われらの町, ベツレヘムにや,
とてつもなくまばゆい光がきらめいてるよ,
お前に誓ってもいいけどそこじゃ

誰もが夢を見るだろうよ、
 だってこんな果実をもらったんだよ。
 ウイ、オー！
 その子は立派な榮譽をもらうのさ。
 ウイ、アー！
 だって俺たちを創造した神が
 俺たちを救済するためについに生まれたんだよ。
 ウイ、アー！ ウイ、オー！
 だって今夜生まれたんだから。

Una virgen concibiera	213
sin simiente de varón,	
y virgen sin corrución	215
al Hijo de Dios pariera,	
y después virgen quedó.	
¡Huy, ho!	
Gran memoria quedará.	
¡Huy, ha!	220
Pues Aquel que nos crió	
por salvarnos nació ya.	
¡Huy, ha! ¡Huy, ho!	
Que aquesta noche nació.	224

213) virgen: この語には処女と聖母マリアの意味があるが、ここは v.13 と同様に前者の意味とする。「一人の乙女が」。213) concibiera: <concebir 「妊娠する」の接続法過去で、-ra 型の場合、直説法過去完了 (この場合は había concebido が対応) の意味で用いられることがある。この用法は現代のスペイン語でも文語で用いられることがあるが、中世の

スペイン語の特徴でもあり、この箇所が特にレオン方言の特徴が反映しているとは言い切れない。cf. v.188. 215) *corrución*: → *corrupción*. 216) *pariera*: < *parir*, 接続法過去, *vid.* v.213, 「産む」, *vid.* v.13. 主語は v.215 の *virgen*, 先行する *al Hijo de Dios* が直接目的語であり、前置詞 *a* を伴う。217) *virgen*: v.215 の *virgen* は主語の機能を担っているが、こちらは *quedar* の主格補語で「*virgen* のままであった」の意味、即ち形容詞の意味ととる。したがって *ella quedó virgen* とする。「神の子を産んだが *virgen* のままであった」。ちなみに DRCR 版では v.215 と v.217 においては *Virgen* と大文字で転記し、「聖母」の意味を表している。cf. v.47. 219) *Gran memoria* が *quedar* の主語。v.217 と同じ *quedar* が用いられているが構文は異なり、本来の「残る」の意味ととる。間接目的格代名詞を伴い、*Gran memoria nos quedará* とし、「(我々に) 偉大な記憶が残るであろう」とする。

訳 (v.213-v.224)

一人の乙女が身籠ったよ
子種もなしにさ、
そして穢れなき乙女は
神の子を産んだのさ、
そしてその後は乙女のままだった。
ウイ、オー！
偉大な記憶として残るだろうよ。
ウイ、アー！
だって俺たちを創造した神が
俺たちを救済するためについに生まれたんだよ。
ウイ、アー！ ウイ、オー！
だって今夜生まれたんだから。

Una virgen de quinze años, 225
 morenica, de tal gala
 que tan chapada zagala
 no se halla en mil rebaños:
 nunca tal cosa se vio.
 ¡Huy, ho! 230
 Ni jamás fue ni será.
 Pues Aquel que nos crió
 por salvarnos nació ya.
 ¡Huy, ha! ¡Huy, ho!
 Que aquesta noche nació. 235

225) quinze: → quince 「15」。新約聖書のいずれの福音書にも、イエスの誕生時の聖母の年齢への言及はない。「聖母の年齢は外典の福音書 (Evangelios apócrifos) に基づくデータである」(DRCR, p.21)。ただし外典の福音書の一つである『ヤコブ原福音書』(12:3)は16歳としている。13世紀にヤコブス・デ・ウォラギネによって著された『黄金伝説』(Voragine, Jacobus de 著, 前田敬作他訳 (2006), 『黄金伝説 3』)は、「聖母は14歳のときおん子のみごもられ、15歳でご出産になり (…)」 (§ 113, p.200)としている。226) morenica: moreno 「(肌が) 浅黒い, (髪が) 黒い」に示小辞 -ico が付いた形式, 女性形。226), de tal gala: v.225 の名詞句 una virgen を修飾する3つの要素は, v.225 の de quinze años, v.226 の morenica, そして3番目はこの, de tal gala 以下である。I, v.50 で de gala を「晴れ着姿で」としたが, ここは RAE の定義する gala の “5. Lo más esmerado, exquisito y selecto de una cosa” の意味でとる, 即ち, 「洗練, 風格」。227) chapada zagala: v.88 で chapado pastor を「立派な羊飼いか」とした。それに倣えば chapada zagala は「立派な若い娘」。cf. I, v.137. 226-227) ここは tal A que B 「それほど A

なので B (する)」の構文を適用する。B は節であるので定形の動詞を補い、*de tal gala que es tan chapada zagala* 「それほどの風格であるので、立派な若い娘 [である]。この箇所は v.225 の *una virgen* を修飾する 3 つの要素のうちの 1 つ。228) *se halla*: <hallarse (=estar)。主語は v.225 の *una virgen*。即ち、*una virgen no se halla en mil rebaños* 「[3 つの修飾語句のつくそのような] 乙女は千の群れの中にも見い出せない」。rebaño は「羊の群れ」, 「信徒」の意味がある。これは人の台詞であり、イエスが「良い牧者」であることの例えは v.88 で言及した。229) *nunca tal cosa se vio*: I, v.176 でこれとそっくりな *nunca tal amo se vio* があり、「このように立派な主人は見ることがない」と解した。verse に「見える」, 「ある」の意味があり、*se vio* を無人称ととらえ先行する *tal amo* を直接目的語とした。*tal amo* が主語だと「人」なので、再帰受動文の主語にはならないからである。この v.229 の *tal cosa* 「そのようなもの」は、*se vio* の主語、直接目的語いずれの解釈も可能である。ただしその意味内容がはっきりしないが、rebaño を受けると解釈することにする。「[そのような娘のいる] そのようなところ [=群れ] は見たこともない」。231) *Ni jamás fue ni será: ni A ni B* で「A も B も (～ない)」。2 つの動詞 *fue* と *será* は、*ser* の一般動詞の用法「存在する」, 主語は v.229 の *tal cosa*, つまり「群れ」とする。「そのような所はかつて存在しなかったし、[これから将来も] 存在しないだろう」。

訳 (v.225-v.236)

15 歳で、黒髪で、
凛々しく
立派な娘である乙女なんか
千の群れを探したっていやしない。
そんな群れなんかかつてなかったよ。
ウイ、オー！

かつてなかったし、これからもないだろうよ。
 ウイ、アー！
 だって俺たちを創造した神が
 俺たちを救済するためについに生まれたんだよ。
 ウイ、アー！ ウイ、オー！
 だって今夜生まれたんだから。

Vámonos de dos en dos,	237
aballemos a Belén,	
porque percancemos bien	
quién es el Hijo de Dios:	240
gran salud nos embió.	
¡Huy, ho!	
En Belén dizen que está.	
¡Huy, ha!	245
Pues Aquel que nos crió	
por salvarnos nació ya.	
¡Huy, ha! ¡Huy, ho!	
Que aquesta noche nació.	248

Fin

237) *Vámonos*: <irse. 237) *de dos en dos*: *en* を様態の意味とし、v.179 の *dos a dos* と同義とする。「2人ずつ」。238) *aballemos*: <aballar, 接続法現在 1 人称複数, 「向かきましょう」。a+場所が後続することからも分かるように、ここでも自動詞として用いられている。cf. v.169。239) *porque percancemos bien*: *percancemos* (<*percanzar*) が接続法であることから、この接続詞 *porque* は目的の意味の *para que* に相当

する。vid. v.129. 239) percancemos: 「alcancemos [(<alcanzar) に同じ], 牧人の語彙形成で良く用いられる強めの接頭辞を伴う, I, v.41 を見よ」(PPCA, p.116)。percanzar に関する RAE の定義: 「他動詞, 古語, 到達する (alcanzar), 触れる (tocar), 理解する (comprender)」。alcanzar について同じく RAE は, al- の部分がアラビア語の定冠詞の影響によるものだとしている。240) quién es el Hijo de Dios: 主動詞を v.239 の percancemos とする間接疑問文である。従って v.239-v.240 は「誰が神の子であるかをきちんと理解するために」の意味となる。241) gran salud nos embió: →él nos envió gran salud。salud は「救済 (salvación)」(RAE) のことでイエスのこと, 動詞 embió の直接目的語である。主語は v.240 の Dios。243) En Belén dicen que está: dicen→dicen, 無人称。está の主語は v.241 の el Hijo de Dios, つまりイエスのこと, 「ベツレヘムにいとわられている」。

訳 (v.237-v.248)

2人ずつ行きましょう,
ベツレヘムに向かって,
神の子が誰なのか
しっかりとこの目で確かめるためにさ,
立派な救いを送ってくれたものよ。
ウイ, オー!
ベツレヘムにいるんだってよ。
ウイ, アー!
だって俺たちを創造した神が
俺たちを救済するためについに生まれたんだよ。
ウイ, アー! ウイ, オー!
だって今夜生まれたんだから。
おわり

Ya rebulle la mañana,	249
aguigemos qu'es de día,	250
preguntemos por María,	
una hija de Sant'Ana,	
que ella, ella, lo parió.	
¡Huy, ho!	
Vamos, vamos, andá allá.	255
¡Huy, ha!	
Pues Aquel que nos crió	
por salvarnos nació ya.	
<i>¡Huy, ha! ¡Huy, ho!</i>	
<i>Que aquesta noche nació.</i>	260

249) rebulle: <rebullir 「(静かだった人やものが) 動き始める」。主語は後続の la mañana 「朝」。250) aguigemos: →agijemos (<aguijar), 自動詞として用いられており「歩みを進める」の意味。250) qu'es de día: →que es de día。この que は理由の意味を伴う接続詞ととる。es は時間を意味する単人称動詞の用法, 「昼間である」。252) una hija de Sant'Ana, : この行は v.251 の María について説明する挿入句。Sant'Ana: →Santa Ana, 「聖アンナ [= アナ] は聖母マリアの母」(DRCR, p.22)。253) , que: 意味のない単なるつなぎの接続詞。253) ella: どちらも María を受ける, ととる。253) lo: 「彼を」, 幼な児 (イエス) のこと。255) andá: andad (andar の 2 人称複数に対する命令) の語末の -d が欠如した形式。尚 DRCR の版は, ここをアクセント記号なしの anda で転記している。その場合は 2 人称単数に対する命令。

訳 (v.249-v.260)

もう朝になるぞ,
 明るくなっちゃうから急ぎましょう,

聖アンナの娘

マリアを訪ねましょう、

彼女こそがその幼な児を生んだのだ。

ウイ、オー！

歩け、歩け、そこへ行くぞ。

ウイ、アー！

だって俺たちを創造した神が

俺たちを救済するためについに生まれたんだよ。

ウイ、アー！ ウイ、オー！

だって今夜生まれたんだから。

参考文献 (() 内は引用文献の略号)

- Academia de la Llingua Asturiana (1998, 2001³). *Gramática de la Llingua Asturiana*, Oviedo: Academia de la Llingua Asturiana (=GRAM)
- Alonso, Martín (1986). *Diccionario medieval español: desde las Glosas Emilianenses y Silenses (s. X) hasta el siglo XV*, Salamanca: Universidad Pontificia de Salamanca (=MED)
- 荒井献編 (1997). 『新約聖書外典』東京：講談社
- Corominas, Joan *et al.* (1980-1991). *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico* (6 vol.), Madrid: Editorial Gredos (=CDCE)
- Encina, Juan del (1998). *Teatro completo. Edición de Miguel Ángel Pérez Priego*, Madrid: Cátedra (=PPCA)
- Encina, Juan del (2001). *Teatro. Edición de Alberto del Río*, Barcelona: Editorial Crítica (=DRCR)
- 秦剛平 (2009). 『美術で読み解く 聖母マリアとキリスト教伝説』東京：筑摩書房
- 廣澤明彦 (2005). 「アストゥリアス語の特徴 — 動詞の形態について —」, 『拓殖大学語学研究』110号 (拓殖大学言語文化研究所), pp.229-278
- 廣澤明彦 (2008). 「『レオン方言』(1906年) から『アストゥリアス語文法』(1998年) へ — 形態の比較」, 『学苑』809号 (昭和女子大学近代文化研究所), pp.49-60

- 廣澤明彦 (2011). 「ファン・デル・エンシーナ「牧人劇」に現れるレオン方言的特徴の考察 — 「牧人劇 I」 —」, 『拓殖大学語学研究』 125 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp.101-147
- Jones, R. O. *et al.* ed. (1975). *Poesía lírica y cancionero musical. Juan del Encina*, Madrid: Castalia
- ホセ・ガルシア・ロベス著, 東谷頼人, 有本紀明訳 (1976). 『スペイン文学史』 東京: 白水社
- 加藤隆 (2004). 『福音書 = 四つの物語』 東京: 講談社
- 共同訳聖書実行委員会 (1992). 『新約聖書 詩編つき』 東京: 日本聖書協会
- Menéndez Pidal, Ramón (1906, 2006). *El dialecto leonés (edición conmemorativa 1906-2006)*, León: El Búho Viajero (=MPL)
- Menéndez Pidal, Ramón (1904, 1999²³). *Manual de gramática histórica española*, Madrid: Espasa Calpe (=MPM)
- 中岡省治 (1993). 『中世スペイン語入門』 東京: 大学書林
- Pedraza, Felipe B. *et al.* (1980). *Manual de literatura española. II Renacimiento*, Estella (Navarra): Cénlit Ediciones (=MLER)
- Real Academia Española (2001). *Diccionario de la lengua española* (22^a ed.), Madrid: Espasa-Calpe (=RAE)
- Real Academia Española (1963). *Diccionario de autoridades* (ed. facsímil), Madrid: Gredos (=AUT)
- 新改訳聖書刊行会 (翻訳) (2005). 『聖書: 注解・索引・チェーン式引照付』 東京: いのちのことば社
- Sullivan, Henry W. (1976). *Juan del Encina*, Boston: Twayne Publishers (=SJE)
- 高橋正武 (1956). 『西和辞典』 東京: 白水社 (=TSW)
- 田中秀央 (1952, 1992). 『羅和辞典』 東京: 研究社 (=LLJ)
- 寺崎英樹 (2011). 『スペイン語史』 東京: 大学書林
- Ubieta, José Ángel ed. (1976). *Biblia de Jerusalem*, Bilbao: Desclée de Brouwer
- Weber, Robert *et al.* ed. (1969, 2007). *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft (=『ウルグータ版聖書』)
- ヤコブス・デ・ウォラギネ著, 前田敬作他訳 (2006). 『黄金伝説 3』 東京: 平凡社
- Zamora Vicente, Alonso (1960, 1989¹). *Dialectología española*, Madrid: Gredos (=ZVD)

『拓殖大学 語学研究』投稿規則

1. 目 的

『拓殖大学 語学研究』（以下、「紀要」という）は、研究成果の発表を含む多様な発信の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

2. 発行回数

本紀要は、原則として年2回発行する。その発行のため、以下の原稿提出締切日を厳守する。

- (1) 9月末日締切 — 12月発行
- (2) 11月末日締切 — 3月発行

上記の発行に伴い、言語文化研究所（以下「研究所」という）のホームページにも掲載する。

3. 投稿資格

投稿者（共著の場合には少なくとも1名）は、原則として拓殖大学（以下「本学」という）・拓殖大学北海道短期大学の専任教員ないしは、研究所の客員研究員を含む研究員でなければならない。

ただし、次の者は、言語文化研究所会議（以下、「会議」という）が認めた後、紀要に投稿することができる。

- (1) 本学講師
- (2) 研究所講師（公開講座担当）
- (3) 研究所客員研究員
- (4) 本学大学院生（博士後期課程）
- (5) 上記以外に、言語文化研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という）が投稿を依頼することができる。

4. 著作権

掲載された記事の著作権は、研究所に帰属する。

したがって、研究所が必要と認めたときはこれを転載し、また外部から引用の申請があったときは研究所で検討のうえ許可することがある。

5. 執筆予定表の提出

紀要に投稿を希望するものは、『拓殖大学 語学研究』執筆予定表を、毎年4月

の決められた日までに研究所に提出する。

6. 投稿原稿

- (1) 投稿原稿は、①論説②研究ノート③調査報告④資料⑤書評⑥紹介⑦抄録⑧その他のいずれかとする。

記事の区分・範疇については別に定める拓殖大学言語文化研究所『拓殖大学語学研究』執筆要領（以下、「執筆要領」という）に従って投稿者が指定するが、編集委員会は、投稿者と協議の上、これを変更することができる。

- (2) 研究所からの研究助成を受けた研究に係わる原稿は、原則として論説とする。
(3) 投稿原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として以下のとおりとする。

①	日本語論文による原稿	20,000字以内（1行33文字，27行）	A4縦版 ・ 横書
②	日本語以外の言語による原稿	20,000字以内（ダブルスペース，20枚以内）	

上記分量を超えた投稿原稿は、編集委員会で分割掲載等の制限をおこなうこともある。

投稿者の希望で、本紀要の複数号にわたって、同一タイトルで投稿することはできない。

ただし、編集委員会が許可した場合に限り、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で全体像と回数を明示しなければならない。

- (4) 執筆に際しては、別に定める執筆要領にしたがうものとする。
(5) 投稿原稿の受理日は、編集委員会に到着した日とする。
(6) 投稿は完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
(7) 投稿原稿数の関係で、紀要に掲載できない場合には、拓殖大学言語文化研究所長（以下、「所長」という）より、その旨を執筆者に傳達する。

7. 原稿の審査・変更・再提出

- (1) 投稿原稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が決定する。
(2) 提出された投稿原稿は、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
(3) 編集委員会は、投稿者に若干の訂正あるいは書き直しを要請することができる。

- (4) 編集委員会は、紀要に掲載しない事を決定した場合は、所長名の文書でその旨を執筆者に通達する。
- (5) 他の刊行物に既に発表された、もしくは投稿中の原稿は、紀要に投稿することができない。

8. 校 正

掲載が認められた投稿原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、編集委員会と所長が三校を行う。

この際の校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。

校正は、所長の指示に従い、迅速に行う。

校正が、決められた期日までに行われない場合は、紀要に掲載できないこともある。

9. 投稿（原稿）料，別刷・抜刷

投稿者には、一切の投稿（原稿）料を支払わない。

投稿者へ別刷を、50部までを無料で贈呈する。それを超えて希望する場合は、有料とする。

10. 発行後の正誤訂正

(1) 印刷の誤りについては、著者の申し出があった場合にこれを掲載する。

(2) 印刷の誤り以外の訂正・追加などは、原則として取り扱わない。

ただし、投稿者（著者）の申し出があり、編集委員会がそれを適当と認めた場合に限り掲載する。

11. そ の 他

本投稿規則に規定されていない事柄については、その都度編集委員会で決定することとする。

12. 改 廃

この規定の改廃は、会議の議を経て、所長が決定する。

附 則

この規則の規程は、平成 21 年 3 月 31 日から施行する。

『拓殖大学 語学研究』執筆要領

1. 用語

用語は、日本語又は日本語以外の言語とする。

ただし、日本語以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に言語文化研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という）に申し出て、その承諾を得たときに、使用可能とする。

2. 様式

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿（A4用紙を使用し、横書き、1行33文字×27行でプリント）2部を編集委員会宛に提出する。

- (1) 数字は、アラビア数字を用いる。
- (2) ローマ字（及び欧文）の場合は、ダブルスペースで32行。1行の語数は日本語33文字分とする。
- (3) 上記以外の様式にて、投稿原稿を提出する場合には、編集委員会と協議する。

3. 表紙

投稿原稿と一緒に、『拓殖大学 語学研究』投稿原稿表紙に必要事項を記入、「拓殖大学言語文化研究所ホームページへ公表承認印」を捺印し、原稿提出期日までに添付する。

投稿分野・区分については、以下に付記する。

4. 図・表・数式の表示

- (1) 図・表の使用は、必要最小限にし、それぞれに通し番号と図・表名を付けて、本文中に挿入位置と原稿用紙上に枠で大きさを指定する。図・表も分量に含める。
- (2) 図および表は、コンピュータ等を使って、きれいに作成する。
- (3) 数式は、専用ソフトを用いて正確に表現する。

5. 注・参考文献

注は、本文中に（右肩にパーレンで）通し番号とし、執筆者の意向を尊重して脚注、後注とも可能とする。

また、引用・典拠の表示は各言語の一般的な方式に従うものとする。

6. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4版用紙（縦版、横書き）にプリントした完成原稿1部と論文の電子媒体（FD等）を提出する。

完成原稿の電子媒体（FD等）での提出時に、コンピュータの場合は使用機種と使用OSとソフト及びバージョン名を明記する。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿論文データを保管しておくこと。

これは、印刷経費と校正時間の短縮のためである。

7. 改 廃

この要領の改廃は、言語文化研究所会議の議を経て、言語文化研究所長が決定する。

附 則

この要領の規程は、平成21年3月31日から施行する。

付 記

投稿分野・区分の定義について

① 論 説	(1) 研究の課題，方法，結果，含意（考察）について明確になっている。
	(2) 方法，技術，表現などが一定の水準に達している。
	(3) 項目(1)の事項について独自性がみられる。
② 研究ノート	(1) 研究の中間生産物として考えられるもの。
	(2) 論文に準じる形式のもの。
③ 調査報告	専門領域に関する調査
④ 資 料	上の範疇以外で教育・研究上有用であると考えられるもの。
⑤ 書 評	専門領域の学術図書についての書評。
⑥ 紹 介	専門領域に関するもの
⑦ 抄 録	言語文化研究所研究助成要領第10項(2)に該当するもの。
⑧ そ の 他	

執筆者紹介

- 千葉 一 幹 (商学部教授, 比較文学・日本近代文学)
安 富 雄 平 (外国語学部教授, スペイン語学・外国語教育)
末 延 俊 生 (政経学部准教授, 統語論・意味論・インドネシア語学)
狩 野 紀 子 (外国語学部准教授, 英語教育, CALL)
平 山 邦 彦 (外国語学部准教授, 中国語学・現代中国語文法)
永 江 貴 子 (外国語学部准教授, 中国語学・現代中国語文法)
塩 崎 智 (外国語学部教授, 比較文学・日米文化交流史)
廣 澤 明 彦 (外国語学部准教授, スペイン語学・スペイン語文法研究)

編集委員／山田政通 (外国語学部教授), 渡辺勉 (商学部教授), 阿久津智 (外国語学部教授), 小林孝郎 (外国語学部教授), 松下直弘 (外国語学部教授), 浅井澄民 (外国語学部准教授), 狩野紀子 (外国語学部准教授)

拓殖大学 語学研究 第129号

平成25年12月20日 印刷

平成25年12月25日 発行

(頒布1200円)

編集兼発行人 山田政通
言語文化研究所所長

発行所 拓殖大学言語文化研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14

TEL 03(3947)7595(直通)

印刷 株式会社 外為印刷